
僕と失われた両目

青龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と失われた両目

【Nコード】

N1496W

【作者名】

青龍

【あらすじ】

学園祭の憂さ晴らし・・・それを明久が受けることに・・・両目をなくしてしまった明久は、不思議な力を目覚めさせる・・・オリジナル試召戦争を含めた原作とごちゃ混ぜになった作品をどうぞ！

プロローグ（前書き）

初めての小説となります・・・

ブログ

はじめまして

この作品をデビュー作として書いていきます青龍せいりゅうといいます
不躱ぶしっけながら文としてはまだまだ未熟・・・

そんな私でも、読んでいただけることに感謝いたします
更新はカメ以下になることが多いことになります

それでも、暇つぶし程度に読んでいただければ幸いです

感想から要望、指摘などがあれば、書いていただけると嬉しい限り
です

多少の誤字はご了承ください

それでは、僕と失われた両目・・・最初、多少暗いですが、お楽しみください！

設定（前書き）

話の全貌が見えなくてすみません＞＜

設定

吉井 明久

ある事件によって、両目を失ってしまった
この事件によって力が目覚めた・・・?!
バカだけど人のためなら手段は選ばない

姫路 瑞希

明久のことを・・・

手料理は殺人級 またはそれ以上

成績優秀 天ね・・・純粹

島田 美波

姫路同様明久のことを・・・

照れ隠しに関節技を決める 素直になれない自分に嫉妬
数学はBクラス並

坂本 雄二

Fクラス代表

霧島 翔子に弱い

明久の悪友 それでも、周りのことは視界に入れている

木下 秀吉

第3の性別 秀吉をもつ男の娘
男と言いつ張るが、無駄のよう・・・

演劇部所属、声真似が得意

土屋 康太 別名寡黙なる性識者^{ムッリーニ}

趣味は盗撮、盗聴

設定（後書き）

変な人物紹介になってしまいました・・・
これからよろしく願います

プロローグ2（前書き）

これが本当のプロローグです・・・
少しミスしてしまっただけ・・・

プロローグ2

学園祭、終わったあああああ！！

ああ・・・疲れた…あんな親密な説教とはね、補習室送りと同じくらい・・・いや思い出したくないからやめよう
今日はゆっくり寝よう

「……あいつが吉井ってやつか？」

「……ああ…カラオケボックスではよくも…」

ん？ 雄二が満面の笑みを浮かべたぐらい気持ち悪い感じが・・・
まあ…気のせいだね 疲れてるし

「……人通りの少ないところで捕獲しろ…」

……うーんボソボソ聞こえるなあ…隠れてると思ってるのかなあ…
僕がどうかかわかんないし

「………今だ！！」

「」「」「うおお！！」「」「」

「…っ！？何を！」

こいつら…ん？こいつらは…姫路さんたちを誘拐したゲス共だな…

・
早く切り抜けて・・・っ！体力の限界か！？くそ・・・こんなことになるんだったら体力つけておくんだった…！

そうして僕は意識を手放してしまった………

ブログ2（後書き）

短い!!

予想以上に短かった!!？

すみません短すぎました・・・

第一話（前書き）

えぐいです・・・

ぐろいです・・・

お気をつけください><

第一話

「……………りまし……………で、こいつ……………どう……………しよう……………」

ん……………この声……………あいつらか……………何をしゃべっているんだ……………ばれないようにまだ気絶している振りして様子を伺うとしよう……………

「そう……………な……………どうし……………か」

相談か さて、どうやってきぬけようかな

手……………は動くな 足……………も動く よし、時期をみはかろう

「こいつ……………られた……………倍返……………で……………どうだ？」

こいつは僕であってるな 倍返し 痛そうだなね

はあ、僕じゃなくて雄二のほうがいいと思うけどな……………

これはやっぱり教頭の筋金か？

「もっと……………むごい……………に……………してやり……………ま……………しょ……………」

むごい 痛そう 死なない程度がいいなあ じゃなくて！

どうやって 切り抜ける！……………

「もう……………きないよう……………目……………えぐ……………や……………ま……………か？」

「それが……………い……………それ……………い……………か」

目 えぐる！！？ ちょっとまって！？そこまで僕してないよね！

雄二の虐殺に比べたら……………ね

ガチャ……………キイ

早い早い!!!

「まだ起きてねえか…」

「今のうちにやっちまいますか？」

「フツやるか！」

ちょっと待つてよおおおお!! 早いってばあ!!

一人暮らしだから誰も不審には思わないか くそつ

「ナイフ…2本もつてこい！」

「はいはい クツクツク」

2本!!!!!!?? 両目!?

ええええええええええええええええええええええ!!!!
こつなつたら強行突破!!

ガバツ!!

「っ!!こいつおきてやがった！」

1…2…3…4… ざつと5人か…

「1人目!!!」

「h j gふあふいあ!!!!!!」

思いつきり股間を蹴り上げてやった 次!

「2人目!!!!」

「あがぁ！！！」

回し蹴りヒット！！！！ ナイス！僕！！！！

「3人目！！！！」

「ごふう！！！！」

近くの棒で後頭部強打！ いったそ・・・

「4人…っ！」

後ろから羽交い絞め！！？ 卑怯な！！（雄二より卑怯だ！）
ナイフ二刀流！？格好良くないよ！？

「観念しろ……借りを返すぜ……」

「ちよっ！！待っ……」

グサッ ぐちょ……グチュ……

それが僕の最後に聞いた音で意識を手放してしまった……

第一話（後書き）

うん・・・

微妙な………

遅くなりますが、よろしくお願いします

第二話（前書き）

明久が目を覚まします！

第二話

「……さ君!!……ひさ君!!」

「……き……さ!!あ……ひさ!!」

「目を……ませ!!あき……さ!!」

「目を覚ますのじゃ!!明久!!」

「アキ!!目を覚まして!!アキィ!!」

この声……姫路さん……心配そうな声だね……

雄二……どうしたの

?雄二らしくないよ?

ムツツリーニ……口調が変わってるよ……

秀吉……劇の練習???

美波……叫んでると声かれちゃうよ?

そろそろ起きようかな……心配かけまくっちゃうから

「………んっ!………」

「「「「「!!!?」「」「」「」

「起きたか!?明久!」

「う……ん……」

あれ? 真っ暗……電気付いてないのかな?

カーテンとか?

「ね……雄二……」

「何だ?」

「カーテンってあいてる? 電気は?」

「………」

だまっちゃってどうしたのかな? 停電?

「明久…… よく聞けよ……」

「うん…?」

前置きが長いよ雄二 さっさと教えろや!

「お前の両目はもう……なにも見えないんだ…」
「……………え?」

ミエナイ? ナニモ…… ジャアコレカラハドウヤツテ…
っ!!

「明久君……ひつく……明……さ君……ひつく……」

「姫路さん……泣かないでね」

「アキ……ひつく……ごめっ……助けっ……なかつ……ひつく……」
めっ……」

「謝らなくてもいいよ 美波……」

僕はそういうと二人の頭の上に手を乗せた

なぜだか二人の言葉を聞いちゃうと絶望的だった僕の考えなどごみのように見えてくる…

ありがとう二人とも

「おい……明久」

なんか雄二驚いたような感じだね

「何?雄二」

「なぜ……二人の位置がわかる……!」

なぜって……わかんないなあw

「うーん、なんか頭の中に書かれるっていうか感じる？人だけじゃなくて物もわかるよー
柄とかもねw」

「すごいのう…明久」

「……俺でもできない」

何と比べているんだよ！ムツツリーニ！！

コンコン

「あ、はい、どうぞー」

ガラッ タッタッタ

え？ええ？ ちょ…なんでこの人たちここにいるの！？

第二話（後書き）

微妙なオリキャラ次回登場します

設定2（前書き）

ちよつと微妙なオリキャラです

設定2

吉井 悠斗 ゆうと

明久の父親

明久の天然は父親に似ている

人のためならがんばれるその気持ちは明久も受け継いでいる

吉井 晶子

明久の母親

明久が料理好きでうまいのは母親に変な入れ知恵をされたからである
(料理はね、地位が一番低い人がやるものなのよ)と……

吉井 玲 あき

明久の姉

明久のことを一人の男性として愛している

天然は明久や姫路よりはるか上

料理は姫路と同じく殺人級かそれ以上である

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

家の中では母親>姉>明久>父親 ということになっている……

設定2（後書き）

以上になります

第三話（前書き）

微妙なオリキャラ含めての第三話となります

第三話

「明久、大丈夫？」

「アキ君大丈夫ですか？」

「調子はどうだ明久……」

ちよおおおおおとまつたあ！！！！！！　　なんで！？どうして！？
ええええええええええ！！

「えつとどちらさまで……？」

「あ、雄二この人たちは……」

「吉井明久の母　吉井晶子です」

「同じく姉の　吉井玲です」

「同じく父の　吉井悠斗です」

海外にいるはずなんだけどなあ………
どうしていきなりこっちへ戻ってくるんだろう？

「アキ君が心配だからですよ」

「ああ、なるほどねえ……ってなんで僕の思っていることがわかるんだよ……」

「姉弟だからですよ」

「なるほどね………ってわかるかあああ……！！！！」

くそっ！はめられた！！

「いつもの明久だな」

「じゃな」

「……だな」

「ですね」

「そうね」

「満場一致！！？ 打ち合わせでもしてた！！？？」

なんていいチームプレーなんだ！！みんなそろって僕のことを馬鹿にして…畜生！！！！ん？

いきなりみんな別行動し始めた？ 姫路さんと美波は必死に…？赤面で僕の両親に会話中か…

ムツリーニはやっぱり盗sもとい写真撮影してる…雄二はブツブツ言ってる…あ、電話にびびってる

霧島さんか？ 秀吉はーっと、僕のほうに向いて固まってる…へ？

「秀吉？どうかした？ 僕の顔になんか付いてる？」

「いや、何も付いてはおらぬ…のう明久」

「なに？」

「学校に着てくれるのはうれしいぞい…じゃが、テストはどうするのじゃ？」

忘れてた…かけるのかな？字…読めるかな？

「そうじゃ！紙に質問をかくから書いて答えてほしいのじゃ」

「ん、了解」

サラサラサラ〜

「できたぞい！」

「ありがとう、秀吉」

えーっと…あなたの名前は？ 吉井明久 っと

次は・・・どこの高校に逝っていますか？　ちょ・・・秀吉・・・
字、違うよ　まあいいや文月学園と

「できたよーっ」

「うぬ・・・・・・・・・おお！すべて答えられていないか！」

「ほんと？」

「うぬ！」

これなら普通に生活ができるだろう！　　やったね！

「じゃあ、戦力にも入るな！」

「戦力って？」

「ああ、言ってなかったな　そろそろ全校試召戦争が開催されるんだ」

「全校試召戦争？」

「ああ、全校といっても学年だな」

「・・・くわしいことはこれ・・・」

「ありがと、ムツツリーニ」

なにに・・・他のクラスとの協力禁止、ちえ・・・

教室を壊すの禁止　あははは・・・僕か・・・

脅迫禁止　根本のくそやろうか・・・

・・・
・・・
・・・
・・・

殺すの禁止　何でもありか　　半分以上Fクラスがやったことある
実例だなあ・・・

「わかったようじゃな」

「まあねー」

ん？発行日・・・一ヶ月前？

「ねえ・・・この全校試召戦争っていつ公表されたの？ 僕覚えてないけど」

「覚えてないも何も だってお前は一ヶ月意識不明だったんだぞ」

ふーん一ヶ月意識不明ねえ・・・一ヶ月 え？

「長すぎだろ！？」

「その反応の遅さ！まさに明久だ！」

バカにしたなこのゴリラ・・・

「あ、そうそう明久」

「何？母さん」

「さっきお医者様から聞いたけど今日のうちに退院できるそうよ」

「マジ！？ やったあ！！これでまたムツツリーニから例のものが秀吉の写真買えるー！」

よっしゃ！秀吉の写真♪

「ふふっそんなにほしいものを買いたいのなら玲を監視代わり」

「全力でお断りさせていただきます」

「ひどいです アキ君・・・」

ぼくは一人暮らしを気に入っているんだ！！ 邪魔されてたまるか！

「じゃあ、そろそろ・・・」

「もう?」

「父さんも母さんも玲も、仕事を無断で抜けてきたのよ」

無断で!? 無断でっていった?! この人! うれしいって言えばうれしいけどさ!
まあいいや

「がんばってねー・・・・・・・・・・それと・・・ありがと・・・」

行っちゃった・・・

「さあ・・・白状してもらおうか? 明久」

「へ?」

「明久君の目のことについてですよ」

これねえ・・・

「ううゝ僕の説明でわかるかな?」

「明久の説明じゃきついな・・・」

なんだと!! このくそゴリラ!

「とにかく! 説明するよ!」

30分後

|

第三話（後書き）

次は説明後のみんなの反応です
明久がなんかいつもと違うような・・・

第四話（前書き）

女子（秀吉を除く） がしょぼんと・・・
明久は慰めることができるのか！

第四話

「あいつら……」

「むう……」

「……まだ足りなかったか……」

まだ足りなかったかって ムツツリーニ……でも、僕の不注意が原因だし……

「まあ、おぬしが生きておったことがうれしいぞい」

「……客が減るよかった」

ムツツリーニ 本心バレバレだよ…… 僕も死んだらいやだったからね

「……」

「どうしたの二人とも？」

「ウチノ私のせいで……」

そのことだったのか……気にしなくてもいいのに……

「気にしないで……悪いのはすべてあいつらだから！」

「でもっ！」

「美波」

「ですけど……」

「姫路さん」

本・当・に

「気にしなくていいよ・・・二人の笑顔が僕の力になるから」
「ありがとう」

よかった・・・笑ってくれた・・・ あ。

「みんな、そこ並んで」

「「「「「???」」」」」

「改めて、今回のことについて、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした・・・」

それから、僕のために心配してくれてありがとうございました」

そういつて僕はできる限り頭を下げた

みんなどんな反応するかな？ 呆れる？ 怒る？

「ったく・・・バカにはにあわねえよそんな言葉」

「バカって・・・失礼な!!」

「そうじゃろ？」

「ひっ秀吉・・・」

「・・・（コクン）」

「ムツツリーニイ」

くそ・・・みんな頭の中身は バカ!!僕 となっているのか!?

いや、なっているに違いない

こうなったら今度こそ、その頭を割って中身をきれいさっぱり洗い流してやる!

「ごめん・・・雄二にはなかったね」

「何の話だ？」

「なんでもないよ・・・」

あつぶない・・・ばれたらどうなるか・・・

「ふふっ」

「あははっ」

????? いきなり笑い出した?どうしたんだろ姫路さんに美波・
・・・

「「これでこそアキノ明久君 ね/ですね!」」
「うゝん??褒められてるの?」

いったい・・・どっちだろう うゝん

「クツクツそろそろ俺らは帰るぞ」

「あ、うん また明日・・・合えるといいけど」

ガラガラガラ ピシヤン

二日目

昨日の夕方僕は退院できた まさか、姉さんが家にいるとは思わ
なかったけどね・・・

びっくりさせられたよ・・・ まさか・・・うゝんなんでもないや

思い出したくない・・・

さて・・・と 雄二にメールしておこう

(学校には午後あたりから逝くよ) 字はあながち間違いではな

いだろう姫路さんの手料理 うぷ

思い出しちゃった・・・

「あ、姉さんメガネって持ってる？できれば伊達メガネ」

「ありますよ アキ君ついにメガネっ娘にめざm」

「目を隠すため!!」

「何だ・・・つまないですね・・・」

つまなくて結構だ！ まったくこんな姉！

「いつてきまーす！」

「アキ君、姉さんも行くのわかってますよね」

「もちろんじゃないか 姉さん《すっかり忘れてたよ》」
「アキ君、本音がダダ漏れですよ」

しまった！つい・・・

「まあいいから、早く学校に行こうよ！」

「わかりました アキ君はせっかちですね」

「久しぶりのFクラスだ!!」

「入りますよ」

みんなどんな反応かな？

ガラッ シーーーーーン

「何？何なの！？この静かさ！」

「アキ君うるさいですよ」

姉さんに言われたくない

「よ、よう明久」

「うん・・・」

「明久ちょっとこっち来い」

「うん」

何のために・・・

「いいか！お前ら説明聞き逃すんじゃないぞ！ 明久はな――

――というわけで両目が見えないんだ 全校試召

戦争では全力で明久をサポートしろ！！」

「「「「「「「「「「「うおおおおおお！！！！」」」」」」」

「「「「「」

「ありがとう」

すごく嬉しいよ・・・ 見えないな・・・僕笑えてるかな？

第四話（後書き）

ついに退院できました・・・
団結力のよさ・・・こんなものですかね？

第五話（前書き）

明久の怖い一面
ご覧ください

第五話

「では、いつてらっしゃいのチュウを」

「姉・さん・？ コ・コ・ハ・ド・コ・デ・ス・カ？」

「学校ですよ？」

「家と同じような言動は慎んでください（怒）」

「分かりました・・・」

「「「「「「「「（怖い!!）」「「「「「「「「

まったく場所を選んでよね・・・ああもう!!!

「えーっ・・・明日の試召戦争の作戦は以上だ・・・各自勉強を怠らないように!!!」

「「「「「「「「おおおおおお!!!!!」「「「「「

よし、戦力になって見せる!!!!!!

「???ムッリーニ?僕の写真はうれないよ?」

「・・・・・・（ブンブンブン）」

まあ・・・いつか

「おお、そうだ明久 その力教師どもはしってるのか?」

「うっん、言っていないから知らないんじゃないかな?」

「それならいい」

悪い顔してるなあ・・・いい作戦でも思いついたのかな?

「いってきまーす!」

「いってらっしゃい」

今日は、早めに付きそうだ

「吉井、ちょうどいい この資料を2・Aに届けてくれないか?」

「ええ．．．!! やります! やらせていただきます!!!」
「フツ」

鉄人め．．．あの顔には「逃げたら補習」と書かれていた．．．
・あのくそ教師．．．
まあいいや、Aクラスつと

「失礼します!」

「．．．．．どうしたの吉井」

「資料だつて．．．鉄．．．西村先生から」

「．．．．．ありがとう」

「失礼しました!」

Fクラスへ行こう 時間かかつちやつた

ん? あれは．．．変態コンビ．．．なんで2年の教室なんかに．．
・
・

「Fクラスに仕掛けでもつけてくか?」

「そうすりゃ失格にすることも可能だな」

あーあ無駄なことを．．．

「そういえば、吉井のうわさ聞いたか？」
「噂？」

何それ・・・知らないぞ・・・？

「目が見えないんだってよ」

「マジか！？　そういうことならあいつを使って・・・・・・・・・・」

「

ん？最後のほう聞きづらいな・・・　それにしても、どうしてそんなに早く噂が広まってるんだ？

この手のことは・・・　根本しかないね
まあいつか　雄二に相談しようか　Ｆクラスへ」

「おはよ」

「おう」

「おはようなのじゃ」

「・・・・・・おはよう」

「おはようございます」

「おはよー」

よし、何事もなかったかのように振舞うとしよう！

僕にそんなことできるのかな？　ハッ！僕が自分でバカだといっているようなことじゃないか！！

あ、そうそう

「ねえ、雄二」

「なんだ？」

「常夏コンビ、僕が目　見えないことしてたよ」

「何だって！！？」

すっごい驚いてるなあ・・・

「話し合いを聞いて分かったことだよ」

「ということは・・・根本絡み・・・という線が怪しいな・・・
だったら明久を・・・」

聞こえないな？なんて言ってるんだろ・・・

まあ、えげつないことには違いないね・・・

パンツ　パンツ　パンツ

ん？ムツツリーニを呼んでどうするんだろ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シュッ

あ、行っちゃった

「なに話してたの？」

「いや、後になれば分かる・・・クッククック」

いやな予感しかしないのは僕だけだろうか・・・

「秀吉・・・ちよつと」

「なんじゃ？雄二」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そのようなことならばお安い御用じゃ！ー！」

自信満々な秀吉の声　かわいいなあ　　つとじゃなくて何の話かな？
ん？秀吉がこつち向いて満面の笑みを浮かべているが　僕には背筋
を凍りつかせれるような笑みに見えた・・・

第五話（後書き）

次回、明久が女装します

秀吉が・・・・・・・・怖いです・・・

お楽しみに・・・

第六話（前書き）

ムツツリーニ 一体君はどこからそんなものを・・・

明久の女装です 想像妄想してお楽しみください

第六話

秀吉の不思議な笑みを見たすぐ後、雄二の下にムッツリーニが帰ってきた

何持ってるのかな？

「……………約束のもの……………」

「サンキュ……………報酬はこのビデオテープでどうだ？」

「……………！！！！ 交渉成立……………（ボタボタボタ）」

何をムッツリーニに見せたんだ！雄二！！ 出血多量じゃないか！死んじゃうよ！？

あ……………生きてた……………だんだん体制ができてるのかな？

！！！？！？雄二の手には文月学園の女子の制服！！？ ああ、雄二ついにそちの道へ進んでしまったんだね……………

「これはお前が着るんだぞ」

「なんだってー！！！？？」

「自覚してるんじゃないか」

しまった！雄二の卑劣な罠にかかってしまった！

「パチンッ」

指鳴らして何の……………え？秀吉？ なんて制服もって僕に にじり寄ってくるの？！
普通なら嬉しいはずなのに……………恐怖を感じるな……………

「明久……………これを着るのと鉄人の補習……………どっちがいいかのう」

「わぁ・・・秀吉・・・素敵な冗談だね・・・」

「やってみようかの？」

「何でもありません 着ます・・・着ますから！」

秀吉がなんか男らしい・・・気がしない・・・

「なんじゃ？」

「ひっ・・・なんでもありませんっっ！！」

「いついやあああああああ！！！！」

・・・秀吉・・・思いつき楽しんでたね・・・ 今までにない最高の笑顔だったよ・・・

「最高傑作じゃー！！」

「さすが秀吉だな・・・明久には見えないぞ」

そりゃあね・・・いつもと違うウィッグだったもん・・・

今の僕は、ウィッグ（黒）に、ポニーテール（僕の趣味）女子の制服 メガネ・・・という格好

それにしても・・・

「雄二・・・ゴリラみたいだよ・・・おっと訂正 ゴリラ・・・雄二
みたいだよ？」

「歯を食いしばれ・・・！！」

冗談なのに通用しないなあこのゴリラ・・・ あ、言葉がわかんないのか！

「雄二・・・お主・・・最高傑作じゃとわしは言っただけじゃが

？」

「じょ・・・冗談だ　秀吉・・・だ・・・だからその顔は・・・
（ガクガクブルブル）」

この雄二の怯えよう・・・霧島さんに睨まれたみたいだね・・・ア
ハハハハ・・・
さ、さて・・・秀吉の顔って・・・どうしたの？般若のお面かぶっ
てるの？

「ふう・・・演劇部の準備をしてくるぞい・・・雄二・・・わかつ
とろうな・・・」

「わ、分かってる！」

「もし・・・やったら・・・霧島にこのメールを送るぞ・・・」
「・・・（ブンブンブンブン）」

あ、ムツツリーニみたい・・・

「いつてらっしゃーい」

「明久・・・テメエ・・・」

「こっ、怖いよ？雄二」

冗談なし・・・

「おらあああああ！！！！！」

「こうなったら最終手段！ハア・・・雄二に襲われるうー！！！！！」
「てめっ・・・なんてこと叫びやがる！」

よし・・・これで！

「これより異端審問会を始める・・・異端審問会とは・・・」

「「「最後の審判を下す法廷」」」

「異端者には・・・」

「「「死の鉄槌を・・・」」」

「男とは・・・」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの」」」

うんうん、よし

「まてっ！誤解だあ！！！！！」

「異端者坂本雄二 判決」

「「「死刑」」」

即決でいいね

「あいつは明久だぞ！」

なんてことを！！！！！！

「なに・・・吉井明久だと・・・」

ザワザワザワ

「アキちゃん最高！！！！！」

「「「そうだー！！！」」」」

「なんだってー！！！！！」

おお・・・明久はだめでも アキちゃんならいいの！！？
ガラッ

「ただい・・・！？ どうしたというのじゃ」

「雄二が僕を殴ろうとしたから 叫んだまでさっ！」

「わしも参加してくるぞ・・・」

「え？ええええ？？」

なんで？どうして？ ええええええ？？？？？
それより・・・詳しいルールちゃんと聞かなきゃ・・・

「ねえ・・・ゆうつ」

ん？あれは・・・

「ひーめっじさん！」

「はわわあああ」

そんなに驚かなくても・・・でもかわいいなあ

「今回の試召戦争何時から知ってる？」

「えーつとですね・・・7：00からです」

「7：00からか・・・って 過ぎてるじゃん！！！！！！」

「はわっ・・・本当ですね・・・」

「ありがと！姫路さん！」

くそ・・・あの似非代表が！！

「雄二！！！！試召戦争始まってんじゃないか！！！」

「ああ・・・その河を渡ればいいんだろ・・・」

「くそっ！使い物にならない！」

「ムツッリーニ！スタンガン！」

「・・・・・・了解！」

そう言つて、僕の写真を撮ってから雄二にスタンガンを当てた・・・
あれ？僕の写真取る必要あったのかな？

「……はっ！ああ……もう始まつてるな……」

「なんで最低クラスを最初にやるうとしないのかな？」

「ま、Fクラスはただのバカじゃないからな」

まあ、そうだね…… 壁ぶち壊して 校舎壊して……って両方
僕かよ！！

「そうそう、まずどこを狙う？」

「そうだな……C・D・Eがいいとこだな……」

まあそうだよな……

「……雄二、AがD BがEクラスを落としたらしい……」
「何！？」

珍しい……普通はAとBで戦うと思うんだけど……

まあ、Bクラスの代表は ”あ の” 根本だからな……何するかわ
かんないし……

「……それと……今はAとBでやってる……Bが優勢……」
「」

「……それじゃあ、俺たちの相手はCってことだな！」

「野郎共！Cクラスに向けて出陣だ！」

「」「」「」「」「うおおおおお！！！！！！」「」「」「」
「」「」

やってやるっじゃないの……って……女装して戦争するのかあ
！！？

第六話（後書き）

Cクラスに向けて出陣します

明久の口調がところどころおかしくなっていました・・・

第七話（前書き）

カップリング意味なし・・・な小説になりつつあります・・・

第七話

「第一部隊 行け!!」

「「「「「おおおお!!!!」」」」」

第一部隊 隊長・・・秀吉

第二部隊 隊長・・・美波

第三部隊 隊長・・・姫路さん

防御陣 隊長・・・僕

これなら・・・! ってあれ? 何で僕・・・防御陣?

「ねえ、雄二 何で僕って防御陣なの?」

「バカかお前・・・すまんバカだったな」

失礼すぎるこのゴリラ・・・

「理由は?」

「ああ、常夏コンビが知ってるってことは、少なくとも2年は全員お前の目が見えないことを知っているだろう。そこでお前が先人きって戦いに行ってみる・・・目が見えないのになぜ戦えるんだと不審に思うはずだ・・・」

あ、そっか 僕が目が見えないのに感じる理由なんて僕自身もわからないしねー

「ま、そういうことだ・・・」

ん? までよ・・・もし防御陣まで押し込まれたりしたら、僕の力がばれちゃうじゃないか!

「何のために女装したと思ってるんだ？」

「なぜ僕の心の中で思っていたことが分かる!？」

「俺たちは悪友・・・それくらい分かるさ!」

うーん なんとというか・・・ねえ

「理由は何さ」

「明久だとばれなければいいわけだ、だったら女装がいいところだろう・・・」

なるほどねえ・・・ん？だったらさ・・・変装でよかったんじゃないかな？

「ねえ、雄二 女装じゃなくても変装でよかったんじゃないかな？」
「うぐっ・・・まあ、きにするな!」

そういわれるときにするの分かっていつているんだろうか？

「雄二！援護を頼む!」

「第二部隊 頼む!」

「任せて！代表殿!」

現状は悪くない・・・Fクラスが押している！

これなら・・・勝てる!!!

「「「「「「「「「「うおおおおお!!! 勝ったあああああ
!!!!!」」」」」」」」」」

この声は・・・勝ったんだ・・・良かった・・・

「ムツツリーニ！現状は！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・Bクラスが勝利した。Fクラスの現状は、補習者10人補充試験中が20人というところ」

あわせて30人か・・・結構きついかもね・・・

「・・・・・・・・！今補充試験から15人帰ってきた」

「これならいけるかもな」

根本が何もたくらんでなければいいけどね・・・

「狙いは、吉井明久だ・・・目が見えないのならやりやすい・・・
クッククク」

「了解しました」

何だ・・・悪寒がする・・・

「明久はここに残れ！」

「了解！」

「須川！島田！秀吉！横溝！今井！鈴木！ちょっと付き合え！」

「「「「「おう！／ええ！／うぬ！」「」「」」」」」

勝てるかもね！　そういえば優勝商品ってなんだろう

「姫路さん・・・この戦争の優勝商品って何か知ってる？」

「あ、はい。たしか設備を1つあげることができる　だとおもいま

す」

「そつか、ありがと！姫路さん」

「いえ・・・」

設備を1つあげることができるのか・・・

ガラッ

ん？あれは・・・Bクラスの男子かな？どうしてこんなところに・・・

「吉井はいるか？」

僕だとばらしていいのかな？　だめだ！ばらさないために女装したんだから！

「（姫路さんっ！僕は今いないって言ってくれるかな？）」

「（はい）明久君なら今はいません」

「そうか・・・どこに行ったかわかるか？」

「分かりません・・・お役に立てなくてすみません・・・」

「いやいいんだ・・・そうだ伝言伝えてくれ」

「はい」

「旧校舎屋上で待つと・・・」

「いいですが・・・明久君は目が見えないんですよ？」

「分かっている、誰かと付き添いできてくれと伝えてくれ・・・」

「分かりました」

ガラッ　タッタッタッタ

「なんだっただんたろうね・・・」

「旧校舎屋上・・・といていましたね」

「行ってみようかな」

「危ないですよ！？相手はBクラスですし・・・」

「大丈夫、安心してね姫路さん いざとなったら逃げればいいだけのことだよ」

そうだ・・・逃げればいいんだ

現実からは逃げられないしね・・・

「じゃあ、行ってくるね」

「はい、気をつけてくださいね」

「うん、ありがと」

第七話（後書き）

次は明久が旧校舎屋上に向かいます。

Bクラスの二人組は一体何をたくらんでいるのでしょうか・・・

第八話（前書き）

バカテスト？

質問 今、あなたの願いがかなうとしたら何を願いますか？

吉井明久の答え

目

教師のコメント

．．．．．そうですね．．．

姫路瑞希の答え

素直になれる気持ち

教師のコメント

あなたらしいですね 女子の皆さんは素直になれる人が多いようですよ．．

坂本雄二の答え

自由

教師のコメント

前にも聞いた気がします．．

土屋康太の答え

新しいカメラ

教師のコメント

よからぬことを考えていそうですね・・・

学園長のコメント

なんだい！？願いといっているのに、ほしいものを願うのかい！？
あ・・・それでも願いさね・・・

第八話

着いたけど・・・Bクラスは何を考えているんだろう？
キィ・・・

「吉井は来ると思うか？」

「ああ、たぶんな・・・」

「それにしてもどうやって連れて行くんだよ」

「これを使えばいいだろ」

「そっそんなのどこで手に入れたんだよ!？」

「代表サマさ」

「やりそっだよなあ・・・」

これって・・・なんだろうここからじゃ見えないや
もう少しで見えっ・・・
ドサッ

「うわぁっ!」

「「!?!?」」

やばい・・・

「お前・・・Fクラスにいた女子じゃねえか どうしてここに・・・」

「お前・・・まさか吉井じゃねえよな」

やばいやばいやばいやばい・・・

「とりあえず・・・今の会話聞かれてたら・・・」

「やるか……」

「ちょ……まってよ!」

「この声……お前やつぱり吉井だな!」

畜生!ばれた!

とりあえず逃げよう……人がいるとこじゃできないだろうし……

ガッ

え?

ドサッ

こんなときに限ってこけるの?!!

「ちようどいい……」

「だな……」

「ちよつと待つてよ!」

「待てるか!」

バチッ

これって……スタンガンのことだったん……だ……

ここで意識は途切れてしまった……

「よくやった、これでこの試召戦争は我々Bクラスの勝利だ!」

「はい……」

「それにしても吉井をどうするんですか?」

「吉井をえさにして、姫路を戦闘不能にしよう」

「なるほど……ですが、脅迫禁止だそうだけど……」

「教師にばれなきゃいいんだよ」

「はぁ……」

「……………んっ……………」

「起きたか」

「根……………本君……………?」

「ああ、Bクラス代表根本恭二だ」

「やっぱりこれは根本君の作戦だったんだね」

これぐらいのことでFクラスの士気が落ちるはずがない！

あ、目が見えないように振舞わないといけないのか……………面倒くさいな……………」

「根本君……………悪いけど時間教えてくれるかな?」

「目が見えないのは本当のようだな　今は11:40だ」

「ありがとう……………」

約12:00か……………確か試召戦争終了時刻は……………1:30だったかな?

一時間半で終わらせることはできるかな?

「今から、Fクラスへ向かう……………これでBクラスの勝利は確定だ……………フッフ」

キモイ笑い方だなクソ野郎

おわっ！いきなり首に腕まわされたら首が痛いし、息しにくいだろうが！

「がっ……………」

「ククククク……………」

Fクラスに着いちゃった・・・中は騒がしいな どうしたんだろ
う・・・

ガラッ

「邪魔するぜ」

本当に邪魔だよーこの存在

「「「「「「「「「「明久！？／吉井！？／アキ！？／明久君！？」

「「「「「「「「

「くっ・・・ごめん・・・捕まっちゃったみたい・・・ぐ・・・

」

「吉井の事を思っただったら、Fクラスの負けを認める」

何だって・・・まあ、そんなことで了承するようなやつじゃないよ・
・ね雄・・・

「ああ、分かった」

「な・・・自分がなに言ってるのか分かってるのか・・・！雄
二・・・」

「分かってるからこそ言っただ・・・」

ばかな・・・人を犠牲にしてまで達成するかと思っただのに・・・

「ほう・・・結構簡単だったな・・・ククク」

「雄二・・・僕の・・・我^{わがまま}俥聞いてくれる・・・よね・・・」

「ああ・・・」

「だったら・・・！ 勝て！！・・・僕を犠牲にして構わない
！ だから・・・勝て！」

「お前・・・何を・・・」

「今だから言う！！・・・僕は・・・みんなの居易い場所・・・を・・・作りたい・・・姫路さんが体調を崩さないような・・・望める場所に・・・」

「明久君・・・」

「明久・・・お前・・・」

面白い！！やばいほどおもしろいや！！

「フツ・・・あははははははははははっ！！！！！！」

「やばい！！面白すぎる！！」

「明久！！台詞にない言葉言っなよ！！ククッ」

「最後の言葉は僕の本心だけだね アハハッ」

そう・・・僕の言えなかった本心だ・・・

「なにっ・・・」

「驚くのはまだ早いよ 根本君」

「明久・・・殺つてもいいぞ・・・」

「おうよっ！！」

さあ、思う存分やってやるぞ！

ふう・・・すつきり！！

「吉井・・・お前目が見えないというのはうそだったのか！？」

「いや・・・見えないけど感じる・・・」

「感じるだ！？」

「色まではわかんないけどね」

「さあ、高橋先生・・・Fクラス 吉井明久が Bクラス 根本恭

二に 世界史勝負を申し込めます」

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

「くそっ・・・Fクラスなんかに・・・！！」

Fクラス 吉井明久 Bクラス 根本恭二

世界史 2 1 3 VS 世界史 1 8 1

「僕の勝ちだね」

「明久・・・点数上がったな」

「まあねー」

これで、全校試召戦争はFクラス優勝で幕を閉じた・・・

第八話（後書き）

ここまで、簡潔に述べすぎて所々飛んでますが・・・
これからは原作よりでがんばります

第九話（前書き）

全校試召戦争も終わり

いよいよクライマックスに近づく！

・・・といいですね・・・

第九話

目が見えないけど感じる……このことは学校中に知れ渡ってしまつた……

作戦作りづらいなあ……

あ、そうそう設備はEクラスと同じ設備となつたんだよねー

まあこれで姫路さんは過ごしやすいなつたかな？

「あのつ、明久君！」

「何かな？姫路さん」

「えつと……その……ほつ放課後屋上に来てくださいー！」

タッタッタ

えーつと……デジャヴ？ 前にもあつたきがするなあ……

放課後は用は特になし！

前は行けなかつたから、今日は行こう！

放課後

キイツ……

「……姫路……さん？」

「明久君！来て……くれたんですね……」

「前は来られなかつたから……」

ババアのせい……

「えっと、用って何かな？」

「えっと・・・その・・・あ・・・うう・・・」

「??」

「わっ私は！あ・・・あっ明久君のことが・・・すっ・・・すっ・・・すきです！！」

ハ？ エ？ ナニ？ ヒメジサンハナンテイッタ？

「ごめん・・・ついに耳までおかしくなっみたい」

「もっ・・・もう一回いますっ！ 私は・・・明久君のことが・・・小学生のころから・・・すっ・・・好きでした！！」

聞き間違いじゃないのか・・・目の見えない僕のことを・・・

「・・・僕・・・目が見えないんだよ？」

「わかっていますっ！」

「それでも？」

「それでも・・・明久君のことが好きです！！」

姫路さん・・・本音を言ってくれてありがとう・・・

「僕は・・・姫路瑞希さんのことをずっとまえから好きでした・・・付き合ってください」

「えっ・・・？」

「本気だよ？」

「うっ・・・嬉しいですっ！よろしくお願いします！」

良かった・・・

「よろしく!!」

さあ、これからが大変だ・・・ムツツリー二のことだからどっかに盗聴器が・・・

「第二の異端審問会を始める」

「なにっ!？」

「第二の異端審問会とは」

「「吉井明久と、姫路瑞希を冷やかす会」」

「「ええ!!!!??」」

「これより、予約していたムツツリー二による写真撮影・・・」

聞いてないよ!!!!!!!!!!!!!!???

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ
わぁ・・・はーい

「予約は100枚ほど・・・」

「多すぎるよ!!!？」

「ハッ・・・恥ずかしいです・・・!」

と・に・か・く!!!!

「姫路さん!逃げるよ!」

僕はどさくさに紛れて姫路さんをお姫様抱っこした

「「「「「おお・・・」」」」」

おおってなに!?

「ひゃっ!？」

「ちよつと我慢してね・・・姫路さん!」

教室に着いた・・・

「よし・・・これからが大変だよね・・・」

「でっですね・・・あっあのっ!」

「ん?どうしたの姫路さん?」

「名前・・・で呼んでください!」

名前って・・・瑞希さんって?

「瑞希・・・さん?」

「瑞希でいいですっ!」

「み・・・瑞希・・・(カァァァ」

は・・・恥ずかしい・・・

「じゃあ・・・僕のこと明久で」

「あ・・・明久・・・」

「呼びにくいかな?」

「いいえ!!」

良かった・・・

「よろしく!瑞希」

「よろしく願います!明久」

「・・・」

やっぱり恥ずかしい!!!!!!

「じゃ・・・じゃあ、そろそろ帰ろうか？」

「は・・・はい」

スタスタスタスタ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気まずい！！

「ひ・・・瑞希、家まで送るよ」

「ありがとうございます 明久く・・・明久」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

変わらず！！

うつ・・・どうしよう・・・気まずい！！！！

あ、着いちゃった

「じゃ、また明日ね！瑞希」

「はい！また明日 明久」

僕も家に帰ろうつと

ガチャ・・・

「お帰りなさいアキ君」

あ・・・姉さんにどう伝えよう・・・

「姉さんに話したいことがあるんだ・・・」

「なんですか？」

「実は・・・僕・・・瑞希と付き合うことにしたんだ！」

「・・・・・・・・・・」

「気まずさ再び!!」

「どこをすきになったのですか？」

ええ!!？

「えっと・・・・・・・・かわいいところ・・・・・一生懸命なところ・・・・・そして・・・・・こんな僕でも好きになってくれたこと・・・・・」

「合格です」

「ええ？」

ナニ！？合格って・・・・・

「それでこそアキ君です」

あ、行っちゃった・・・・・結局なんだっただんころう・・・・・？

第九話（後書き）

理由分らずじまいで明日を迎えることになった明久です・・・

うーん？文才ないのが分かりやすいですね・・・

第十話（前書き）

全校試召戦争が終わりました。

告白し、告白された明久・・・

これから二人はどうなっていくのでしょうか・・・？

第十話

・・・・・・・・・・・・・・・・姉さん・・・・・・・・どうしちゃったのかな？

あー・・・・・・・・学校行きづらいなあ・・・

「アキ君、ご飯ができましたよ」

「あ、うん 今行くー」

え？ ご飯？ 姉さんが？

・・・・・・・・食べることができるのかな？ ハハハハハ・・・・・・・・ハア・・・

「姉さん・・・・・・・・これ姉さんが作ったの？」

「はい、そうですか？」

うそだ・・・・・・・・こんなにおいしそうなご飯を作るなんて・・・・・・・・姉さん熱でもあるのかな？

とにかく・・・・・・・・ひめ・・・・・・・・瑞希みたいじゃなければいいけどね・・・・・・・・

「いただきます！」

パクッ モグモグモグモグ

ゴックン

「お・・・・・・・・おいしい・・・・・・・・！！！」

「よかったです」

「いつの間にこんなにうまくなったの？」

「練習したんですよ？」

なるほど・・・ついにタワシとウニの区別がついて、メイド服で買い物しようとする姉さんはいないんだ！

「ですが・・・メイド服で買い物すると皆さん私のほうをじっと見てくるのですが・・・」

「まだ着てるんかい！！！！！！！！！！」

なんで！？何でこんなにおいしい料理が作れるのにそっちの知識は遠くかけ離れてるの！！？

「ご馳走様でした！」

「お粗末さまでした」

「おいしかったよ、姉さん」

「どういたしまして」

本当にね・・・

明日は早いし、早く寝ちゃおう・・・ 眠い・・・

「姉さん・・・僕もう寝るから・・・」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ・・・」

「ふあああ・・・よく寝た・・・」

ん？5：30じゃないか・・・早い・・・

朝ごはんでも作ろうかな

トントントン ジュウウウウウ

「よしっ！できたっ」と

あとは、姉さんを起こして・・・着替えて・・・
こんなに余裕があるのひさしぶりだあ・・・

・・・暇だ・・・時間は5：50・・・20分で作っ
ちやったか・・・

ここで勉強するほど僕はいい子じゃないからね　ハハッ

かといってまた寝るのもなあ・・・

あ、そうだ！お弁当でも作ろうかな！　お昼いつも瑞希にご馳走さ
せてもらってるし・・・

トントン　以下略

「できたっ！」

うん！！　暇だ！！

うう・・・どうしろと・・・

キィッ

「おはようございますアキ君」

「あ、おはよ　姉さん」

「早いですね」

「まあね、早く目が覚めちゃったし　あ、朝ごはんできてるよー」
「ありがとうございます」

6：15　これでも早いなあ
よし、着替えてこよう

「じゃあ、僕は着替えてくるね」
「はい」

今日はなんか特別には・・・
あー・・・そういえば昨日雄二が・・・「そろそろ強化合宿がある、忘れるな」
っていったような・・・

「いつてきまーっす!」
「いつてらっしやい」

タッタッタッタ

「あ、おはよう!瑞希!」
「おはようございます!明久」

ん?ご機嫌だなあ 瑞希・・・

「なんかいいことあった?」
「え、まあ・・・お昼までのお楽しみです」

お昼? お弁当かな?

「「おはよー／おはようございます」」
「はよ」
「おはようなのじゃ」
「・・・・・・・・おはよう」
「おはよー!」

「「「「「おお・・・・・・・・異端観察会のカップルだ・・・・・・・・」」」」」

第十話（後書き）

久しぶりの投稿です。

第十一話（前書き）

2回ミスって2回原稿消しました・・・

「4・9・0です」

「最初は普段、表に出ている貴方です」

0―潔癖感漂う敏感できめ細かい完ぺき主義者です
「……そうか？」

2―落ち着いた物腰のいつも冷静を心がけた常識人
「うん、……」

3―暖かい笑顔の優しくて包容力のある人です
「うぬ？」

1―せっかちで新しい物好きの好奇心旺盛な人です
「そう……かな？」

4―強いまなざしの積極的で向上心溢るる人です
「そうなんですか……」

「次は貴方が自覚している自分です」

5―クールな面差しのシニカルで斜に構えた人です
「……テレッ」

0―清潔感漂う敏感できめ細かい完璧主義者です
「あたりまえだな」

6―信義を大切にする公平で器の大きな優しい人です
「そうかのう」

4―強い眼差しの積極的で向上心溢るる人です
「へー」

9―穏やかな物腰の意志が強く粘り強い人です
「粘り強い……」

「最後は意識してない無自覚の自分です」

6―信義を大切にする公平で器の大きな優しい人
「……そうなのか？」

9―穏やかな物腰の意志が強く粘り強い人です
「ほう……」

8―爽やかな雰囲気明るくて頭の回転が早い人
「ふぬ」

7―色っぽい艶姿のフェロモンたっぷりの人
「何それ！！」

「？」

「0―清潔感漂う敏感できめ細かい完璧主義者
すか？」

「そうなんで

第十一話（後書き）

皆さんも、心理テストにぜひ参加を

第十二話（前書き）

心理テストの結果はいかがだったのでしょうか

第十二話

ふわあっ！

やつとついたあ・・・

なんかすごく疲れたな・・・

「じゃ、また後でね瑞希」

「はい！」

ここかあ！結構広いんだね・・・

さてと、雄二たちと覗きの相談を・・・

「雄っ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・！！？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

何だ・・・この会話は・・・

ものすごく気になるな・・・

一体何の相談なんだろう・・・

「・・・頼む」

「・・・・・・・・了解」

あ、終わった

「ねえ、雄二」

「なんだ？」

「さっきの話　なんだっ「きにするな」はやいよ！？断るの早すぎるよ！！？」

早すぎる・・・・・・・・まるで携帯に非通知がかかってきて、出たら霧島さんで、驚いて切ったみたいなの・・・

「の・・・・・・・・」

「協力しよう」

さらに早すぎる！？　百人一首の決め字も聞かず運で取ったみたいなの！！？

まあ、考えてるのはおそらく同じだろうから・・・

「全校の男子を見方に回すのは？」

「それは試みてるが・・・・・・・・Ａクラスがな・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・まじめなクラスは協力しないよね・・・・・・・・」

学年次席は久保君だし・・・

「ということだ」

「へ？」

「お前が交渉に行つて来い」

「なんでそうなるのさあ！！！！！！？」

どうして僕！？ 面倒くさいことはすべて僕に回ってくるの！？

「そうだ・・・これを・・・まあ、ないとは思っが もしものときのためだ持っている」

「スタンガン？20万ボルト？」

下手したら死ぬよ？

「よし、いつて来い！！」

「ムツツリー二と秀吉もなんか言ってえ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ペコリ」(礼)

「・・・・・・・・すまぬ」

「裏切り者おおおおおお！！！！！！！！」

コンコン

「どうぞ」

久保君だ・・・

「失礼します」

「吉井君じゃないか！」

声変わった？

「ちょっと頼みが・・・」

「引き受けよう」

早い！？ 何でこの学校は言い終わる前に答える人が多いのだろう・
・

「内容なんだけど」

「うん」

「女子風呂の覗き」

「すまない・・・協力はできなさそうだ」

なんだって!!？

「そんな・・・久保君!!」

「すまない・・・吉井君!」

ボタン

トボトボ

ガチャ

「ダメだった・・・」

「さすがにダメか・・・」

さすがにつて・・・

「もう一度・・・この手紙を持って久保のところにいつて来い」

「ふわ〜い・・・」

無理だと思っただけだなあ・・・

「いいから・・・行つてこい!」

「はいはい・・・」

コンコン

「どうぞ」

「明久・・・絶対参加だからな」

「なんだって!!!!!!!!!!!!!!」

「彼女いるから・・・か?（ニヤニヤ）」

やけになつてやる!

「ああ!そうさ!!」

「!!珍しいな・・・お前がそんなに胸張って言つのは・・・」

「そうじゃのう・・・いつもはバカなこと・・・もとい思い付きしか言わないからのう」

さらつとひどいこと言つたね・・・秀吉・・・

「まあいい・・・参加したくなければしたくないでいいぞ」

「あれ、いいの?」

「いたつていなくなつて大差ない」

さらにひどい・・・まあ・・・これで優しかったら・・・う
えっ・・・想像しちゃった・・・

「作戦会議だ!」

「・・・・・・コクコク」

「とりあえず・・・」

「はいつておくかのう・・・」

第十二話（後書き）

今回は成功しました・・・
ミスせずに・・・！

第十三話（前書き）

作戦の内容は飛ばさせてもらいます・・・

第十三話

「というわけだ いいな？」

「．．．．．了解」

「ん、わかった」

「心得た！」

「．．．．．いいけどさ．．．

「もしも、僕が覗きをしようとしているのが瑞希にばれたら．．．．．
殺される．．．．．確実に．．．．．」

「作戦実行の時間だ」

「了解」

「うむ」

「．．．．．うん．．．．．」

「元気ないな．．．．．それだけがお前のとりえなのに．．．．．」

「．．．．．姫路にばれるのが怖いか．．．．．」

「なるほどのう．．．．．」

「お見通し．．．．．さすがだね

というわけで．．．

「僕．．．．．やっぱりこの作戦には乗らないことにする．．．．．」

「ほう．．．理由は？」

「瑞希の期待を裏切りたくはない．．．！！」

「合格．．．だな」

「男らしいのう明久よ」

Dクラス男子×5 Cクラス女子×2
物理 103 VS 物理 0 (戦死)

「「「「「いよつしやああああ!!!!」」」」」

「俺らは、俺らの仕事をするぞ」

「OK、任せたぞ坂本!」

「「「「「「「「「「「FFF団の名において!」」」」」」」」」」」

「雄二……浮気は許さない………!!」

「しょ……翔子!?なぜここに……」

「坂本君、覗きはだめですよ?」

「姫路!?どうしてお前らが……!」

「あははは………勘がいいね……霧島さん」

「明久てめえええええ!!!!」

「まって雄二………もしもあのことを口外したら………
なんでしょ………」

「うえっ………あ、ああそうだ……」

「だから言えるはずがないでしょ……?」

当たり前だ………言えるはずが………

「ここは任せてもらうよ!?」

「「「「「!!!!!!?」」」」」

「く………久保君!?」

「頼んだぞ!久保!!」

Aクラスじゃ僕は役に立たない……

どうすれば・・・!!

「「「「「「「試獣召喚!!」」」」」」」

Aクラス男子×5 久保利光 霧島翔子・姫路瑞希・吉井明久

総合科目 10351 VS 総合科目 9893

うーん・・・約500点差か・・・
きついな？

「いくよ！吉井君！」

「え?!僕!?!」

キーン

「痛っ・・・」

さすがに、Aクラスの攻撃は防御しても相当な痛みだね・・・

「大丈夫ですか？明久」

「大丈夫！瑞希はそっちに集中してね！」

「はい！」

僕の利点は観察処分者・・・細かい動きもできること！

久保君の召喚獣の脇を通り過ぎて・・・切り込む！

うーん・・・そんなに減らないか・・・

うわっ・・・方向転換から走り出しがはやい！さすがAクラス・・・

・
同じ作戦で・・・え・・・見切られてる!?

まずい！．．．これじゃ．．．

ザッ．．．

「痛^つつ！！！」

まだ生きてる．．．手加減してくれたのかな？ まさか．．．い
まは敵だもん．．．
急所が外れたただけだね！

「はあああああ！！！」

ヒット！！これで少しは．．．！減ってる．．．よし！

久保君は．．．多少焦りが出てる．．．

この勝負．．．勝てる！！

そつだ．．．白金の腕輪．．．忘れてた．．．

「二重^{ダブル}召喚！」

主獣と副獣で．．．副獣の木刀を主獣に．．．そして．．．副獣
は．．．久保君の後ろに回りこんで．．．

羽交い絞め！よし後は．．．

主獣で切る！！

ザクッ．．．

あ．．．なんか．．．この音．．．前にも．．．ああ．．．
あのときの．．．

嫌なこと思い出しちゃったなあ．．．

久保利光 吉井明久
総合科目 0（戦死） VS 総合科目 202

結構点数上がったんだな・・・

あ・・・あの時のこと思い出すと・・・意識が・・・遠・・・く・・・

バタッ

「あ、明久!？」

「・・・吉井!？」

「・・・うあ・・・」

いやだ・・・やめて・・・そこまでしてないよ!？

借りを返すだけさ・・・

いやだ・・・いやだ・・・いやだあああああああ!!!!!!!!!!!

「・・・はっ・・・ハアハア あれ・・・ここ・・・」

「医務室ですよ」

「瑞希・・・」

「倒れちゃったんですよ？」

「そうだったんだ・・・」

あのときか・・・

それにしても・・・いやな思い出だったな・・・

（強化合宿飛ばします すみません。）

「いってきまーっす!」

「いってらっしゃい」

強化合宿終了したんだけど・・・男子全員（僕と秀吉を除く）が一週間の停学処分になっちゃったんだよね・・・
ってか・・・遅刻するう!!!!!!!!!!

ガラッ

「おはよう!」

「おはよー!」

「おはようございます」

「おはようなのじゃ」

やっぱり寂しいなあ・・・

「やっぱり寂しいですね・・・」

「やっぱり瑞希もそう思うわよね」

「だね・・・」

「じゃのう・・・」

参加しなくて本当によかったああ!

ババアの裸なんて・・・うえっ・・・おえっ・・・

「うっ・・・想像だけで気持ち悪くなってきた・・・」

「大丈夫か!? 明久!」

「らいじょうぶ・・・」

やばい・・・きもちわるっ

「はーふーはーふー」↑深呼吸

やっと落ち着いた・・・

「今日は全部自習なんだよね！」

「はい、先生方は今回の事件のことでいろいろとあるみたいですし・・・」

うーん・・・男子全員分（明久、秀吉を除く）の停学処分だもんね・・・

一週間は静かだね・・・逆に詰まんないな・・・

「静かですね・・・いつも騒がしいのに・・・いきなり静かになると・・・こう・・・」

「そうね・・・いつものバカ騒ぎがないんですもの・・・」

ガラッ

「お姉さまー！！！！！！」

「美・・・美春！？」

「今日は自習ですから、美春と一緒に勉強しましょう！」

「今日は瑞希と木下とアキと勉強するのよ！」

「この豚・・・が・・・」

どうしちゃったんだろう清水さん・・・

「いいですわ・・・もう・・・豚呼ばわりしませんわ」

「え？どうして・・・？」

「あの噂が立っていますし・・・今回は女子側に立ったと聞くでは

第十三話（後書き）

停学処分になっちゃった雄二たちです

清水さんが・・・明久を吉井と・・・！

まあ、清水さんは通りすがりのキャラですが・・・

第十四話（前書き）

ま・・・また消した・・・
この怒りを明久に表現してもらいましょう・・・

「え？」

「4人のFクラスに勝ったところで卑怯といわれるのはいやだわ」
「なるほどのう」

「開始時刻は13:30よ、間違えないでね」

ガララッ

「作戦立てようと思っても、この人数じゃできないなあ」
「じゃのう」

「4人で勝とうなんて・・・できるのかしら？」
「やってみなけりゃ」やってみないと分かりませんよ!!?」「うん、うん」

瑞希がやるきだな、僕もがんばらなきゃね！

「あ、簡単な作戦だけいいかな？」
瑞希は、美波の護衛、僕と秀吉はCクラスに攻め込む！」

「簡単だけどいい案ね」

「まあ、臨機応変に頼むよ」

「「「!!!?」」」

「どうしたの？」

「明久が臨機応変等言う言葉を知っていることに驚いてのう」
「失礼な!!?」

13:20

10分前・・・ふう・・・こう静かだと調子狂うなあ

13:30

開始時刻だ、行こう！

「行こう！秀吉！」

「うむ！」

” 作戦位置に入り次第実行いいわね ”

” ” 了解 ” ” ”

Cクラスの人たちが・・・Fクラスの中でも耳はよくなっていくんだよね、周りがるさいからこれは・・・あれか・・・？

「秀吉！下がれ！」

「うむ！」

「秀吉はここに隠れてて（ボソツ）」

「了解じゃ（ボソツ）」

タツタツタ

「Cクラス 佐々木唯香がFクラス吉井明久に世界史勝負を申し込めます！」

「「「「「「「同じく！！」」」」」」」

「「「「「「「サモン試獣召喚！！」」」」」」」

Fクラス 吉井明久

Cクラス×10

世界史 663

VS

世界史 1001

ええ！？倍！？

きつそー

「武器交換！」
チエンジ

「「「「「「「「「「え？」「」「」「」「」「」

僕の召喚獣の木刀が日本刀の二刀流に変化した
召喚獣の腕輪の力は、点数にあった武器になること

「はあああああああ！！！！！」
「「「「「「「「「「きゃあああああ！！！！！」「」「」「」「」

残るは二人！

「やああああああ！！！！！！！」
「「きゃああああ」

終了！いやあ、切れ味がいいねえ

「お疲れ様じゃ」
「あ、秀吉どうだった？僕の戦い」
「強いのか」
「ま、瑞希のおかげなんだけどね」

授業中教えてくれたし・・・

「「きゃあああああああああああああああ」
「「！！！！」」

ダダダダダダ
ガラッ

「どうしたの!？」

「吉井か・・・」

「根本・・・君」

「何してるんだよっ!!」

根本君は瑞希にスタンガンを当てようとしている

「なにつて・・・お前に借りを返すためだ、クククク」

借り・・・

「ま、すぐ終わるぜ・・・」

借りを返すだけ・・・やめろ・・・やめてよ・・・それ以上・・・

「明久あ!!」

ユルサナイ

「・・・・・・な」

「あ？」

「それ以上・・・近づくな・・・」

「お前に権利はねーよ」

シュツ

「お前に権利はない、そっくり返してやるよ」

「!!お前、目が!」

「目?関係ねえよ」

「「「アキ/明久/明久よ」」」

「俺と同じ痛みと絶望感を与えてやろうか？大切な人を守りたかった、だから助けたなのに借りを返すといって両目を抉った・・・」
「・・・！そうだったのか・・・」
「クククさあ、齒を食いしばれ！」
「やめてくれえ！！！！！！！！」
「明久ああああ！！！！！！」

はっ！僕は今まで一体・・・？

あれ？根本君なにしてるの？Fクラスで？
またFクラスに仕掛けでも仕込もうとしようとしてるの！？

「どうしたの？根本君」

「ひiiiiiiii！！」

「へ？」

「すみませんでしたああああ！！！！」

ダダダダダダダダ

「ふえ？つてか何で根本君ここに居るの！？」

停学処分のはず！？

「ちょうど風邪で休んだそうです」

あらら アハハ

「ん？何か忘れてるような・・・」

「・・・試召戦争！？」

「「それだ／それです／それだわ！！！！」」

「いくぞー秀吉!!!」
「うむ!」

タッタッタッタ
ガラッ

「Fクラス吉井明久並びに木下秀吉がCクラス全員に古典勝負を申し込みます!」

「「「「「「サモン
試獣召喚」」」」」」

Fクラス	吉井明久&木下秀吉		Cクラス×4	小山優香
古典	4 5 1 & 2 2 3	V S	古典	4 2 1 & 1 6 2

「はああああああああ!!!」

「「「「「「きやああああ!!!」」」」」」

「す、すまぬ明久」

「ありがとう秀吉!」

「「はああああああああ!!!」」

・
・
・
・
・

「そ・・・そんな・・・アタシが負けるなんて・・・」

「やったあああ!!!」

「勝ったよ!!!」

「「「すごいですね!／やったわね!／よかったのう!」」」

あー、勝ててよかった・・・え？勝ったときの条件？ああ、あれね
回想開始

（「今の設備に不満はないし、このままでいいよ」

「いいのかしら・・・」

「いいから、ね」

「わかったわ」

回想終了

というわけだよ！

あ、そういえばあの時の記憶が消えてるな・・・

えっと、悲鳴が聞こえて、走って行って、根本君が居て、スタンガン持ってて、あれ？

その次が思い出せないや・・・

「あのさ、僕って怒ってたときかな？どうだった？」

「怖かったわよ／＼です／＼のう」

異口同音とは・・・

「ビデオとかないかなあ・・・」

キラッ

「誰のか知らないけど、ちょっと借りるね
ビデオあったから見よう！」

「「いいわよ／＼いいですよ／＼いいのう」

スタートッ

「・・・・・・な」

「あ？」

「それ以上・・・近づくな・・・」
「お前に権利はねーよ」

シュツ

「お前に権利はない、そつくり返してやるよ」
「！！お前、目が！」

「目？関係ねえよ」

「「「アキ／明久／明久よ」」」

「俺と同じ痛みと絶望感を与えてやるのか？大切な人を守りたかった、だから助けたなのに借りを返すといって両目を抉った・・・」

「・・・！そうだったのか・・・」

「クククさあ、齒を食いしばれ！」

「やめてくれえ！！！！！！！！」

「明久ああああ！！！！！！」

終了

怖っ！なに？！こわっ！！！！

「誰！？これ誰！？」

「「「明久じゃよ／アキよ／明久です」」」

このときはたぶん・・・瑞希のことではいっばいだっただんころうなあ
／／／／／／／／／／／／／／／／

「そろそろ下校時間だぞ！！！！！！！！」

「「「「はーい」」」」

「また明日ねー」

「また明日なのじゃ」

「バイバーイ」

「瑞希、帰ろっか」

「はい！」

「ぼく、怒ってたでしょ？あの時ってたぶん瑞希のことじゃない
だったんだと思う」

それと・・・あの時のこと・・・いや！あの時のことはもう忘
れると決めたんだ！！

「そうなんですか／＼／＼／＼／」

あれ？紅い？

「瑞希、顔赤いよ？」

「はわっ・・・なんでもないです！！／＼／＼／＼／／」
「？」

「あの、明久？」

「なに？」

「目・・・瞑ってください」

「??????」

僕の唇に柔らかいものが・・・

「っ！／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
「助けてくれてありがとうございます／＼／＼／＼／＼／
／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「どういたしまして／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／／

「じゃあ、私はこの辺で・・・」

「じゃあ、また明日ね」

「また明日（ニッコロ）」

可愛いなあ／／／／／／／／／／／／／／／／

さて、

「ただいまあ」

シーーーーー

「あ、今日は姉さん居ないんだった」

やっぱり静かだと寂しいよね・・・

1週間後

第十四話（後書き）

明久×瑞希高めました！

一回消えると挫折しやすいんですね・・・

第十五話（前書き）

今回、停学処分から抜け出せた雄二たち！
次はどんなイベントが・・・！？

第十五話

ふわぁ・・・眠いなぁ

んーと、6：30か、最近早く起きるようになったんだよね

さっさと支度して学校行きますかぁ！

「アキ君、おきていますか？」

「うん、起きてるよ姉さん」

2日前に姉さんが帰ってきた。一体何をしていたのかな？

「アキ君、今日は病院に行きますよ」

「へ？なんで？」

「忘れたんですか？3ヶ月たったらもう一度病院にいくと」

「あああああ！！！！思い出した！」

「まったく、アキ君は・・・」

そっかぁ、あれから3ヶ月たってるんだ。

全っ然そんなきがしないよ

「学校はどうしますか？病院の帰りに行けば午後からの授業には間に合いますよ？」

「そっだね、行くよ！」

「ふふっ、アキ君は学校が好きなようですね」

「まーね！」

瑞希にもあいたいし・・・／／／／／／／／／／

~~~~~病院~~~~~

「ふむ、不可解な点がありますが、それ以外は問題ないでしょう」

「不可解な点って何ですか？」

「目が見えないのに、脳で感じ取る。ということだよ」

簡単にそう述べた。正直僕も気になってるんだけどなあ

あ、あのときのことも言った方がいいのかな？

あのとき、ビデオ見て分かったんだけど、僕、目を開いてた・・・  
紅い目が・・・

「あ、あの！」

「ん？」

「僕、学校で自分の意識がなくなってるぐらい怒ったことがあるんです・・・

そのとき・・・目が開いていたんです！いつもの僕目は茶色なんですけど・・・紅い目でした・・・」

「んー、不可解な点に追加だね。他に心当たりは？」

心当たりといわれたって・・・本当に意識なかったし

「心当たり・・・」

「どんなときに怒ったか覚えてないかい？」

「大切な友達が・・・」「彼女でしょう（ニコツ）姉さん／／／／／／／！・・・大切な彼女が知り合いに傷つけられそうになったときでした・・・」

「それだね。」

「え？」

それって？



「おはよー！」

「おはようございます。というか、もうお昼ですけどね」

あ、そうだった。恥ずかしいなあ／＼

「そういえば明久、Ｃクラスとの試召戦争勝ったんだってな」

「まあね、いろいろと大変だったんだからね！」

根本は来るわ、根本が来るわ・・・あれ？根本しか大変じゃない？

「ま、人数が４倍近く違うんだからな。でも、よく勝てたな」

「ちょうど得意科目だったんだよ」

嘘はついてない

「ふーん、そのときの点数言ってみろ」

「えつとねー、世界史が６６３で、古典が４５１だったかなあ」

「」「」「なんだって！？／・・・ありえない／嘘でしょ！？／すこいです！」「」「」

そうかな？っていつか勉強教えてくれたの瑞希でしょうが！

「明久・・・そのほかの点数は？」

「１００点前後」

「・・・お前・・・明久か？」

失礼な！？ちゃんと僕だつて証明してやる！！

「失礼だぞ雄二！雄二なんか！雄二なんか！こうしてやるうー！！！」  
「なに？やろうつてのか？」

p r r r r r r r r r r r r r r r

”もしもし？霧島さん？（ボソツ）”

”・・・どうしたの吉井”

”雄二がラブレターもらったって（ボソツ）”

”・・・ありがとう、吉井はいい人”

プツツ

「ふふふふふふ・・・今に恐怖がやってくる、船越先生じゃないだけいいと思え・・・クク」

「は？なにふざけたこといってやがる！」

ガラツ

「な、しよ、翔子！？なぜここに！？」

さすが霧島さん、行動が早いや！

AクラスからFクラスまで500Mはあるのに・・・

「・・・吉井、ありがとう」

「どういたしまして、ごゆっくりどうぞ」

「・・・（コクン）」

「てめえ！！間違いねえ！正真正銘お前は明久だ！！！」

今頃か、この野郎

「分かっていただき嬉しく思いますよ・・・さあ、婚約者との楽しみを味わってくださいゲス野郎」

「最後だけ丁寧じゃないぞ！？」

雄二に丁寧な言葉なんて使えるか！

「これより異端審問会を始める、坂本雄二の罪は」

「えー、Aクラスを代表とする、成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群の霧島翔子氏（以下霧島氏）を彼女とするも、Fクラス代表、容姿最低、成績まあまあ、運動神経だけ抜群の坂本雄二氏（以下ゲス）は無視し続けて、拳句の果てには部屋へ連れ込むという罪を犯し、学校内では一緒に弁当を食べるといふ場面も見られている、これについて——「つまり？」憎たらしいほど羨ましかったです」

「容疑者の処罰——」

「「「「「死刑」」」」」」

だめだね・・・甘い

「待った・・・」

「！？異端審問会を侮辱するつもりか」

「いや・・・判決が甘い・・・」

p r r r r r r r r r

” 例の放送を ”

” 了解 ”

「これくらいいいないと」

ピンポン パンポン

「えー、船越先生、船越先生、Fクラス坂本雄二さんが先生へ、恋愛の！恋愛に関して！の大切な！！！！お話があるそうです。至急Fクラスへ向かってください、  
ピンポン パンポン

「なんてこと放送しやがる！」



きついろ

「……………明久」

「あ、ムツッリーニどうしたの？」

「……………霧島が雄二のところに……………」

「なんだって!？」

これじゃ、雄二だけでなく、霧島さんにも被害が!!

「ムツッリーニ、至急、船越先生に須川君からのラブレターをかい  
て渡してほしい」

「……………お安い御用」

シュッ

といって、光の速さで教室を出て行った

「あゝきいゝひいゝさあゝ？」

「や、雄二!お疲れ様!」

「ふっ、まあいい。お前にはこれで……………」

「これ？」

というとき雄二は胸ポケットからチラシを僕に見せ付けた

何この広こ……………へ!?ミスコン(彼氏持ち)案内書?

そんなの僕見せ付けたって……………え?参加登録……………姫路瑞希……………  
ええ!?

「何で瑞希のなまえがあ!？」

「出るっていつて聞かないんだと」

「なに!？」

「それに、彼氏の出番もあるらしい」

それに、彼氏って言うって僕かよ！

何なんだよこのイベント！？やはりこれはババアの陰謀だな！

「あのババア！！！！！！！！！！」

「よくみる馬鹿久」

「馬鹿久って・・・ん？主催者FFF団、賞品提供、藤堂カヲル・  
」

あいつらかああああああああああああ！！！！！！！！！！  
！！！！！！！！

畜生！はめられた！

「くっ・・・！」

「ま、がんばってな、カ・レ・シ」

「ふははははは、バカ？雄二って」

「あんだと！？」

「これだったら、霧島さんも出るよね」

あ、雄二の顔が青ざめていく

おもしろーい（爆笑）

「もしかして、この条件は僕だけだとも思ってた？」

「畜生おおおおおお！！！！！！！！！！」

「ふっふっふ、ウェルカム！（キラッ）」

「そのむかつくぐらいさわやか過ぎる笑顔はやめろ！！」

さ、この条件はきついなあ、いまさら瑞希にミスコンに出ないでな

んて言えないし

雄二を道連れに逝きたいし・・・あ、間違えた 行きたいしなあ

## 第十五話（後書き）

ミスコン（彼氏つき）なんて条件で観客って来るんでしょうか？  
↑  
気になりますね

## 第十六話（前書き）

いつ終わるのか分からなくなってきました・・・

## 第十六話

「ねー雄二？それっていつだったっけ？」

「バカ久、広告見たんじゃないのか？」

「見たけどそれどころじゃなかったんだよ！」

「ふー、11月だな」

「11月ってことは・・・あと二ヶ月あるの・・・」

うえ、それまで我慢するのか・・・

早く終わらしたいんだけどなあ

「ま、我慢することだ」

「・・・雄二もね（ボソツ）」

「ああ？」

スチャ

「悪い、明久なんでもねえ」

おお、携帯の霧島さんのアドレス見せたらいきなり態度変わったなあ  
いやあ、相手の弱み握るってなんて楽しいんだろう

「そういえば、ムッツリーニは出るの？」

「・・・工藤愛子とはそういう関係ではない」

「（ニヤツ）」

「しまっ——」

「工藤さんとはいつてないんだけど・・・もしかしてムッツリーニ」

「そういう関係になったんじゃないか？」

「くくくく」

僕の周りって面白い人ばっかだね！

いやあ、毎日が楽しいなあ！・・・あれ？目が霞む？まさか・・・  
見てるんじゃないかって感じてるはずなの・・・に・・・なんで・・・

「明久は出ることをあきらめないのじゃな」

「あんな状態の瑞希に、出るの諦めてなんていえるはずがないよ・・・

」

「うむ？」

秀吉が向けた視線の先には――――わくわくしながら料理の本を  
見ている瑞希

たしか、審査内容って・・・

1、写真審査                    あんだって！！？

2、料理審査                    うーん、まだ分かる

3、女装・男装審査            何でもありだね・・・

4、告白場再表現              何それ・・・告白したところをやれってか

！！

ハア・・・こんな学校・・・

「まあ、あのような状態の姫路にはいえぬな」

「そっというわけだよ」

きつと雄二には拒否権などないのだろう

それに比べたらいいほうだと思える

「秀吉は、誰と出るの？」

「うむ？わしはでぬぞ」

「「なんだって！？」」

「雄二まで・・・おぬしら、わしには彼女など―――」

「そっかあ、彼氏は居ないのか」



きつぱりと、真顔で言い切った――だと！！！！？  
須川君に確認を！

「須川君、瑞希に興味ある？」

「彼氏もちだ、興味は薄れた」

「・・・アキちゃんは？」

「いつでもオーケー」

こけて鉄人の（自主規制）にぶつかっちまえ！！

「！！！！！！悪寒が？」

伝わったか僕の思い

「・・・・・・明久、写真審査のことについて・・・」

「あ、うん！」

「・・・・・・明久、とりあえず姫路をお姫様抱っこ」

なに？とりあえずって、その前にお姫様抱っこ？

君の頭の中身はエロいことでいっぱいになってしまっただけで  
もしたのだろうか？

「・・・・・・早く」

「瑞希・・・いい？」

「わっ、私は構いません・・・けど・・・かもしれない・・・」

ん？最後の部分が聞き取れなかった

「へ？」

「あのつ、重いかもしれません（ボソッ）」

「大丈夫、心配しないで！瑞希は軽いから（ボソッ）」

心配しなくても軽いのに・・・

ヒョイツ

「ひゃわっ」

「わぁ、予想以上に軽かったよ、瑞希」

「ほっ本当ですか？」

「嘘言つてもしょうがないよ（笑）」

本当のことだからね、あ、僕目開けないけどいいのかな？

「ねー、ムツツリー二僕、目開けないけど大丈夫？」

「・・・・・・気にするな、気にしたら負けだぞ」

そういう問題じゃない！

つたく、Fクラスはどうなって・・・っていまさらか

「・・・・・・その体制・・・いい」（ツウツツ

鼻血がいつもよりも少量流していた

なんか見えたのか！？ムツツリー二！

「・・・OKいいのものが取れた（これなら売れる（ボソッ）」

「なんだって？ムツツリー二」

「・・・・・・気にすることじゃない」

気になってしょうがない

”ムツツリー二見せろ！”

”おお！流石ムツツリー二だな”

”……………これくらい朝飯前”

気になってしょうがない、あの会話は？

「あつ、明久！おろして？」

「あ、ごめんごめん」

軽かったなあ／／／／／

---

2ヵ月後

---

案外早かったなあ、ついに明日になってしまった／／／／／／／／／／／  
恥ずかしい！！！！

男装、女装の服装はムツツリー二は用意してくれたみたいだけど・

・

まさか……瑞希の服装が執事服って似合うからいいけどさ！

僕は、なぜか！ドレスとワンピースの間みたいなの？

はああああああ

「あれ？秀吉どうしたの？暗いね」

「うむ、先ほど3年の先輩に告白されてしまったの……」

うえっ……どうせあの常夏コンビのどっちかでしょ

可哀相に……気持ちは分からなくもない（常夏コンビのどっちか）

「秀吉、ドンマイ……」

「うう、」



痛い・・・ベッドから容赦なく落ちてしまった

「なっ、何で姉さんが知ってるのさああ!!!!」

「坂本君が教えてくれましたよ?」

「何か他にいつてなかった?」

雄二なら、ボソボソという可能性が高い

「そうですねえ・・・そういえば「明久・・・悪夢を見せてやる」といつていましたね」

表情1つ変えずにそう述べた姉さんは、期待でいっぱいという顔であつた

「たたく、雄二も困つた人だなあ」

「姉さん!雄二もそれに出るから、見てあげてね」

「はい、どのようなものか見せていただきますよ」

「恥ずかしい・・・////////////////////」

「いつてきまーっす!」

「いつてらっしゃい、がんばってくださいね」

ガッ

危ない・・・家から出て数歩でこけることころだった!

「い、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

あの姉は・・・!!!!!!

「あ、おはようございます!」

「あ、おはよ、瑞希」

「今日は緊張しそうですね」

ミスコンのことかな?

「だね・・・瑞希、大勢の人の前に出るのって不安じゃないの?」

「はい、不安でいっぱいです・・・けど、明久がいてくれるから恥ずかしくありません!／／／／／」

「ありがと／／／／／」

告白の再表現かあ、覚えてもないし、恥ずかしくてなあ／／／／

ガラッ!

「「おつはよ!／おはようございます!」」

「おう、夫婦仲良く登校か」

「「からかわないでください!／からかうな!」」

「仲がいいのう」

「秀吉まで・・・」

「・・・以心伝心」

「つつ、土屋君!」

くうう!こんなにバカにされるような気持ちは・・・初めてじゃなかったか・・・

「ミスコンの開始時刻は14:30からだからな、忘れるなよ!」

「はいはい、了解しましたあ!」

それまでに、心の準備をしておかないとなあ自信ないな・・・

## 第十六話（後書き）

次回、ミスコン開催！

明久たちは、優勝できるのでしょいか？

## 第十七話（前書き）

はあ、学校、部活、宿題、それからパソコンに向かって小説書いて  
いると時間の流れが速くかんじますね。





• •

「  
・  
・  
・  
・  
・  
Fクラスの坂本雄二」

「俺は・・・俺は・・・」

そんな死人の目で行っちゃダメだよ雄二……

「Fクラスの土屋康太君っ！」

「あいつなんか・あいつなんか」

なっ！初耳だぞムツツリーニ！！

「えっ、Fクラスの吉井明久っ！」

あ、呼ばれた、行かなくちやなあ

タツタツタツタ

[illegible]

なにっ！？何この盛り上がり！！

「Fクラスの、木下秀吉！」

「うむ」

秀吉  
いい  
いい  
いい  
いい  
いい  
!!  
!!  
!!  
!!  
!!  
??  
??  
??

「さあ、彼氏さんがそろいました。これより写真審査に入ります！」  
「」「」「」「」「」「」「」いえー！！！！！！！！！！

「「「「「」

はあ、なぜこんなことに・・・というか、写真じゃ僕に勝ち目はないよなあ目開いてないし・・・

「まずは――」

・  
・  
・

「次は霧島翔子さんペアです！」  
ドンッ

・・・雄二の顔まつかだなあ（笑）

嫌がつてるくせに、実は付き合ってたうれしいんじゃないかな  
素直じゃないなあ

「次に工藤愛子さんペア!!」

このペアは僕が隠し撮りしたんだよね

ドンッ

二人の勉強中写真、もちろん科目は保健体育

「次は――姫路瑞希さんペア！」  
ドンッ

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

あれ？僕目瞑ってるけど、顔が笑ってる・・・よかった・・・笑え





「こっちもすごい・・・」

「さあ、これは負けられない戦いになって来ました!!!!!!」

## 第十七話（後書き）

省略しましてすみません。

流石に料理場面は書くのに苦労しまして・・・

## 第十八話（前書き）

今回で、結果発表できたらいいと思っています。

## 第十八話

「さあ、皆さんお待ちかね！告白の再表現です！！！」

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

└┘└┘└┘└┘└┘└┘└┘

そんなに叫んで喉がおかしくならないのかと不思議になるほど大きな声で叫んでいた

そんなに人の告白が聞きたいのかなあ???

「さあ、Dクラスの――」

「Aクラスの霧島ペア！」

さらに略した・・・！？

「はあ……翔子……小学校のときから……その……」

「  
・  
・  
・  
雄二  
・  
・  
・  
」

「その……な、えっと……好きだった……んだよ！」

「……雄二、ありがとう 私も……好きだった（ニコッ）」

「そうか、よかった」

という告白を終えた

雄二から告白したんじゃないか！？

素直じゃなと過ぎるよ雄二……（笑）

「次に同じくAクラス工藤ペア！」

ムツツリーニかあ

遠まわしすぎて分からないような告白しそうだよね

「・・・工藤、好きだ」

「ムツツリーニ君・・・いや、康太君、嬉しい！ありがとう」

「！！！？直球！？」

意外だ・・・！

「意外な告白ありがとうございます。さあ、次はFクラス姫路ペア！」

はあ・・・やりづらいなあ・・・

「わっ私は！あ・・・あつ明久君のことが・・・すっ・・・すっ・・・すきですー！」

「ごめん・・・ついに耳までおかしくなったみたい」

「もっ・・・もう一回いますっ！ 私は・・・明久君のことが・・・小学生のころから・・・すっ・・・好きでしたー！」

「・・・僕・・・目が見えないんだよ？」

「わかってますっ！」

「それでも？」

「それでも・・・明久君のことが好きですー！」

「僕は・・・姫路瑞希さんのことをずっとまえから好きでした・・・付き合ってください」

「えっ・・・？」

「本気だよ？」

「うっ・・・嬉しいですっ！よろしくお願いします！」

「よろしくね」

「「「「「「「「「「「うおおおおおおお！……！……！……！……！……！……！」」」」」」」」」」

「泣ける告白するんじゃないやねえよおお（号泣）」

「くそおおおお！……！お幸せにいいいいいいいい！……！……！」

「吉井いいい！！姫路さん泣かす様なまねすんなよおお！……！」

いろんな所からいろんな声が聞こえる

ありがとう、そういうふうに言ってくれることが僕にとっては嬉しいんだ……！

「うわあああ！！（泣）ありがとうございまいだあ！ぐすっ、ラストはFクラス島田ペアです！」

なんて移り身の速さ

「のう、島田よ」

「なに？木下」

「わしは……男に見えぬのかのう……」

「……だと……わよ」

「うむ？」

「ウチは木下のこと、男だと思ってるわよ？」

「なっ……のう島田」

「なによ」

「わしを男だと思ってくれているのなら……わしと付き合ってくれんかのう」

「え？……」

「前から好きだったんじゃないぞ」

「ウチもよ……／＼／＼／」

おお、流石は秀吉 恥ずかしがらずにやって見せるとは・・・

「さあああああ!!、残るは結果発表となりました!さて、優勝はどのペアなんでしょうか!!?」

うわあ、緊張する!

「できました!」

きたあ・・・!

「優勝者は・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・Fクラス・・・・・・・・・・  
姫路瑞希、吉井明久ペアです!」

なっ・・・・・・・・うそ・・・・・・・・でしょ?

「決め手は、障害をも越える愛だそうです!」

そりゃないよ・・・好きでなったわけじゃないし///

「さ、お二人は壇上へ」  
「「「「「「「「「「うおおおおおおおおおおおお  
おお!!!!」「「「「「「「「「「

恥ずかしさ襲来

うわ・・・・・・・・今日一番の盛り上がりかも・・・



└  
└  
└  
└  
└

息ぴつたり！？

打ち合わせどうりみたいなの？

「ふふっ、ありがとう」

「ありがとうございます」

そうだ……見せ付けてやろうかな？

チュツ

「えっ！？／／／／／／／／／／」

「あははっ／＼／＼／」

「明久っ！」

みんなポカーンとしてるククッ

チュツ

え？今度は僕の頬にやわらかいものが……

「瑞希……？」

「ふふっ、お返しですっ♪」

「「「「「「「「「リア充爆発しろおおおおお！！！！」」」」」」」」」

あはははははははははは！！

あはは？あれ？目が・・・違うな・・・脳？霞んで？  
すぐ治ると思ったんだけどな？

「ありがとうございます！これでミスコンを終了いたします！」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「いえええええええええええええええええい！！！！！！」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

フラッ

あれ？意識が・・・

「明久！？」

「「「「「吉井！？」「「「「

ボタン

それが僕の聞いた最後の言葉・・・

## 第十八話（後書き）

短いすね、全体的に・・・

明久は何回倒れるのでしょうか！？  
↑

## 第十九話（前書き）

明久の病気とは・・・？

## 第十九話

（瑞希 SIDE）

優勝発表の途中で明久が倒れました

そのとき、私はその事態に頭がついていけませんでした。

「明久!？」

夢中で明久の名前を呼び続けました・・・声がかれるぐらいに  
その後明久は、保健室に運ばれました。

「明久、明久!明久!!明久ああ!!」

ガラッ

「...「明久っ!?(アキ!?)」...」

いきなり保健室のドアが開いたと思ったら、坂本君、土屋君、木下  
君、美波ちゃんが慌てて入ってきました。

明久は、目を覚ます気配はありません・・・

「明久・・・」

「明久」

「・・・明久」

「明久」

「アキ」

一人ずつ名前を呼びますが、明久は・・・

コンコン ガラッ

「失礼するよ 私は、明久君の担当医師だよ」

といって、明久の隣に座り診察を始めました。

ですが、お医者さんは何も言うことなく・・・下を向いてしまいました・・・

どうして・・・どうして明久なんですか！？・・・私じゃなくて明久なんですかあ！？

私は、叫びたくなりました・・・

「・・・して・・・どうして明久なんだよ・・・！」

「・・・俺も例のやつらを殴ったぞ・・・」

「俺だって！なのに・・・どうして明久なんだよお！！！」

坂本君と土屋君は私が思っていたことを読み取ったかのように言いました。

私も・・・私も坂本君たちと同じ気持ちなんですネ・・・

「アキ・・・ごめんね・・・ウチが捕まんなきゃ・・・うう・・・」

「わしの不注意じゃ・・・すまぬ・・・明久・・・」

美波ちゃんと、木下君があのときのことについて・・・また私と同じことを考えていたようです・・・

「・・・せいだ・・・すべては教頭にある・・・」

「・・・教頭について調べてこよう・・・」

「ああ」

「「ウチ（わし）も手伝うわ（ぞ）」」

「・・・しも・・・私も手伝います！！！」

つい・・・大きな声を出してしまいました・・・  
でも！明久がこんな目にあう理由を知りたいんです・・・！

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

「「「「明久！？（アキ！？）」」」」

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・？みず・・・・・・・・き」

「明久！？」

必死で呼びました、必死で・・・

「あれ？・・・見え・・・感じなくなっちゃった・・・かな？」

「「「「なんだって！？（なんですって！？）」」」」

うそ・・・明久・・・

「明久 SIDE」

優勝発表の途中で僕は意識を手放した・・・

次に意識を取り戻したときには瑞希、雄二、ムッツリーニ、秀吉、  
美波の声がした

あれ？見えない？いや、感じない・・・

「あれ？・・・見え・・・感じなくなっちゃった・・・かな？」

「「「「なんだって！？（なんですって！？）」」」」

目は・・・開けるはずが・・・！！？開ける・・・かも・・・

「あ・・・れ・・・目が・・・開ける・・・・・・・・？」

「明久！見えるのか！？」

「どうだろ・・・」

雄二・・・あせりすぎ・・・

目が・・・開けた・・・！！うつ・・・眩し・・・久しぶりに日光見たかな・・・

「明久・・・！目がっ・・・目がああ！」

瑞希・・・

「見えるよ・・・なんでかわかんないけどね・・・」

「「「「よかったな！（よかったですね／よかったわね／よかったのう）」」」」

「ありがと！」

「コホン！えー・・・」

「「「「「っ！！（忘れてた！）」」」」」

先生の存在忘れてた・・・

「明久君、目を開いてくれるかな？」

「あ、はい」

言われたとおり目を開いた

なんで挟られたのに見えるんだろっ？？

「んっ・・・！？むー・・・」

「どうか・・・したんですか？」

「普通の人間の目じゃない・・・」

「は？」



たつていつてたね」

「あ、はい」

「あの時と同様、色は紅だからね」

「へー、そうなんですか」

紅か・・・別に支障はないね

「じゃあ」

「ありがとうございます」

ガララッ

「よかったな、明久」

「・・・・・・ほっとした」

「よかったのう」

「よかったわねアキ」

「本当によかったですっ！」

みんな・・・そんなに心配してくれたのかな？

雄二―シールドとして

ムツリ―ニ―客として

秀吉―??

美波―サンドバックとして

瑞希―かー(うわあああああああ!!!!!!!!)

自分で言うことになるとは・・・

「雄二・・・まさか雄二から告白するとは思わなかったよ!」

「ふっ、そんな昔のことは忘れたな」

昔って・・・

「まあ、雄二はこれで霧島さんから逃げる理由はないんだね（笑）」  
「はっ何言ってたんだ？逃げるに決まって——」  
「……今からデートに行く」翔子！？いつのまに——」

拉致終了

いやあ、拉致現場を見るのは何回目かな？？あはははははははは（黒笑）

## 第十九話（後書き）

今回も短めです。

時間がなくてこのようなものになってしまいました。次からは長めに、楽しんでいただけるような小説を書きますのでよろしく願います。

## 第二十話（前書き）

拉致現場後です

## 第二十話

ばいばい

「坂本君大丈夫でしょうか？」

「大丈夫！雄二は照れてるだけだから！」

まあ、しばらくは帰ってこないでしょう。

霧島さんのことだから一気に結婚式まで行っちゃわないか心配だよ・

・

そこまでお金ないからなあ・・・

「そういえば明久、先生が言っていたこと気にならぬか？」

「ん、確かに・・・付け足したって・・・何をどうしたら付け足すことができるって言うんだ！」

「・・・・・・・・明久なら・・・」

「僕ならって何！！？僕何もできないよ！！？」

僕が特殊な人間ってこと！！？

まあ、もともと特殊ではあったけどさ！！

あーもう！！！！

あ、そろそろ教室戻らなくてもいいのかな？

「そういえば教室に戻らなくてもいいわけ？」

「うぬ、そうじゃな、そろそろ戻るとしようかのう」

「・・・・・・・・・・商ばー・・・・・・・・」

OUTだよ、ムッツリーニ

「明久・・・大丈夫ですか？」  
「大丈夫、大丈夫！」

それにしても・・・付け足すって、手術は一命を取り留めるために  
余分なことはいらないと思うんだけどなあ

目の移植なんてことはきいたこともないし・・・

付け足す・・・あいつらが何かやったのかな？いや、そんな技術持  
ってるかな？

ただの憂さ晴らしに殺っただけだと、いや、やっただけだと思うん  
だけど・・・

・・・  
・・・  
・・・  
うー

――――む

「明久？」

「あ、何？瑞希」

「いきますよ？」

「あ、うん、今行く！」

まあ、いつか！

そのうち分かるでしょ

ガララッ

「「「「「「「「「我がクラスの誇るラブラブカップルだ！！！」」」」」」」」」」」

よし、スルーしよう

「え？ええ？あ、あのっ！」

「瑞希、いいからスルーしよう」

「あ、はい！」

” ・ ・ ・ ・ ・ 女装、男装カップル一枚500円 ”

”  
”  
”  
”  
”  
買った!!!  
”  
”  
”  
”  
”

スルー スルー スルー スルー よし、だんだん僕のスルー スキルが上  
がってきた気がする・・・！

ダララ！！！！  
ダンドンドン

「あゝきゝひゝさゝ!?!?」

「や、雄二！楽しかった？」

「お前のおかげで一人で婚姻届を出すところだったんだぞ……！」

うーん、霧島さんどうしたんだろう・・・衣装決めまで行ってると思ってただけど

「そこまで行ってたまるかあ！！！！！！！！！！」

「よく分かったね！雄二」

「ふんっ！お前の考えそうなことだ！」

流石雄二だね！そこまで僕の考えを分かっているとはね・・・

「雄一、戦争仕掛けても勝つ自身はないと思うけど」

「ふつ、考えが分かるのはお互い様だな　まあな、そうは思うが俺らの目標は――」

「「Aクラス！」」

ま、僕もAクラスの設備はいいなあと思ってはいたけどね  
瑞希のためにも・・・

「そうだな」

「あははっ」

ガラッ タッタッタ

「我々AクラスはFクラスに試召戦争を申し込みます」

「いいが、Aクラスにメリットはないんじゃないか？」

「3ヶ月間の平和、代表の幸せってどこかしら」

ああ、なるほど！

「納得してんじゃねえ！明久！」

「あははっ！ごめんごめん」

「はあ、いいぜ受けてやる その代わりAクラスが負けたら設備は  
交換だ、いいな」

「ええ、分かったわ 代表にそう伝えとく」

あれ？開始時刻は？

「開始時刻は何時にしましょうか？」

「午後からってのはどうだ？」

「いいわ、13：00からでどうかしら」

「わかった」

ガラッ

「と、いうことだ！ 野郎ども！！ 3度目の正直になるか、2度あることは3度あるになるか・・・」

「うおおおおおー!!!」

今回からはしっかりと僕も参加できるね！

ピーンポーンパーンポーン

#Fクラス吉井明久君、Fクラス吉井明久君至急学園長質まで来て  
ください 繰り返し——#

 $\hat{?}$ 

「失礼な！そんなことする分けないじゃないか！！！」

「否定………できん………！」

しょうがない……さくつと行ってさくつと終わらせて……くれるかな？

ガチャッ

「失礼しまーっす!」

「はぁ、つくづく失礼なガキさね」

こんなオブジェ飾ったところでしょうかないのに

「で?何の御用でしょうか?学えーババア長」

「どうしてそこで言い直すのかい!？」

ああ!もう!そんなことで突っ込まなくても!!

「で?御用とはなんですか!？」

「はぁ、アンタの目のことだよ」

目かぁ、長くなりそうだね

「アンタの目は、一度失明したんだが、何らかの条件で見えるようになったと、そういうことになっているんだよ」

「つまり、学園長はそのなんらかを知りたいと？」

「まあ、そういうことになるね」

学園長もといババアは真剣な表情で言った。

かといって、僕は正直はなす気はない、というより話せない僕よりも周りの人たちのほうが僕より知っているから・・・

「そんなこといわれたって、逆に僕が知りたいぐらいです。担当医師の先生も言っていたことも気になりますし・・・」

「言っていたこと？」

「はい、ベースは人間の目だけど、何か付け足したみたいな目をし

てると」

付け足すってねえ・・・アハハ・・・

「・・・そういう目にした張本人に聞いてみるしか方法はなさそうだね」

「僕もそう思いましたが、その人たちは今どこに・・・？」

「いまは、刑務所に入られているよ」

罪の重さは僕には分からないけど、大変だね  
そう感じながらも僕は学園長の話聞いていた

「今日はどうだい？あ、Aクラス戦があっただったねえ」

「はい、今回は役に立てそうなんで、できれば出たいですね」

「そうさね、明日ぐらいにまた呼ぶことにしよう、そのとき・・・」  
「はい、分かりました」

明日、あいつらのところに行くことになった

雄二たちには言わないほうがいいのかな？

「坂本たちに言って、きたいならくれれば言いと伝えておきな」

「え？いいんですか？」

「親友まあ悪友でも友は友だ、傷つけられたなら許せないと思った  
だけさね」

「わかりました、そう伝えておきますね」

雄二たち来るかな？

めんどくさいからいかねえ、とかいいそうだよねえ

ガラッ





「「「「「ぎゃあああああああああ！！！！！！」」」」」

「押せええええええええええ！！！！！」

「助けてくれ！俺の点数は後……ぎゃあああああああああ  
ああ！！！！」

「我らAクラスの勝利は同然！」

└┐└┐└┐└┐└┐

よし、Aクラスが戦術ではなくただの特攻になっているな．．．  
じゃ、僕も特攻しますか！

「田中先生！Fクラス吉井明久がAクラス全員に世界史勝負を申し込めます！！」

「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「  
サモン  
試獸召喚!!

Fクラス 吉井明久  
Aクラス 特攻隊

世界史 853 VS 世界史 2017

「まずは、二人！！」

まず二人木刀でなぎ倒す！

次に――

「ほっ！」

三人目は足払いからの木刀でとどめ

「ようっ！」

ジャンプからのドロップキック炸裂！

「はああ！！！！」

一気に三人横からの打撃！

木刀でも結構消費するんだよね、まあ、大体は点数で決まるからなあ

「しゅうりよ！」

はあ、疲れた！

ダダダダダダダダ

ん？あれは・・・Aクラスの援軍！？

うわあ、点数残り2 / 3だよ・・・

「Aクラス 渡辺祐樹が Fクラス吉井明久に世界史勝負を申し込  
みます！」

「「「「俺も！」」」」

「「「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」」」」

|      |      |      |       |
|------|------|------|-------|
| Fクラス | 吉井明久 | Aクラス | 援護部隊  |
| 世界史  | 659  | VS   | 世界史   |
|      |      |      | 196×5 |

とつと片付けますか！

「<sup>ダブル</sup>二重召喚」

|      |         |      |       |
|------|---------|------|-------|
| Fクラス | 吉井明久    | Aクラス | 援護部隊  |
| 世界史  | 230&229 | VS   | 世界史   |
|      |         |      | 196×5 |

主獣で3人、副獣で2人片付けるとしようか！

主獣と副獣を背中合わせにして、向かってくる敵を倒していく  
だけど、流石Aクラス、一人一人の点数が高すぎる！

だけど！人つつ倒していく上では大丈夫！

「<sup>ヒール</sup>回復！」

腕輪の力

自分の点数を200点回復することができる  
と、いうことで

|      |         |      |       |
|------|---------|------|-------|
| Fクラス | 吉井明久    | Aクラス | 援護部隊  |
| 世界史  | 330&329 | VS   | 世界史   |
|      |         |      | 196×5 |

となったから！

ザッ！

「「「「「うわああああああ！！！！」」」」」

「戦死者は補習！」

「「「「「はい……」」」」」

すごい……うめき声を上げずに補習室に向かっていった……

さすがはAクラス、勉強が嫌いなわけではないクラスなだけはあるね  
さ、このことを雄二に報告してこよう！

タタタタタタタタ

## 第二十話（後書き）

明久の名場面？ができました。

まさか一人でAクラスを倒すとは・・・とおもいつつ書いてしまいました・・・

次回、雄二に報告した後のお話となります。

## 第二十一話（前書き）

カロリーメイトおいし――

何でもあります。

少し遅くなった更新です。

## 第二十一話

これで残りはどのくらいになったかな？

1クラス大体50人ぐらいにいるから・・・おおよそ・・・まあいいや

残った人たち倒せばいいだけのこと……だよね

「吉井隊長！横溝が！横溝が！」

「横溝君がどうかしたの!？」

「こんなときにもかかわらず、Aクラスの女子に告白しています！」

なんてことだ・・・横溝君・・・！

「……どさくさに紛れてヤツを撃て」

「サー、イエッサー!!!」

横溝君、君はとても大切な力だったのに……仲間の手で消すことになるとは……！

「いやだああ！！！！フラれたあげくに鉄人の補習だと！？ふざけるなあああ！！！！」

異端審問会は人の幸せを許さない、

戦死者は補習！！！！

ぎゃあ ああああああああ！！！！！！！！！！

うん……とても残念だよ……

君はそんなにしても女子に飢えているのかい？

まあ、Fクラス的女子には彼氏がいるからね・・・全員

美波—秀吉、瑞希—僕



「ふんっ！誰があんなヤツのこ——あつぢいいいいい！！！！！！！！」

アホだね．．．いや、もとからか！

「明久あゝてめえ助けようとする気はないのか!？」

「ふふふ……雄二……貸し1つ！」

「くっ……まあいい助けてくれ！」

しょうがないなあ

こうやって見てるのも楽しいのに

「瑞希、それを貸して？」

「いやです」

きつぱりだね  
・  
・  
・  
・

いつもなら・・・言うか、こういふこと

「頼むからさ、ね？」

「いやです」

きつぱり2度目・  
・  
・  
・

うん、流石に頑固だなあ

「瑞希！このとおり！」

「いやです」

両手を合わせて頼んでもきっぱり答えられた  
ここまで来ると、イラついてきちゃうなあ・・・

「瑞希？・・・それを俺に、渡しなさい」  
「いやで——はい・・・」

瑞希は僕が本気で怒ったらどうなるか知ってるもんね  
あ、つい俺になっちゃった

「サンキュ、明久」  
「いやいや」

ついでに雄二の縄も解いておいた」

「で、雄二が僕を呼んだのはこのこと？」  
「いや、こんなことではない」  
「じゃあ・・・」

「今、FクラスはAクラスを押している」

おお！FクラスがAクラスを押すとはね・・・  
これじゃあ、Aクラスの名折れだね！

「お前のおかげだが・・・」  
「だが？」

「あいつらが、数学に変えてきている」  
「数学・・・！？そっか、僕の得意な世界史とかは避けよう？」  
「そういうことだ」

うーん、数学は1000いつてるかな・・・？  
ってぐらいだし、やっぱり数学が得意な美波に言ってもらっしか方  
法はなさそうだね・・・

「数学はどのくらいだ？」

「100いつてるかな？つてぐらい」  
「うーん・・・それじゃ厳しいか」

こっちは戦略で戦うって言ったって、この短時間じゃ作戦っていったって

できることは限られてるし・・・

「姫路！明久と前線に向かってくれ！」

「え！？いいの？瑞希を前線に連れて行って」

「いいんだよ」

「はい！分かりました！」

タッタッタッタ

「来たぞ！吉井と姫路だ！」

「油断するな！」

「Fクラス吉井明久「姫路瑞希」がAクラス全員に古典勝負を申し込めます！」

「「「「「「「「「「「サモン試獣召喚！！！！！！」」」」」」」」」」」

「」

|      |           |      |        |
|------|-----------|------|--------|
| Fクラス | 吉井明久&姫路瑞希 | Aクラス | 12名    |
| 古典   | 462&443   | VS   | 241×12 |

「なんなの！？あの点数！」

「吉井は世界史だけが得意科目じゃなかったのか！？」

「こんなの聞いてないぞ！？」

「無理よ！こんな相手と戦うなんて」

なに！？点数見ていきなり怯んだ！？

A  
ク  
ラ  
ス  
が  
！  
？

噓だ！！

「いますっ！」

「ぼくもっ！」

キュボ（瑞希の腕輪の力）

サーー（それを見て青くなるAクラス）

サッ！（それを見逃さず回り込む僕の召喚獣）

ザシュ（木刀で切り倒す音）

「うわあああああ！！！！！！」

45-17-11-11

（僕の召喚獣の腕輪の力（武器チェンジ））

ザシュッ！  
（瑞希の召喚獣が切り倒す音）

スパーン！（僕の召喚獣が切った音）

ああああ！！！！！！  
「  
「  
「  
「  
「  
「

「戦死者は補習!!!」

Fクラス 吉井明久&姫路瑞希 Aクラス 12名

古典  
2  
4  
2  
&  
4  
4  
3  
V  
S  
0  
×  
1  
2

「いえー！」

結構片付いたね！Aクラスの人たちが少ない



「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！！」」

|      |      |    |      |      |
|------|------|----|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 |    | Aクラス | 木下優子 |
| 総合科目 | 4239 | VS | 2341 |      |

「っ！？吉井君！？なにこの点数！！」

「僕の得意科目は世界史と古典だけじゃないんだよ！優子さん！」

スパーーーーーン！

「くっ・・・アタシが負けるなんて・・・！」

「・・・優子が・・・負けた・・・？」

「吉井君・・・強くなつたね・・・」

そこまで褒められると恥ずかしいなあ／／／  
さあ、残るは久保君と霧島さんと工藤さ——・・・

「ムツツリー二君！今度こそボクが勝つよ！<sup>サモン</sup>試獣召喚」  
「・・・それは譲らない・・・！<sup>サモン</sup>試獣召喚」

あつちはまだ戦いが始まっているか・・・  
ムツツリー二なら勝つよ！絶対に！

「それじゃ！Fクラス吉井明久が、Aクラス久保利光に英語を申し込む！」

「英語！？」

「明久・・・それ・・・私教えてませんよ！？」

「僕だって、瑞希の彼氏にふさわしくなきゃ！」

「え・・・／／／／／／／／」

瑞希の彼氏がこんなに不甲斐ないんじゃない？・・・ね！

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！！！」」

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 | Aクラス | 久保利光 |
| 英語   | 592  | VS   | 382  |

「吉井君・・・どうやってこんな点数を！」

「久保君・・・僕が・・・目が見えなくなったことは知ってるね？」

「ああ・・・」

「それでも人の役に立とうとして、瑞希に勉強を教えてもらったんだよ

英語は自力だけだね」

大変だったよ・・・英語って意味わかんなくて まったく・・・

シュパッ！

「くっ！じゃあ、容赦はいらないね！」

「当たると痛いんだけどね・・・！！」

体制を整えて、久保君の召喚獣の動きをよく見て、僕の召喚獣の脇をすり抜けて回り込むつもりだね——っ！？フェイク！？いきなり目の前に！

ザシュツ

「つつ・・・！」

落ち着け・・・落ち着けばこの勝負・・・勝てる！！！！！！

イリュージョン  
「幻影！」

英語の腕輪！

これは、召喚獣を4体増やして主獣と同じ動きをするため区別がつかない

要するに、分身ということだ（分身って言えばいいじゃないかって言わないでくださいね）

「くっ！あっ！」

「よっし！！！」

勝ったあ！！！！

久保君に勝った！！！！

すごく嬉しい！

「・・・・・・・・明久強くなった」

「あ、ムツリーニどうだった？」

「・・・・・・・・楽勝」

あとは・・・・・・・・

「Fクラス姫路瑞希がAクラス霧島翔子さんに総合科目を申し「こまない」え！？」

「雄二！？」

「Fクラス代表坂本雄二がAクラス代表霧島翔子に歴史を申し込む」  
「試験召喚サモン・・・・」

Fクラス 坂本雄二      Aクラス 霧島翔子

歴史      332      VS      301

っ！？雄二のあんな点数見たことがない！  
勉強・・・してたのか！

「・・・雄二、強い・・・！」

「俺だって、馬鹿じゃないんだよ・・・ただの馬鹿じゃあな！」

雄二が・・・勝った・・・勝っちゃった・・・

嘘じゃないよね・・・

勝ったんだよね！

「「「「「「「「「「「いよっしゃああああああ！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」

こうして、僕らFクラスはAクラスの設備を手に入れた・・・  
それからは・・・

「うつひょー！肌触り最高！！！！！」

「気持ちいい！！！」

「これは最高じゃの！」

「すごいわ！」

「・・・・・・パラダイス樂園」

「ムツツリー二の樂園はここでいいのか？」

「・・・・・・それ以上がある」

「ムツツリー二らしいね！」

「それにしても、坂本君の点数には驚きました！」

あ、たしかに  
すっかり忘れてたや

「最初から歴史に絞ってたからな」

「なるほどね！」

あ、あのこといわなきゃなー

「あのさ、明日なんだけど――」

## 第二十一話（後書き）

雄二たちの反応は！？

## 第二十二話

「明日ね、僕をこんな目にしたあいつらのところに、この目について聞きに行こうと思うんだけど」

雄二たちも行く？学園ちょ——ババア長がいつて言ったからさ！  
！どうかな？」

不安そうに僕は聞いた。

この誘いに雄二たちは来るというのかな？

「行くに決まってんじゃねえか！」

「………当たり前」

「行くがのう、お主は素直に学園長と言えないのかのう？」

言えるわけがない

「私もいきますっ！」

「え？瑞希も？」

「はい！明久を……明久をこんな目にした人たちに言いたいことがあるので……！」

言いたいこと？

何かを決意したように瑞希は言い切った……

「うちも行くわよ、大切な仲間を傷つけられたのよ？行かないわけがないじゃない！」

「ありがとう……僕のことを仲間って言ってくれて」

何か嬉しいな……

「そっだぞ明久、俺らはお前の悪友でもあるが親友でもあるんだ」  
「……………俺は、お前を仲間じゃないと思った日はない」  
「……………ムツツリー二…………前に僕にカッター向けたよね…………？」

「……………気にするな…………！」

気にするに決まってるけど…………

「わしもじゃぞ、明久は大切な仲間じゃ……！」

「私もです！明久は私にとって大切な人なんですから！」

瑞希…………秀吉…………雄二…………ムツツリー二…………美波…………

ありがとう…………本当に…………ありがとう！

やばっ！涙でそう…………

「ありがとう…………！ありがとう…………！！！」

「馬鹿久、泣くくらいならあいつらに怒れ！」

「……………泣くな……………当たり前のことだ」

「明久、泣かぬともよいのじゃぞ」

「アキ、泣かなくてもいいのよ？」

「明久、泣かないでください。私も悲しいのですから」

みんな…………ありがとう…………この言葉だけじゃ僕の思いは伝わりきれないよ……………！

「皆…………ありつ…………ありがとっ！ぐすっ」

早くとめなきや……………！

今はないてる暇はないんだ！

僕にとってやらなきゃならないことはあるんだから・・・

「さ、学園——ババアのところに行って俺らが行くということをお告してくるか！」

「・・・ババア長のところにいこう」

「おぬしら・・・」

「あんたたちね・・・」

さあ！気にしない気にしない！！  
行くぞ！！

ダダダダダ

バンッ！

「失礼します、ババア長」

「ダメですよ、明久、坂本君、土屋君ノックしてから入らなきゃ」

「そうよ、秀吉を見習いなさい」

「姫路に島田、注意する所はそこじゃないさね！」

え？注意するところなんてほかにあったっけ？  
何か違和感・・・

「すみません」

「明久、入るときは返事を待ってからですよ？」

「そこでもないさね！！？」

ええ？他に何があるって言うんだ？？

「あ」

「やっと気づいたのかい？」

「美波、いつの間に秀吉のこと名前で呼ぶようになったの?！」

さっきの違和感はそれだったのか!!

いやあ、違和感が解消されてすっきりしたよ

「もういいさね・・・（ハア）」

「ババア長、ため息をつくとき幸せが逃げてくって言いますよ?」

あ、もともとから幸せなんてないか

あんなしわだらけの顔に白髪に・・・・・・・・・・

「つくづく失礼なジャリどもさね!!?」

「なにい!!?俺も入るのか!？」

「・・・・・・・・不本意極まりない!!」

「何をいまさら!」

そういつて叫ぶ雄二とムツツリー二+α

「+αで済ますんじゃないよ!!」

「そんなことより学園——ババア長」

「そんなことよりかい!!」

突っ込むところが変わってる

はあ、年取ったらあんなのになるのかあ

戦争時代から生きている老婆は鑑定に出しても1円未満だろう

「失礼さね!」

「えっです、明日のことですが、雄二——坂本君たちも行くそうです」

「スルーかい・・・そうかい、明日、放課後また学園町室に来な」

放課後か、確か何もないと思ったけど・・・

「分かりました、放課後ここに来ればいいんですね」

「「「「「失礼しました」「」「」」」」

「ありがたいぜ」

「?どうしたの雄二」

「明日の放課後はもともと鉄人の補習だ、（さっき思い出したが）これを理由につけたら補習はしなくてすむ!」

おお!そういうばそうだった!

忘れてた・・・まあ、これで補習はなし!!

「・・・鉄人のことだから「今日やらなかった分は明日やる!」とかいいそうだよねえ・・・」

「ウチは「わしは」別にいいけど・・・」

「「「ダメなんだよ!!」「」」」

「「「!!」「」」」

あんなむさ苦しい鉄人の補習だと!?

だったら試召戦争でもしてるほうがまだいい!

あ、比べ物にならないか!

「まあ、西村先生の補習はちょっと長いですが・・・熱中症になりかけました・・・」

「瑞希・・・大丈夫?」

美波が瑞希の気分をうかがった  
瑞希は体が弱いからね・・・

「コホンッ それより明日だ今日は解散で家に帰れ」  
「うん」 「・・・了解」 「ええ」 「はい」 「うむ」

「「「「「じゃあね／また」」」」」

早く帰って寝たい・・・今日は走り回りすぎた・・・

「明久、帰りましょう？」

「あ、うん」

「明久・・・目、大丈夫ですか？」

「うん、ちゃんと見えてるからね」

「ならよかったです」

「明日が楽しみだね・・・！！」

「はいっ！！」

そんなに張り切って・・・

まあ、瑞希だからそんな怖いことになら・・・ないとは限らない  
な・・・

今日の瑞希の行動から見れば・・・ね・・・

「じゃあ、私はこの辺で！」

「またね、瑞希」

「また明日」

瑞希と別れ、自分の家に向かう・・・

今日は姉さんいるから晩ご飯どうしようかな？

材料は残つてると思ったから、パエリアでも作ろうかな？

「ただいまあ！」

「お帰りなさい、アキ君」

「うん、あれ？姉さん料理してた・・・？」

恐る恐る聞いてみた

「よく分かりましたね、アキ君」

姉さんの料理Ⅱ前の瑞希の料理

おっと、今は違うか

姉さんの料理Ⅲ瑞希の料理

だから・・・はあ、明日・・・学校行けるかな？

「姉さん、胃薬ある？」

「胃薬の心配はありませんよ？ちゃんと味見しましたから」

味見！！？姉さんが味見という言葉を知っていたとは・・・！

「っ！！？」

「どうしました？アキ君」

「ううん、なんでもない」

なんておいしそうな料理なんだ！！

いやいや、まてよ・・・前の瑞希の料理みたいに見た目はおいしそ  
うでも味自体は・・・

でも、姉さんは味見したって言ってたし・・・  
うーん・・・

「食べないんですか？」

「うっん！！食べるよっ！いただきます！！」

さようなら、僕の人生

パクッ

モグモグモグ

「おいしい！！！！」

「それはよかったです」

「姉さんすごくおいしいよ！」

「ありがとうございます」

パクパク

モグモグモグ

うっん、おいしい！

いくらでも食べれるよ！

「ふう、ご馳走様でした」

「お粗末さまでした」

「それにしても姉さん、よくこんなおいしい料理作れたね」

「練習したんですよ」

練習しただいでこんなにおいしくなるんだねえ・・・  
ふわぁ・・・ねむいや

「姉さん、悪いけど僕もう寝るね・・・今日の試召戦争結構疲れたんだ・・・」

「はい、おやすみなさい」

僕はよほど疲れていたらしく、ベッドに横になった瞬間眠りについて……

---

ふわぁ、なんかよく眠れた……  
今は……6:00ちょうどいいね……

「おはよ……」

「おはようございます」

「ん？姉さん何してるの？写真なんか出して」

姉さんは缶の中に入った写真を並べていた

「たまには整理しようとしてまして」

「ふーん……ってナニコレ！！何で僕の女装姿の写真なんかあるのさあ！！」

「これは昨日……」

そついうと姉さんは口ごもってしまった

「昨日！？昨日何！！？」

「気にしないでください」

「気にするよ！！？気にするからね！！？」

あの服、着た覚えがないと思った……！

「姉さんそれをよこしなさい」

「いやです、もし無理やりという手段をとったのなら、この写真を

ウェブ送信します」

「ごめんなさい、心の底からごめんなさい」

「分かってくれたのならいいですよ」

くっ・・・！こんな写真をウェブ送信されてたまるか！！

（こんな写真とは、いつものようにウィッグをつけて、ナース服（半脱ぎ・ご想像にお任せします）

+化粧）

説明しなくていいから！！

「くっ！いつてきまーっす！ー！！」

「はい、いつてらっしゃい」

## 第二十二話（後書き）

玲さんの嫌がらせです。

さあ、学校に向かった明久です。放課後、学園長——ババアのところに向かいます。

次回もよろしくお願いします。

## 第二十三話（前書き）

はあ、ネタが尽きはじめました・・・

## 第二十三話

まったく・・・朝から姉さん何してくれているんだ！！  
まだ、姉さんには一般常識が足りてなかったみたいだね・・・  
それにしても・・・あれから結構たってるんだね・・・そんな感覚  
まったくないや

「あ、明久おはようございます」

「おはよ！瑞希」

そんな僕の考えを吹き飛ばすかのような笑みを浮かべ、僕の前に現れた瑞希

今日はいつにもまして楽しそうな気分を感じ取ることができた

「今日って体育で持久走でしたよね・・・」

いきなりテンションが下がった瑞希

そっか、瑞希は体育系が得意じゃないんだったね

「持久走かあ僕も好きじゃないんだよね・・・」

「でも、明久ははしるのが早いじゃないですか！うらやましいです  
！」

「いつも、鉄人に追いかけて廊下を雄二と全力疾走してるところ  
んなになっちゃったんだよ」

お互いがお互いを鉄人に売ろうとするからねえ・・・

「ふふっ」

「さ、学校へ行こうか」

「はいっ！」

ガラッ

「おっはよー！！」

「おはようございます」

「「「「きたあ！！！！！我がクラス誇るカッry」」」」

はいはい

毎朝こんなじゃあ、つまらないなんてことはないね！

「おう、夫婦そろって登校か？」 雄二もそうすればいいじゃないか

「・・・・・・うらやましい」 ムツリーニも工藤さんがいるんだから

「まったくじゃ」「ホントよね」 この二人に関してはカップルってかんじしないなあ・・・

「「「「なんか、明久を殴らなきゃいけないような感覚が・・・？」」」」

何！！？殴らなきゃいけないような感覚って何！！！！！！？？

ザワザワザワザワ

「HR始めるぞ！」

「「「「「「「「「「うiiiiiiiiっす・・・」」」」」」」」」」」

やる気ないのが丸分かりだよみんな（笑）

まあ、実際僕もやる気なんてさらさらないけどね



流石に5？はきついよね・・・

僕は長距離って言うか短距離のほうが向いてるんだよね・・・

ゴールまで全力疾走っていうの・・・

あ、いつの間にか残りが1km切ってた　そろそろ全力出そうかな！

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10人抜き！！

「よつと！雄二！」

「お、明久、栄養失調で倒れてたかと思ってたぞ」  
「失礼な！」

ゴールが見えてきた

そろそろ本気のダッシュでもしようかな！！

「お先！！」

「あ、待てこら！」

「誰が！！」

ゴール寸前！雄二だけは抜かされたくないね！！

—— 瑞希SIDE ——

「ねえ瑞希、アキのどこを好きになったの？」

「ええ！！！？どうしたんですかいきなり」

「ちよつと・・・気になってね」

少し口ごもる美波ちゃん

どうしたんでしょう？

「そうですね・・・あれは小学校のときです。私は小学校のとき男子にいじめられていました。

そこでクラスのムードメーカーだった明久が助けてくれたんですよ。

それだけじゃありません。高校に入ってからだって、私を助けてくれたことが

とっても嬉しかったんです！

私のせいで明久の目があんなことになってしまったときは、自分を恨み、憎みました。

明久は、そんな私に手を差し伸べてくれた・・・だから私は好きなんです！！」

あ・・・しゃべりすぎちゃいました／＼

「ふふっ」

「そっ、そういう美波ちゃんはとうなんですか！木下君のこと！」

「ええ！！？ウチは・・・ね・・・」

言いたくないんでしょうか、語尾が小さくなっていきます

「秀吉・・・さ、女の子っぽいでしょ？それに比べてウチってば男っぽいし・・・」

ずっと秀吉が羨ましかったの・・・でもね、時々見せる男らしい仕事とか見てたら

なんか・・・こう・・・なんていったらいいのかしら・・・

でも、そんなところを好きになったのよ ふふっ」

美波ちゃん、嬉しそうですね 私も嬉しくなっちゃいます。

あ、男子の皆さんが走り出してから30分がたとうとしています。



先にゴールしたのは僕だった

周りが見えていなく、一着でゴールしたという実感がなかった

「畜生！明久なんかに負けるとは思わなかったぜ！」

「なんかとは失礼だぞ雄二！！！」

「なんかで上等だ！」

「なんだとお！！ならばこうしてやる！」

「何をしたところで変わりはない！！？」

そういつて僕が取り出したのは雄二携帯で 霧島さん宛てに

” 婚約届けのことだが、18になるまでは待てよ、

そうしたら、二人で出しに行こう

世界で一番お前を愛している”

という文章、雄二に見せびらかしつつ送信ボタンを押した

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「お幸せにねっ！！！」

それから僕は雄二の携帯を近くの道路に投げ飛ばした

それから気持ちのいいような「パキッ！」という音が聞こえた

「あーきーひーさー！！！！？」

「さあ雄二！その怒りを放課後、あいつらに見せてあげなよ！」

「ちっ、あいつらに救われたな・・・！」

あぶない・・・いまはあいつらに感謝するしかない・・・か！

コンコン

「どうぞ」

中からしわがれた声が聞こえた、これで入っていいのだろう

「失礼します、ババア長」

「後は呼び方を直すことさね！」

呼び方なんてどうでもいいじゃないですか

「どうでもよくないさね！！！！！！？」

「さあ、いこうじゃねえかババア」

「はあ、まあいいさね」

「諦めましたね、学園長」

もういいって、完全に諦めましたねえ

それよりも早くあいつらのところについてこの目のことについて聞かないと・・・

「さ、車を用意してあるからさっさときな」

「タクシーですか？」

瑞希が聞いた、まあ、ババアが運転なんてされたら

警察に捕まっても文句は言えないでしょうね

妖怪が運転するんだから

「いや、アタシの車だよ」

「そんな馬鹿な！！？」

「どづいつことさね!!!!?」

---

車で約30分ぐらいのところ警察署があつた

そこで、刑務所の中の人間と話ができるように頼みに行った  
警察は最初は渋っていたが、なんとか了承してもらえた

「ここさね・・・」

「「「「「(ゴクリ)「「「「「」

ガチャ・・・

「んん??お前はあのときのヤツか・・・ククク」

「懐かしいなあクククククク」

「ああ、あのときの・・・ケケ」

「よくもやってくれたなあ、ええ??吉井!」

「なんだ、目見えるのかよ、もっとやっときゃよかったなクク」

嫌だ・・・できればこいつらと合うのは2度と御免だった・・・けど・・・けど!!

「・・・あのとき、僕が気を失った後何をした・・・!」

「明久・・・」

「あの後か?ククク」

「答える・・・!!」

「・・・明久」

早く・・・答えるよ・・・怒るぞ・・・!

「俺らはなあ、生き物とかの目を挟るのがすきなんだよ！ククク」  
「以前、うまく挟めた目を興味半分でお前の目の中に入れたんだよクク」

「まさか、吉井、お前が生きてるとはなあケケケ」  
「てめえら！明久は実験のモルモットじゃねえんだぞ！！」

雄二・・・ん？僕の目に入れた・・・

それだけじゃ付け足すなんてことできるはずがない！  
なのに・・・どうして・・・

「1つ聞く・・・何の動物の目を入れたって？」

「クク・・・鷹だよ・・・俺らは前、狩をしていたんだ、そのとき・・・剥ぎ取ったやつを残しておいたんだよクク」

「鷹・・・！？」

鷹って・・・付け足したらどうなるんだろう  
今のところ特にはなにも・・・

「・・・お前ら・・・許さないぞ・・・お前らが死んだところで俺らの怒りが消えるわけじゃない！」

「ムツッリーニ・・・」

「そうだ！俺たちはどうして明久なんだ・・・どうして俺じゃないんだと・・・ずっと思っていた！」

「雄二・・・」

「うむ！わしの不注意がなかったらこんなことにはならなかったんじゃないが！どうして明久なのじゃ！」

「秀吉・・・」

「ウチたちだって、十分悪いことはしたわよ？なのにどうしてアキだけなのよ！！！！」

「美波・・・」

「許しません・・・私の一番大切な人を傷つけた・・・それはどんな罪の償い方でも許されません!!」

「瑞希・・・」

「・・・私ノウチノわしノ俺たちの親友を傷つけたこと!地獄で後悔することだ!!!」

「皆・・・」

皆が怒ってくれる・・・僕にはこんなに仲間がいたんだね・・・!

「お前ら・・・俺は、あの時カラオケボックスに乗り込んだこと、一度も後悔した事はないからな!!!」

「・・・ヒツ・・・」

「俺は後悔はするようないし、だがお前らは俺たちを敵に回したこと、地獄で後悔してろ!」

「・・・すみませんんんん!!!!!!」

ふう、すっきりした

言いたいことは言えし、聞きたいことは聞けた  
今日はこれで満足だ!

「・・・」

「学園長、普段から妖怪みたいな顔がゾンビみたいな顔になっていきますよ?」

「うるさいジャリだね!!さ、帰ろうか」

「・・・はいノおう」

今日は疲れた・・・怒鳴ったから余計に・・・

「じゃ、僕はここで・・・」  
「またね／またな」  
「」  
「」  
「」

## 第二十三話（後書き）

明久が怒鳴りました！

明久は怒ると一人称が「俺」になります。

一箇所、台詞だけになってしまいました。がご了承ください。><

## 第二十四話

ねむ・・・なんか疲れたなあ・・・  
ふわああああ・・・眠iiiiiiii

「ただいま・・・そしておやすみ・・・」  
「おかえりなさい、おやすみなさい」

姉さんは、すぐ寝るということに疑問を持たずに送ってくれた  
考えてなかったのかな？

---

翌日

---

・・・・・・よく寝れた、昨日早く寝すぎたか・・・  
う、お腹すいたあ 昨日食べてないもんね

「おはよあ・・・」  
「おはようございます」

うん？目が・・・？  
何かよく見える？というか見えすぎる・・・  
よく見えすぎて気持ち悪い

「どうしました？」  
「いや、なんでもないよ」  
「どうですか・・・朝ごはんできてますよ」  
「ありがとう！」

まあ、そのうち治るでしょ!!  
今は、朝ごはんに集中しなきゃ  
↑

「いったきまーす!」

「ご馳走様でした!!」

「お粗末さまでした」

いつもの時間には余裕あるけど、たまには早く行かなきゃね!  
そういつて僕は家を出た

「いつてきまーっす!!」

「いつてらっしやい」

うーん・・・まだ治らないなあ

早く治ってくれないと授業に集中できなくなるよ(集中したことな  
いくせに・・・)

・・・とつとにかく、早く治らないかな?

といつてる間に、正門についた

「うわっ、教室がみえる・・・雄二・・・ムツッリーニ・・・秀吉・  
・・・がいるね」

便利って言えば便利だけどさ、見えすぎるのも問題だし・・・  
うーん・・・言うべきか言わないべきか  
ま、いつか

ガララッ

「おっはよー!!」

「おう・・・!!?」

「・・・おはよう・・・!!?」

「おはようじゃ・・・!!?」

三人と同じ驚き方をしている

どうしたんだろ・・・僕の後ろに誰がいるのかな？  
いない、じゃあ・・・

「明久・・・どうした、熱でもあるか？」  
「ないよ!」

あるわけないよ!

「・・・どこかで頭を打ったか・・・」  
「打ってないし・・・」

どうして・・・そんなことはしないよ!!

「明久よ・・・今日は休むのじゃ」  
「秀吉まで!!ひどくない!!?」

秀吉だけは信じてたのに・・・シクシク

「いやな・・・こんなに早く明久が学校に来るなんて思ってたことがなくてな」

「そういう雄二たちは？」

そこまでいうなら、雄二にも同じことが言えるよ!

「俺は・・・リビングに行ったら翔子がいたからそのままきた」

「照れ隠しもほどにね」

「・・・・・・・・・・いつもと同じ時間に出ると工藤愛子がいるから・・」

「おとなしく一緒に行けばいいのに」

「島田が毎回迎えに来るのが恥ずかしくてのう」

「正直になろうよ」

まったく、みんな彼女のせいにするなんて最低だよ！（秀吉は違うぞ！）

僕は、瑞希とよく学校に向かっているとこのに！

嫌じゃないよ！！嫌だったら一緒に着たりしないよ！！

「「明久に言われた・・・・・・・・！（ガクツ）」」

「そんな大ダメージ！！？」

僕が言ったらそんなにダメージがあるの！！？

「明久・・・・」エロは最低だと”ムツツリー二に言われてみる」

「っ！！？ショックだ・・・・」

「・・・・・・・・最低だ」

「「ショックだ・・・・・・・・！」」

こんなショックだったとは・・・・・・・・！！

「お主ら・・・・」

「・・・・・・・・・・そういわれるほうがショックだ・・」

そんなことはないに決まってるじゃないか！

ムツツリー二はいい加減自覚してほしい・・・





確かに・・・瑞希なら僕の投げたボールも取れるだろうけど・・・  
ん？逆か・・・え？瑞希投げれるの？？

「それはいいな、明久のボールを取れるヤツはこのクラスにはいいからな、いいだろ！！」

「「「「「「「「「「「もちろんだ！」「」「」「」「」「」

うーん、おかしい言葉も入っていた気がするけど  
スルーしておこう

来週か、だけどFクラスなら優勝は確実！

「いいか！おれらFクラスは勉強だけでなく体力も見せてやるんだ

！」

「「「「「「「「「「うおおおおおお！！！！！！！！」「」「」

「「「「「

---

来週

---

「ただいまより、試召野球を開催します

第1試合はAコートで1-FVS1-E  
」

僕らはBコートでEクラスと対戦だ

Eクラスは体力バカの集まりだから・・・勝てるかな？

いや、こんなことで迷っていたら勝てる試合も負けちゃうね！

「「「「「「「「「「「よろしくおねがいしまーーーーーっす！」」

「「「「「「「

「先攻はウチがもらってもいいかしら？」

「ああ、いいだろう」

といことで、僕は後攻ということだ  
最初は守備！きっちり守らなくちゃ！

「最初は守備だ！きっちり守り抜くぞ！」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」  
「おおー！！」「」「」「」「」「」「」

1 ピッチャー 姫路瑞希  
2 キャッチャー 吉井明久  
3 ファースト 坂本雄二  
4 セカンド 土屋康太  
5 サード 島田美波  
6 ショート 木下秀吉  
7 レフト 須川亮  
8 センター 齊藤裕也  
9 ライト 中村直人  
補欠 神崎竜也  
坂上俊

「プレイツ！」  
「いつ、行きますっ！！」

ズバンッ！！  
「ストライクッ！」

ズバンッ

「ストライクツー！」

ズバンッ！

「ストライクスリーバッターアウト！」

この調子で瑞希は3アウトを取った

次は一回裏僕らの攻撃だ、一番は瑞希 できるかな??

## 第二十四話（後書き）

野球に無知なので、おかしい点は見逃していただければ幸いです！

## 第二十五話（前書き）

明久、フィードバック痛くないのかな？？

## 第二十五話

「次は俺たちの攻撃だ！しまつていくぞ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一回裏！さっきの瑞希の球速かつたなあ・・・（痛かった・・・）  
そんなこといつてる暇はない！！よし！  
う・・・目が・・・うえ・・・きもちわるっ・・・！  
やっぱ言つたほうがよかったのかな？

「姫路・・・いけるか？」

「もちろんです！！」

「瑞希、がんばって！」

瑞希はやる気満々のようだ

これは僕も負けてられないけど・・・さ、ね？  
はあああああ・・・

カキイイイイイイイン！！！！

わあ、気持ちのいい音なこと・・・え？

今のつてまさか瑞希？

「うおおおおおお！！！！！！姫路さん最高おおおお！！！！！！」

「吉井と別れて俺とry」「「「「「なにいつてんだテメエ！殺されてえか！！」「「「「すみませえええええええん！！！！！！」

瑞希のようだ

あはははは、苦笑いしかできないよ

「姫路が一点取ったんだ、いけるよな？ 明久」

「もちろん！ 任せとけ！」

今回は最高だよ！ 世界史だもん、僕の一番好きな科目！

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 | Eクラス | 酒井陽介 |
| 世界史  | 772  | V S  | 世界史  |
|      |      |      | 103  |

「何なんだあいつの点数！！」

「おい！ 世界史で噂の吉井だぞ！ 忘れたのか！？」

「そうだった！ 世界史では誰にも負けられないという噂の・・・」

何なんだその噂は・・・

まあいいや！ 僕は僕のしなくてはいけないことをするまでだ！

カキツイイイイイイイイイイン！！

うおう！ 場外まで飛んじやった

ま、いっか どうせ召喚獣用のボールだから範囲から出れば消えるでしょ

「期待には応えたぞ！ 雄二！！」

「おう！ 任せとけ！！」

これでアウトでもとってみろ、異端審問会の名の下で裁きを下してやる！

「アウト——！！！」



一人終了！

ズバン！ カキン！ ズバン！ ズバン！

「バッターアウト！」

一回ファール取られたけど、点数は抑えてる！

ズバン！ ズバン！ ズバン！

「バッターアウト！！！」

よし！守りは完璧！！

問題は攻撃だね・・・次は秀吉からだけど・・・  
秀吉なら！！

カキン！！！！

「（グッ！」

ということで、秀吉がヒットを打ってくれたことで、一塁には秀吉がいる

つぎは須川君だ！

カキン！

「（ニッ！」

おお！一塁と二塁はいるけど・・・次の斉藤君は・・・？

カキン！！

「（フツ）」

これならいける！！絶対にいける！

次は、中村君！！このままなら！！！！

カキン！

ファールか・・・次は！

カキン！

またファール・・・

「ボール！！」

次はボール・・・

完璧に警戒してるね・・・

カキン！

だけど、僕らには通用しない！

警戒したところでFクラスはとまらない！

それで、満塁か瑞希がホームランを打ってくれば一気に4点追加で勝てるのーカキンーに？

「ホッホームラン！」

わぁ、さすが瑞希だね！一気に4点追加だよ！

ぼくは瑞希とハイタッチした後、まさかの瑞希が僕に抱きついてき



っているんでしょ？」

「その可能性が高いな」

雄二もボクも考え込んでしまった

どうなってるんだろう・・・

やっぱりここは

「ババアに聞いたほうが早いな（ね）」

## 第二十五話（後書き）

今回は、時間に押され短くなってしまいましたが次回はがんばりたいです！！

## 第二十六話

コンコン

「どうぞ」

ガチャ

「失礼します」

「おや、ジャリどもかい、ついに礼儀というものを知ったんだ」「ババアということだこれはあ！！！」「前言撤回さね・・・」

ババアがため息ついてる？  
めずらし・・・もないか

「ふん、ババアこの対戦表はどうなってんだ？」

「普通に考えることさね」

「ということは、僕らFクラスは何かやらかしそうなので、一回分やらなければ他のクラスの力を借りるなどする行為はできなくなる  
と??？」

「！！！！！！？」

なに？なんでババアと雄二が同じ反応を見せるの？

そしてどうして雄二は僕の目の前に手をかざして意識があるかどうか確認してるの？

「明久・・・お前・・・」

「・・・」

「ついに言語機能までおかしくなったか？」

「どういう意味なのさあああああああああああ！……！！」

ひどい！ひどすぎる！！

どうして僕が言ったらおかしいの！！！！？

「コホン！ま、そういうことさね」

「「やっぱりか」」

「あんたたちの今までの行為を振り返ってみな」

「覗き、脅迫、協力、………」

雄二……正直すぎるよ（こんなところで）  
なにもかも洗い浚い言っでどうするんだろ……？？

「それだけ上がれば十分さね」

「それだけだ、文句はあるか？」

「大有りさね！！！」

あはは……おっと、お昼が終わっちゃう瑞希と一緒に食べる約束してたんだつたな

早めに戻らないと瑞希に悪いや

「雄二、瑞希またしちや悪いから、僕行ってもいい？」

「おう、せいぜいイチャついてこい」

「ノノノノ雄二も正直になればいいのに……」

「なんかいったか？（ゴキボキ」

「いつてきまーっす！！」

あつぶない……雄二なんか殴られたらひとたまりもないよ！  
そのことは考えてるわけないしね

ボタン

「それでだ………について………という………だ？」

「こつちも………ない………さね」

「契約………だ」

ん？ま、いつかどうせまた雄二がババアに条件突きつけてるんだろ  
うけど………

くく瑞希 SIDEくく

あれ？明久がいませんね？

坂本君とどこかにいったんでしょうか？

「美波ちゃん、明久知りませんか？」

「んく、ウチは知らないわね」

「そうですか………」

「明久なら雄二とともに学園長室に向かっていったと思うがのう？」

「そうですか！ありがとうございます！木下君」

学園長室ですか………何か気になることでもあったんでしょうか？  
さ、今日はがんばって作ったお弁当ですから、明久に食べてもらわ  
なきゃ！！

バタバタバタバタ ドタツ！

「痛いです………」

「うう………つ………あ、ごめん！大丈夫？」

あれ？この声・・・

「大丈夫で・・・す」

「あれ？瑞希??」

「どうしたんですか？そんなに慌てて」

「えっと、その、瑞希と一緒に弁当食べようかって・・・／／／」

わ・・・同じこと考えてたんですね！／／／／

「じゃあ、日陰で食べましょうか！」

「うん！」

くく明久 SIDEくく

僕は走っていた

なんでって？瑞希とお弁当を食べるためだよ！

ドンー！！

「痛いです・・・」

「うう・・・っ・・・あ、ごめん！大丈夫？」

慌てて走ってたら廊下で誰かとぶつかってしまった

相手は女の子みたい・・・悪いことしちゃったな 大丈夫かな？

「大丈夫で・・・す」

この声・・・

「あれ？瑞希？？」

「どうしたんですか？そんなに慌てて」

う・・・ちよつと恥ずかしいな・・・

「えっと、その、瑞希と一緒に弁当食べようかって・・・／／」

「じゃあ、日陰で食べましょうか！」

「うん！」

そういつて僕は手をつないで日陰まで行った  
恥ずかしい・・・周りの視線がとても痛い・・・

パカッ

「わー、おいしそうですね！」

瑞希が身を乗り出して覗き、声を上げた  
そついわれるとさらに恥ずかしいよう／／／

「瑞希もおいしそうじゃん！」

「ありがとうございます！今日のためにがんばっていました！」

「じゃ、楽しみだね！」

うん、おいしそうだ！

「「いただきます！」」

「「おいしい！！！」」

きれいにハモってしまった

「「これ本当においしいよ瑞希！／ですよ明久！」」

「……………ジジ……………ただいまから試召野球大会午後の部を開始します」

「さ、瑞希午後の部が始まるよ」

「はい！がんばりましょう！」

瑞希も元気いっぱい！

僕も負けてられない……………う……………やっぱダメかな？……………いわ……………なきや……………

フラッ

「明久！！？」

「大丈夫……………」

気持ち悪い……………見えすぎで気持ち悪いってあるんだね……………あんまりないからわかんないよ……………っていうかないよね……………こんな……………こと……………

「大丈夫だから……………ね？」

「ですけど！」

「今、瑞希のボールを取れるキャッチャーは僕だけなんだから……………ね？もう少しだけ」

「分かりました……………無茶は……………しないでくださいね……………？」

「わかったよ」



「夏川、試合でやりやいいだろ？」

「はあ、はあ、そう・・・だな・・・はあ」

叫びっぱなしだよ・・・

「そろそろ試合を始めましょうか、先輩」

「そうだな」

僕らが先攻、打順はEクラスのとくと変えている

最初は瑞希、科目は古典、ほぼ美波の出番はないと思っていいだろう

- |   |      |        |
|---|------|--------|
| 1 | 姫路瑞希 | ピッチャー  |
| 2 | 吉井明久 | キャッチャー |
| 3 | 土屋康太 | ファースト  |
| 4 | 木下秀吉 | セカンド   |
| 5 | 中村直人 | サード    |
| 6 | 神崎竜也 | ショート   |
| 7 | 坂上俊  | レフト    |
| 8 | 坂本雄二 | センター   |
| 9 | 須川亮  | レフト    |

補欠 島田美波

斉藤裕也

「おつ、お願いします！ 試獣<sup>サモン</sup>召喚」

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 姫路瑞希 | Aクラス | 夏川  |
| 古典   | 436  | VS   | 275 |

「おい！システム！！俺は苗字だけじゃねえか！！」

「そんなことにいちいち言ってたら時間の無駄だぜ？先輩」

「くっ、常村！」

「おう」

っ！！敬遠か……

瑞希が一塁に……

「お願いします、先輩 試獣召喚<sup>サモン</sup>」

Fクラス 吉井明久                      Aクラス 夏川

古典                      6 3 4                      VS                      2 7 5

「なんなんだよ！吉井！お前の点数はよお！！！！」

「僕の実力ですよセンパイ！」

カキイイイイイン！

0 - 2

Fクラスに2点入った、とりあえず先制点は取った

次はムツツリー二だけど……古典か……

「………試獣召喚<sup>サモン</sup>」

Fクラス 土屋康太                      Aクラス 夏川

古典                      2 3                      VS                      2 7 5

「………はあ………」

ふっ二桁・・・ムツツリー二保健体育以外はダメなのか・・・

キン！

「え？」

ヒット？二桁のムツツリー二が？

「・・・俺をなめるな」

おおおお！！！！ムツツリー二のおかげで二桁の皆の士気が上がったね！

「<sup>サモン</sup>試獣召喚」

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 木下秀吉 | Aクラス | 夏川  |
| 古典   | 102  | VS   | 275 |

「ん？秀吉点数上がったね」

「うむ、おぬしを見ていたら、負けられないと思っの」

キンッ！！

おお！！！！一塁、二塁だ！次は中村君！

「アウト！」

「アウト！」

「バッターアウト！チェンジ！」

「すまない……」

「よろしくな、吉井」

「はい、センパイ」

「くっ、点数高いな・・・」

「瑞希ですから」

「余裕だな？」

「当たり前じゃないですか」

ゴッ

「何しやがる！！」

「すみません、先輩がそんなところにいるからボールが当たっちゃったじゃないですか」

「何だとゴルア！！」

「勝負に事故はつき物、なんですよね？」

先輩は、多少怒ってるかな??

まあ、瑞希を信じなきゃ・・・何もかもうまくはいかない  
そう・・・決めたから・・・！

「ストライク！バッタアウト！！」  
「・・・ちッ！」

夏川センパイは空振り三振でアウトだった  
次は常村先輩だ・・・

|      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| Fクラス | 姫路瑞希  | Aクラス | 常村勇作  |
| 古典   | 4 3 6 | V S  | 2 2 1 |

「バッターアウト！」

常村先輩も空振り三振、あと1つアウト取るだけで守備は終わる

|      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| Fクラス | 姫路瑞希  | Aクラス | 日向南   |
| 古典   | 4 3 6 | V S  | 1 9 2 |

ん？だんだん瑞希の体力なくなってるかな？  
ボールのキレがなくなってきた・・・  
召喚獣だけどそういうのあるのかな？

ヒュルッ

っ！スローボール！！まずいこれを打たれたら！

カキイイイイイン！！

「しまっ！！」

「ホームラン！」

「なっ！」



## 第二十六話（後書き）

痛い？なんで？ということをお次回書きたいです。  
常村先輩はうる覚えですみません＞＜



「皆はなぜか僕みたいにフィードバックがあるんだよ」

「っ……要するに、召喚獣が受けた痛みは本人にも来るといってとだな……いつてえ」

「ごめん雄二、別に雄二じゃなくてもよかったんだけど、今までの借りを返——」

ゴキツバキツ

「すみません、本当にすみません、次からは須川君の召喚獣で試します」

「よし、許そう」

「なんでだ!!!???」

いやあ、雄二は怖いね

怒らせたら怖いね アハハ

「つたく、そんなことするから、こういう手段を選ぶほかなくなつたんだがねえ」

「『『『『『『『『『『干物のせいかなぁあああああああ!』』』』』」

「誰が干物だい!失礼ながきどもだねえ」

うわあ、干物が歩いてきたよ……

焼却炉行き決定だったのに逃げてきたか……  
腐るよ?

「あのっ!どうしてこっフィードバックという手段を取ったんですか?」

「姫路かい、そうさね……今までの行為を見てごらん、Fクラスのバカ共と3-Aのバカ共、両方に処罰が下されるよりもフィード

バックで済まされるだけいいと思いな」

「「「「「「「「「「フィードバックは痛えじゃないですか!」」」」」」」」」」

「痛くなかったら処罰の代わりにはならないさね!」」

僕にはほぼ関係ないけどね

毎回フィードバックですでに痛いから・・・

「ついでに吉井」

「僕はついですか!?!」

「よく聞きな、アンタは逆にフィードバックがなしにしてある。たまにはいいだろう?」

「本当ですか!?!学園長!」

「こんなときだけ都合のいい・・・まあ、そういうことさね」

やった!これで痛みとはおさらばだ!!(試召野球大会だけだね)

「プレイ!」

1 - 2

ツアアウト一塁

後ちょっとなのに取れないってきついなあ・・・

「タイム!」

「どうした明久」

「選手交代」

「は?」

瑞希の体調のほうが優先だよ！

ピッチャーは僕がやる、雄二がキャッチャーになる、瑞希は休憩で美波がセンター

で、どうだろう？

- 1 吉井明久 ピッチャー
- 2 坂本雄二 キャッチャー
- 3 土屋康太 ファースト
- 4 木下秀吉 セカンド
- 5 中村直人 サード
- 6 神崎竜也 ショート
- 7 坂上俊 レフト
- 8 島田美波 センター
- 9 須川亮 ライト

補欠 姫路瑞希 斉藤裕也

「……………悪くはないが、お前の玉を俺が取れると思うか？」

「（ニツ）大丈夫、そこは何とかしてあるから……………」

「??？」

「プレイ!!」

「ちょっと待ってください!!!」

「……………はい？」

二回目の中断で審判も呆れ気味だ

そして、僕の差し金……………結構いい考えだね!!

「先生！！ちょっときてください！」

「ですが！今は試召野球大会で・・・」

「Aクラスの久保君がいきなり倒れたんです！保健の先生もいませんし、職員室に向かつて誰もいなくて、そしてちょうどやっている野球大会で先生方がいるので、きてもらってはどうかと代表に言われましたので・・・」

「・・・！」

「先生、行ってください！ここは私が代わりにやりますから」

「お願いします・・・！」

「先生！Aクラスです」

「分かりました！」

最初から久保君に頼んでおいて正解だったよ・・・  
何で了承してくれたのかは分かんなかったけどね？？  
なんでだろ？

「私が代わりにやります」

そして入るのは、保健体育の先生ということだ！  
なぜ自信満々かって？なぜなら！参考書（エロ本）を没収されたため、保健体育の成績が落ちたのだ！

↑

「プレイ！！」

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 | Aクラス | 木村優香 |
| 保健体育 | 125  | VS   | 201  |

ちなみに雄二の召喚獣の点数は241だ  
この点数差なら、雄二も取れるでしょう！

ズバン！ズバン！ズバン！

「バッターアウト！チェンジ！！」

よし！アウトが取れた！

この調子なら・・・美波！頼む！！

カキーン！！

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 島田美波 | Aクラス | 夏川  |
| 保健体育 | 95   | VS   | 199 |

「「「「「おおおお！！！！！！」」」」」  
「ウチだってやるときはやるのよ！」

一塁だ！次は須川君だ！

このままムツッリーニまで回せば・・・！  
でも、ムツッリーニは敬遠されるかな・・・

キーン！！

っ！セカンドフライ！

このままじゃ取られる！！

「アウト！！」

取られちゃったか・・・

まだまだあるから大丈夫だよ！だぶん・・・



デジャヴかな・・・？  
つとそのまえに

「すみません先輩！ボールが変な方向に飛んでいつてしまつて夏川先輩（クソ野郎）に当たつてしまつて本当にすみませんでした！！」

「いいんだぜ吉井・・・」

「！！？」

「勝負に事故はつき物なんだろう？」

「はい！」

これで機嫌は取れたかな・・・

次は雄二だけど、まあ今のでちょうど坊主先輩のミットのなかに僕の打ったボールが入っちゃったからアウトになっちゃったんだけど・・・

カキイイイイイイイイイン！！

「ホッホームラン！！！」

わー、雄二早いね・・・次は康太か・・・一点は確実かな？

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 土屋康太 | Aクラス | 夏川  |
| 保健体育 | 595  | VS   | 102 |

くっ、やっぱり敬遠か・・・

次は秀吉だから上手くやってくれればいいんだけどな・・・

キーーーーーン！

おお！あれはセンターとセカンドの間・・・ちょうどいいね

・ 二人が譲り合ってるうちにボールが落ちてアウトは免れたけど・

「・・・・・・・・加速」

「「「「「はあああああああ!!!!!!!!!!!!????????」」」」」

「・・・・・・・・加速終了」

「「「「「流石ムツツリー!!!!!!!!!!!!」」」」」

1 - 5

「明久、いけるな？」

「もちろん！」

大量虐殺の予感・・・

## 第二十七話（後書き）

~~~~~反省会~~~~~

明「これはどういふことなのさ!?!」

青「どうもこうもないでしょ?」

雄「ま、そうだよな」

美「なにが?」

明「僕の性格がおかしな方向に腕が曲がるつつつつつつ!?!?!」

青「文句あるんですかああああ!?!?!?」

明「ありません、すみませんでした。っていつかなんで関節技かけたの美波なの!?!?」

美「なんとなく」

明「なんとなくで関節技かけられたの!?!?」

雄「諦めろ、明久。お前の力では女子には勝てない」

明「くそっ!認めるしかないのか・・・!」

秀「何の劇をやっておるのじゃ・・・」

第二十八話（前書き）

はあ、1 - 5 って何なんですか？

F クラスにそんな力があるんですか？？

書いてる自分聞きたいですね・・・

第二十八話

アウトが1、ランナーなし

1 - 5

何なんだろうこの展開

「中村君！頑張ってね！」

「おう！任せとけ！！！」

「ストライク！バッターアウト！」

「「「「歯あ食いしばれえ！！！！」」」」

4点差あるのに・・・

次は神崎君だけど・・・あの人結構有名なんだよね・・・
売られた喧嘩は買うという・・・

「ストライク！バッターアウト！チェンジ！」

「「「「歯あ食いしばれ！！」」」」

「お前らがな・・・」

ゴキ！バキ！グシャ！

合掌

これで・・・っ！！？

先生が戻ってきた！！？

「すみません、遅れました・・・ハア」

「ちようどいいところに、先生交代します」

しまった・・・これじゃあ古典に戻ってしまった・・・！
僕の点数は634・・・雄二の召喚獣が消し飛んじゃうな・・・
それはそれでざまあみろ・・・じゃなくてそれじゃあ困るし・・・
こうなったらあの手段！！

「雄二、試合始まったら思いっきり僕にボールぶつけて・・・」

「なんだって！？お前・・・」

「僕の点数覚えてるでしょ？」

「ああ・・・」

「ね？雄二の点数じゃ戦死にはならないよ」

「言ってくれるじゃねえか」

交渉成立、先輩は喜ぶだろう・・・

「プレイ！」

| | | | |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 吉井明久 | Aクラス | 河合悠 |
| 古典 | 634 | VS | 211 |

「っ！」

まずはスローボール！次は作戦通りだ！！

ズバン！

ええ・・・スローボールであんな音なの？

・ 雄二の点数が5ぐらい削れたなあ、5なだけまだいいと思うけど・・・

カキイイイイイイイイイイ！

「ホームラン！」

「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」「お！」

このままいけば！

「ストライク！バッターアウト！チェンジ！」

「ちくしょおおおおお！……！」

くそ！

Fクラス 姫路瑞希

Aクラス 御手洗大貴

| | | | |
|----|-------------|--------|-------------|
| 古典 | 4
3
4 | V
S | 1
6
2 |
|----|-------------|--------|-------------|

「えーいーいー！！」

ゴッ
ッ
!!

「ごめんなさい! ごめんなさい!」

Aクラス 3人目、ご愁傷様です（合掌）

瑞希……一体どうしたんだろう……

フラッ
あれ？また・・・
結構きついな・・・

そういえば・・・瑞希の様子がおかしくなったのって、僕の体調を
知ってからだったのか・・・

まさかね
・
・
・

「『『『『3-A、棄権します!』』』」
「本音は?」

「『『『『これ以上被害を食ってたまるか』』』」
「本当は?」

「『『『『痛い思いは御免だ』』』」

何かこういう勝ちかたって……いやだなあ……
でもって、やっぱり気持ち……わるっ

「明久?大丈夫ですか?」

「ちよつとダメみたい……後……頼める……かな?ちよつと寝る……から……」

「はい、任せてください」

~~~~瑞希 SIDE~~~~

その言葉を聞いたあと、安心したのか明久は意識を失ってしまいました……

無茶をしていたのでしょうか?

まったく……明久ったら……

「吉井はどうしたんだ?姫路さん」

「頑張りすぎたみたいです」

「それならいいんだけどね、瑞希大丈夫?」

「はい」

「わしも手伝うかのう?」

木下君は優しいですね

「大丈夫ですよ」

「じゃが……保健室まで付き添おう」

「ウチも行くわ」

「ありがとうございます」

保健室に向かうと、坂本君と先ほどのAクラスの方が居ました

「ひいひいひいひい！！！！」

「？？」

「くくくくくくく」

坂本君はなぜ笑っているのでしょうか？

とにかく、明久を横にしてあげて・・・

早く目を覚ましてくれるといいのですが・・・

「瑞希・・・冷静ね・・・？」

「そうじゃのう・・・」

「明久を・・・信じてますし、それに後は頼むって言われてますから・・・でも、本当は不安なんです・・・明久がもしおきなかったら・・・目を・・・覚まさなかったら・・・って・・・」

不安と心配でいっぱいなんです・・・

私は・・・明久を信じています・・・

「聞いたか？なんていいカップルなんだ・・・」

「ああ・・・あ、目から汗が・・・」

「涙だろ？アホだな」

「隠してんだよ！」

「うるせえ！ばれたらどうするんだよ！」

「これ以上見れなくなるのは御免だぞ・・・」

「それは俺も一緒だ」

「異端観察会の名の下に」

何の話でしょうか？

「あいつらアホ？」

「そうじゃな、声が丸聞こえじゃ」

「なんのはなしですか？」

「張本人が気づいてないのもすごいわよね・・・」

「そうじゃな」

「??」

「一体何のお話でしょうか??」

「ん・・・うあ・・・」

「「「明久／アキ!!」」」」

## 第二十八話（後書き）

反省会

明「どういうこと？」

青「なにが？」

明「だから、僕の体調！」

青「それ知ってるの明久でしょうが」

雄「だよな」

秀「じゃな」

ム「……………（コクコク）」

明「何かひどくない！！？」

青&雄&秀&ム「何が」

明「もういいです」

青「ククククク」

明「遊んでるな貴様ああ！！」

青「瑞希いいいい！！明久が虐めるうつつうつつ！！」

瑞「え？あ？はい！」

美「よくやるわね、青龍」

青「何の話？？」

美「あのね・・・」

明「話がそれたよ！！？」

雄「簡単にあしらわれたな」

秀「明久は弄られキャラだのう」

ム「・・・一部人気」

明「何だつて！！？」

青&瑞&美「話に置いてかれてる・・・」

美「一体何の話なの？」

明「・・・」

青「まさか？」

瑞「忘れたとかじゃ」

雄「ないだろうか？」

明「（コクリ）」

青&瑞&美&雄&秀&ム「はああああ・・・」

愛「いきなりですが！これからもこの小説をよろしくお願いします  
！！」

ム「工藤愛子・・・なぜここに・・・」

愛「なかなか終わらないから」

青「申し訳ございません（土下座）」

## 第二十九話

~~~~明久 SIDE~~~~

皆が僕を呼んでる・・・
起きなきゃ・・・

「ん・・・うあ・・・」

「「「明久／アキ！！？」」「」」

皆が僕を覗き込んでいる
不安でいっぱいの瑞希の顔

心配だったのよといいかねない美波の顔
僕が起きてほつとしたような秀吉の顔

この世のものとは思えないような雄二の顔
おっと、修正 この世のものとは思えないと言いたそうな雄二の顔

「なぜか明久を殴りたくなっただんだが？」

「ダメですよ、坂本君」

瑞希が止めている

瑞希じゃなかったら僕に殴りかかっていただろう
ま、そのときは霧島さんにメールするのみ・・・

「何だよ雄二・・・そんなに僕を殴りたいの？やってみなよ、後々
どうなるか（スッ）」

「っ！！？卑怯だぞ！！？」

「卑怯も何もないでしょ？（黒二コッ）」
「っ・・・」

どうしたんだろう雄二

あ、結局試合は・・・

「試合って・・・」

「3-Aが棄権したのじゃ、これ以上痛い思いはいやだったのう」

「そうそう、意気地なしね」

「意気地なしって・・・当たったら痛いんだよ・・・」

「なんですか？明久??」

「なんでもございません」

おおう、瑞希に聞かれでもしたらどうなるか分かったもんじゃない

「それより明久、そろそろ白状しろ」

「っ・・・そうだね・・・」

「白状って・・・」

「ごめん・・・まだムツリ商会で秀吉の写真少しだけ買ってるんだ!!」

「明久・・・俺は・・・そんなことを聞いたんじゃない!!」

え？

このことじゃないって言ったらどうなるんだ??
うーん、まだ。口本を持つてることかな？

ゲームをしまくって、食費がなくなったこと??

「倒れた理由よ」

ああ、それが

「えっとね、きもちわるくなっただからたおれちゃった」
「幼稚園か」

「酷い！！？それは酷すぎない雄一！」

「本当はなんなのじゃ？」

「本当に気持ち悪くて倒れたんだってば！見えすぎて・・・」

「ふーん・・・え？」

わー、なんてタイミングのいい・・・

「どういう意味だ？」

「そのまんま、前に動物入れられたって言ったでしょ？」

「ああ・・・」

「でね、鷹って視力結構いいでしょ？視力すごすぎて気持ち悪かったわけ」

「なるほど」

本当に分かっているのかな？

ま、いつか

「視力を抑える方法はないのかのう」

「聞いたことないわね」

「コンタクトとかないのか？」

「病院で聞いたほうが早いかな？」

「そうだな」

今度行くみたいだし、聞いてみよっか

「瑞希、知ってたの？」

「はい・・・」

「何で教えてくれなかったの？」

「明久が大丈夫だって言っていたので・・・」

「大丈夫なわけじゃない！！」

(ビクッッ!!!)

美波が怒鳴った・・・

瑞希・・・

「アキが倒れるかもしれないのに・・・!!」

「すみません・・・すみません・・・」

「美波よ・・・」

「秀吉は黙ってて」

「はい」

秀吉が簡単にあしらわれた・・・!?

雄二に期待を・・・した僕がバカだった

”翔子!!?なぜここに!?”

”今からデートに行こう?”

”拒否権は?”

”逃げなければある”

”・・・・この間開店したカフェでも行くか・・・”

珍しい、拒否権あるなんて・・・

雄二が誘うのも珍しい・・・

「美波、そのくらいにしてあげて」

「なによ!?!アキまで瑞希の肩持つの!?!アキのことなのに!?!彼女だからなの!?!」

「違うよ美波」

「だったら何って言うのよ!?!」

「一人の・・・人として・・・」

そうだよ・・・もはや僕は人とはいえないかもしれない
こんな目だし・・・ね？

「でも・・・！！」

プツン！

「でももなにもねえんだよ！俺がいつて言っただよ！俺が・・・俺が・・・！！」

「もういいんですよ、明久」

「瑞希・・・！！」

「もう・・・いいんですっ・・・私が・・・私が言わなかったのが悪いんですっ！」

「・・・・・・」

瑞希・・・

くっ・・・何もしてあげることができない・・・
こんなにもどかしいことだなんて・・・！！

「美波ちゃん・・・ごめんなさい 坂本君も木下君もごめんなさい」

「ごめん・・・瑞希・・・」

「私こそ・・・美波ちゃん、すみません」

・・・優しいね・・・瑞希も美波も・・・
はっ！さっき美波に怒鳴っちゃった・・・

「美波・・・さっき怒鳴ってごめん・・・」

「いいのよアキ」

「ありがとう」

「っ．．．ひつく．．．」

「？」

誰か泣いてる？

一体誰．．．．．

「瑞希．．．」

「ごめっ．．．なさっ．．．ひつく．．．」

「瑞希．．．泣かなくてもいいんだからね？ね．．．瑞希」

「はいっ．．．ひつく．．．ぐす．．．」

さっきの言葉は瑞希にはきつかったのかな．．

ん？雄二がサインを．．

” 姫路を抱きしめろ ”

ふっ、いったいなにを．．（ガクガクガク）
しまった．．体が反応してしまってる．．ん？
あそこに霧島さんが．．よし、僕もサインを

” 雄二とデートはいいの？ ”

” ．．．行って来る ”

” 行ってらっしゃい ”

雄二、行ってらっしゃーい

くくく

っ．．．雄二のサインどおりにしようかな．．

「ひつく・・・ぐす・・・」

理性持つかな？

ええい！迷うのは僕らしくない！

すっ

「え？・・・ひつく」

「泣きたいときは泣いていいよ・・・瑞希・・・」

「ひつ・・・うわああああああん！！」

「すみません・・・でも、思いつきり泣いたらすつきりしました」

「よかった、溜め込まないでね、瑞希」

「はい・・・！」

何か僕・・・すごく恥ずかしいことしているような感じが・・・
気のせいだといいなあ・・・

そういえばさつき雄二の叫び声に似た声が聞こえたけど気のせいだ
といいなあ・・・

あははは・・・

第二十九話（後書き）

~~~~反省会~~~~

青「大変短くて申し訳ございません」

明「ほんとだよね！」

青「明久に言われる筋合いはない・・・（ボソ）」

明「え？」

青「瑞希！大丈夫？」

瑞「大丈夫です」

青「あー！さっき明久と場所交代したかったあ！！！！！！」

明「なんだってー！！」

雄「リアル女じゃねえか」

青「夢は大きく持とう雄二、それほど大きな夢はいえないか雄二の場合」

雄「誰のせいだ誰の！！」

青「秀吉<sup>ボソッ</sup>」

秀「うむ・・・翔子のせいだよなあ」

雄「おつ俺はそんなこといつてないぞ!!」

翔「……雄二……酷い……」

青「お詫びに雄二を1週間貸そう、翔子」

翔「……ありがとう青龍はいいひと」

明&雄「騙されるなああああああ!!!!!!」

青「がんばってね」

雄「ぎゃあああああああ!!!!!!!!」

青「喜んでもる」

明「臨死体験だと思うけどね……」

瑞「あはは……こんな感じですが」

全員「これからも、よろしくお願いします!!」

青「ということでもよろしくお願いします」

明「読者さんと僕らに対する態度違う??」

青「気のせいですよーアハハハハハ」

### 第三十話（前書き）

バカテスト （作者が中学1年のため、中一の問題です）

1185年、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡しました。

源 頼朝とともに戦った弟は誰でしょう。

漢字で答えなさい

木下秀吉の答え

源 経義

教師からのコメント

・・・逆ですね・・・

土屋康太の答え

義経 源

教師からのコメント

逆です

吉井明久の答え

源の義経

教師からのコメント

みなもののよしつね  
にするつもりですか？

坂本雄二の答え

源 義経

教師からのコメント

正解です。

島田美波の答え

源

教師からのコメント

フルネームも加えたほうがよさそうですね。

このような答えが来るとは思ってもいませんでした。

### 第三十話

「雄二・・・君の事は忘れないよ」

「なぜ初めから別れの言葉なんだ？明久」

「どうせ戻ってきたところで、異端審問会にかけられて拷問の刑になるはずだから」

「どうか・・・明久」

「ん？なに？」

「歯を食いしばれ」

わーーーーお

後ろにいたのね、雄二君

「いやだなあ、雄二そんな新郎のすがたして・・・して・・・」

流石霧島さん

やることが端折ってる

pi, pi, pi, pi, pi

「何してる明久」

「ちよつと霧島さんに電話を・・・」

prrrrrrrrr

ガチャ

「あ、霧島さん？吉井だけど」

「・・・吉井？どうしたの？」

「18歳になるまで結婚できないから、18になるまで我慢しなく

「ちゃダメだよ？雄二からのメールにもあったでしょ？」

「……………そうだった、忘れるところ……………ありがとう、吉井」

「どういたしまして、お幸せにね」

「……………／＼ありがとう」

プツッ

これで一件落着……………

「明久、どうもありがとな」

「いやいや、そんな礼を言われるようなことは」

「俺の寿命を早めてくれて」

「ちよつと待った雄二、君は一体結婚式に何をするつもりなんだい？」

今度は雄二が端折ってる……………僕だけじゃ突っ込みきれない……………  
秀吉なら突っ込んでくれるかな？

「そのくらいにしときなさい、坂本」

「そうじゃな、諦めるのじゃ」

「……………異端審問会は人の幸せを許さない……………！」

「まあ、坂本君も翔子ちゃんを信賴していますから」

「そうなのかの？雄二よ」

「そんなんじゃ……………ねえ……………」

覇氣がない

なんてテンション駄々下がりなんだ……………

ポロッ









・  
」

「まあ、そんなもんだからな」

「なに！？貴様初めからそのつもりでいたな！」

くそ！だまされた！

雄二の手に引つかかるところだった・・・いや

引つかかるも何も決まっちゃったからなあ・・・

意味ナシ・・・か

「すまない明久」

「雄二が謝るなんて珍しい」

「これはFクラス男子全員で決めたことで、全員で仕組んだことなんだ」

「なんだと！？全員して仕組んだことだったのか！？」

くそ！皆嫌いだあ！

「姫路が相手でよかっただろ？」

「ふん、男子じゃなくてよかったよ」

「・・・本音は？」

「めっちゃくちゃ嬉しい、マジで夢かと思ったぐらい」

あ、つい・・・

瑞希が赤面して固まっちゃった・・・

### 第三十一話（前書き）

バカテスト 数学

問題 Yを求めなさい

$$4(Y+3) = -9(Y-5)$$

姫路瑞希の答え

$$4Y + 12 = -9Y + 45$$

$$4Y + 9Y = -45 - 12$$

$$13Y = 33$$

$$Y = 33 / 13$$

教師からのコメント

正解です

式を書くことで正確さが上がりますね

吉井明久の答え

$$Y = Y \text{ シャツ}$$

教師からのコメント

どこからその言葉が出てきたんですか？

そのほうが気になりますね

土屋康太の答え

$$Y = \text{吉井}$$

教師からのコメント

他にもイニシャルがYの人はいます

坂本雄二の答え

Y「吉井「バカ」……………」

教師からのコメント

どこまでも続きそうですね……………」

学園長からのコメント

数学なのに……………ハア……………」

# 第三十一話

「今日はこれで解散！」

「……おー！……！」

「瑞希、帰ろ！」

「はい！」

劇の練習かあ

緊張しすぎて声が出ないとか本番にならないようにしなくちゃな……

「明日から練習ですか．．．緊張します．．．」

「瑞希なら似合うから大丈夫！」

「そっそっですか？ありがとうございます」

やっぱり瑞希は誰かに見られるっていうのが苦手なんだね・・

「私はこのあたりで」

「うん、じゃあまた明日！」

「はい！」

「ただいまあ！」

「お帰りなさい」

「明日から劇の練習だつて」

「何かあるんですか？」

「演劇祭だつて」

「何をやるんですか？」

「シンデレラだよ」

「役はなんですか？」

「王子役」

「相手は誰ですか？」

「瑞希」

「それを聞いたときの気持ちは？」

「夢かと思っ——って姉さん！？違う質問も混ざってるよ！？」

何を言うかと思いきや・・・（ドキドキドキ）

「台詞覚えてくる！」

「がんばってくださいね」

「うん！！」

「私と踊っていただけませんか・・・はあ・・・こんなキャラじゃないからな・・・」

シンデレラって・・・また・・・まあロミオとジュリエットじゃないだけ・・・

「この靴は・・・探し出せ！この靴に合う足を持つ女性を！・・・って自分で探そうよ」

突っ込みいれつつやっても面白くない・・・はあ

「おお！この女性こそ私の求めていた女性だ！・・・なんてね（笑）」

これで一通り言っただけ、覚えた様な気がしないな・・・  
もう一通り！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アキくん、ご飯ですよ」

「あ、うんありがとう、すぐいくよー！」

残りは後でっ！

---

はっ！？

すっかり・・・じゃなくてぐっすり寝てしまった・・・  
練習するつもりが・・・

ま、いつか早めに行って練習すれば・・・

「いってきまーっす！」

「いってらっしゃい」

バタバタバタバタ

「あ、瑞希！」

「明久、早いですね」

「練習しようと思ってね」

「私事です」

ガラッ！

「おはよー!」

「おはようございます」

「おはようなのじゃ!」

「・・・おはよう」

「おう」

皆そろってる・・・珍しい

あ、そうだ

「瑞希!一緒に練習しない?」

「いいですよ」

「じゃ・・・私と踊ってくださいませんか?」

「え・・・私でよろしいんですか?」

「喜んで」

パチパチパチパチ

「「え?」」

「流石だな」

「ワシも驚いたぞ」

「・・・すごい」

僕たち二人が顔を見合わせて苦笑いした

「「ありがとうございます／＼／＼／＼／」」

「おっと、練習始めるぞ!!!」



「邪魔するな！」

なぜ！？皆劇の練習してるのに

何で僕だけ注意されなきゃならいの！！？？

「お前ら全員保健室に行つてきなさい・・・いや病院へ行つてきなさい」

「「「「「「「「「「俺らが真面目に練習してちゃおかしいんすか！！？」」」」」」」」」」

「ああ、おかしい」

「「「「「「「「「「酷くないですかあ！！！！！！？？？」」」」」」」」」」

おおう、僕よりも酷い扱いうけてるなあ

まあ、君たちは授業中異端審問会の鎌とかを研いでるんだから・・・  
・ねえ・・・

それに比べたらまだいいって・・・

「俺たちが失敗したら吉井の勇姿を」

「姫路さんの美しい姿を」

「「「「「「「「「「見られないじゃないですか！！」」」」」」」」」」」」

オーケー

君たちの考えてることが分かったよ・・・

え？僕の勇姿？

そんなの見て何になるんだろう？？

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

わぁ、可愛いリンゴ

じゃなくて！

瑞希真っ赤だな・・・ははっ

### 第三十一話（後書き）

一体何が書きたかったんでしょうか？  
↑

ちなみに、バカテスト 数学 は、あつてる自信ないんですよ．．

．  
八八．．．

## 第三十二話

ふわああ・・・やつと3時間目が終わった・・・  
何かつかれたあ！

「・・・・・・・・・・（ブツブツブツブツ）」

「どうしたの？瑞希」

「あ、明久・・・えっと、劇の動作がいまいちわかんなくて・・・」

「ああ！僕もあるよ！」

「本当ですか？あ、そうだ、今度一緒に練習しませんか？」

「それいいね！」

劇の練習が思いつきりできる！

あ、秀吉呼んでもいいかな？

劇上手いし・・・あ、でも・・・

「木下君を呼んで練習しますか？」

「え？あ、うん？」

「どうして疑問系なんですか？」

「あ、いや、僕もそう思ってたから」

「そうなんですか・・・フフツ」

ついでだ！雄二とムツツリー二とか呼んじゃえ！

あ、雄二を呼ぶなら霧島さんも呼んで・・・ムツツリー二だったら  
工藤さんを・・・

そうだ、秀吉呼ぶなら、美波も呼ばなくちゃ！

「瑞希」

「なんですか？」

「秀吉だけじゃなくて、美波と2カップル呼んでもいいかな？」

「はい、いいです！楽しみですね！！」

「だね！」

さあ、どんな風に楽しもうか・・・

ムツツリー二と工藤さんは結構楽しんでそうだし（保健体育の勉強  
系で）

雄二と霧島さんは浮気系統でいるはずだし

秀吉と美波は・・・普通だよ

「おい、練習だつてよ」

「見に行くか？」

「バカ！ばれるに決まってるだろ！」

うん、もうばれてるからね



「…………試着をしてもらいたい、あっているかどうか…………」

「「「「「よっしゃあああああ!!!!!!!!!!!!!!」」「」「」」

何を喜ぶ必要があるんだろう

はっ！さては瑞希の衣装目的だな！？

または秀吉と美波の衣装だな！

「……………（グッ）」

ムツツリーニの（グッ）の意味が分からない…………

「—さあ、早く衣装に着替えよう（ムツツリーニ最高）！」

本音ダダ漏れ…………

---

お、僕のぴったりだ  
今僕が着ている服は

メインに青がされていて、両肩に金色の…………ナニコレ…………  
あと、なんていうんだろっ、ものすごく…………すごい

冠は、本物みたいに金色で光っている…………

腰には剣がささっている

「着れたよー！」

ザッ！

「「「「「「「「「「おおおおお・「「「「「「「「

「明久にしては似合ってるじゃないか」

「にしては、って言うのは余計だと思うんだけどねえ……（笑顔）」

L

「訂正しよう、明久に似合うなんてムツツリーニはすごいな（笑顔）」

**L**

「おい、あそこの空気おかしくないか？」ボソッ

「黒いオーラが包んでるぜ……」ボソツ

ザッ！

「こっ、これでいいんですか？」

そういつて出てきた瑞希の衣装は  
薄い水色のドレスで装飾は派手じゃない  
そんなところが瑞希に合っている  
髪は軽く上に縛ってある

いつもと違う瑞希に僕の胸は高鳴った

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

「そつ、そんなに似合いませんか？」

「いや、姫路大丈夫だ　こいつらはきれい過ぎて目がどうかしたら  
しい」

間違っではないない

間違っではないないけど・・・

「綺麗だなんて・・・」

「瑞希・・・似合ってるよ」

「ありがとうございます、明久だって似合ってますよ?」

「ありがとうございます!」

## 第三十二話（後書き）

演劇祭、こんなで間に合うんでしょうか!？

### 第三十三話

〃〃翌日〃〃

ねむい・・・昨日練習しすぎたかな？

「おはようございます、アキくん」

「あ、おはよ、姉さん」

姉さんが起こしに来るなんて珍しい・・・  
手には何も持っていないし・・・

以前化粧品を持って僕の目の前に現れたことがあったからそれ以降  
は自分で起きるようにはしてたんだけどね・・・  
ふあ・・・まだねむいなあ・・・

「アキくん、きょうは病院に行きますよ」

「分かってるよ・・・眠い・・・」

「では、目が覚めるようなチュウを・・・」

「あー！すつきりねた！目がパツチリ冴えてるよー！」

「そうですか・・・」

なぜそんなに残念そうなんだ・・・  
実の弟にチュウしたかったのか！？

~~~~病院にて~~~~

「・・・・・・・・・・・・・・・・ってことなんです」↑（目が見えすぎと
いうこと）

「・・・・・・・・」

「先生？」

「よし！」

「うわぁー!!」

「どうしたの？明久君」

どうしたのって・・・・・・・・自覚無いのかこの人・・・
あーびっくりした・・・

「目のことなんです・・・」

「このコンタクトと眼鏡を渡しておくよ。これなら少しは視力を抑
えられるでしょう」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

あつたんだ！視力を抑えるための眼鏡とかコンタクトって・・・
初めて知った！

「ありがとうございます」

こうやって見ると、姉さんも一般的な姉なんだけどなあ・・・

「さあ、アキくん学校へ行きましょうか」

「うん！」

~~~~~学校~~~~~

スタスタスタ

ん？あれは・・・Bクラスかな？なんでFクラスに・・・

” ” ” ” ええええええええええええ！！！！ ” ” ” ”

何があつたんだ・・・？

宣戦布告とか？

一応今のFクラスはAクラスの設備だけど・・・  
ま、ありえな・・・くもないか・・・

ガララッ！

「おっはよー！！！」

「おう、来たか明久」

「うむ、おはようじゃ」

「・・・おはよう」

「おはよーアキ」

「おはようございます、明久 あら？眼鏡・・・」

「あ、うん、視力を抑えるための・・・ね」

「あるんだな、そんなもん」

「そんなもんって・・・」

「あ、そうそう」

「さっきのBクラス何しに来たの？」

「Fクラスに宣戦布告だ」

「ふーん」

「なんだ、驚かないのか」

「途中まで聞いてたからね、予想がついたよ」

「明久の癖に」

「どういう意味かな？聞き捨てならないね？」

「やるか？明久」

「おう、やってやろつじやな」おまえらあ！！」「鉄人！！？」

バツ

あれ？・・・誰もいない・・・？  
さては！！

「秀吉！？」

「うむ、おぬしらの喧嘩が始まっではどうしようもないからのう」

「ごめん・・・」

「悪い・・・」

演劇祭の練習中に宣戦布告とは・・・  
何を考えてるんだろう・・・ただのクラスの設備が狙いかな？・・・  
ほかは・・・

「演劇祭、Fクラスの勝利を防ぐため・・・」

「っ！？」

「・・・可能性は否定できない」

「でも！どうしてBクラスは・・・？」

「いいか、姫路。Bクラス代表は根本だ、BクラスはFクラスに恨みを持っている・・・そのことから考えれば、Fクラスを落とす、設備をBクラスのものになったってそう変わらない。だが、今は演劇祭の練習で全員手一杯だ、それに試召戦争の被害とでも言っつて、演劇祭の小道具を壊すことも可能だ・・・この時期を狙えばFクラスは落とせる+演劇祭の道具を壊す・・・だろうな」

「そう……ですか……」

「許せぬ……演劇祭の小道具を壊すじゃと……?……わたし  
が死守して見せるぞ……」

……秀吉の周りを紫のオーラが包んでいる  
今話しかけたら巻き添えを食らうに違いない……

君子危うしに近寄らず だね

「誰が君子だ」

「はっ!? 雄二! いつの間に!」

「さつきから居たぞ」

気づかなかった

「開戦時刻は13:00だ、さつさと昼飯食って準備しろ!」

「分かってる!!」

さあ! 今日のお昼どうしようかな……

屋上かな

よし! 屋上に決定!

「皆さん! 今日はお弁当作ってきたんです! オリジナルの味を出し  
て フフッ」

ゾクリ

背筋が凍るような瑞希の声・・・

まさかね・・・あれから特訓したんだ・・・まさか・・・ね・・・

くくく屋上くくく

「皆さんどんどん食べてくださいね!」

「あ・・・ああ・・・」

「う・・・うん」

「う・・・うむ」

「え・・・ええ」

ダメだ・・・瑞希の料理が振り出しに戻っている・・・  
ムツツリーニが犠牲になってくれたおかげで分かった事実・・・  
倒れる寸前に「・・・アキちゃんの写真を・・・!」って言う  
てたことは気にしない

「瑞希・・・なにいった?」

「えつと、塩酸、硫酸、・・・ぐらいですね!」

ぐらいですねって・・・それだけ入れれば十分だよ・・・

「瑞希、薬品は料理に入れるな」

「え!?!でも・・・」

「でもない・・・ムツツリーニは薬品の入った料理を食べて倒れたんだよ?」

「そっそんな・・・!?」

「薬品は入れるな、わかったな?」

「・・・はい・・・」

よし、こうすれば明日ぐらいにはちゃんとしたお弁当が作れるでしょう

いやあ、キャラが違ってきちゃったね・・・

「明久G」!」

「ナイスじゃ明久!」

「・・・(グツ」

「アキ、ナイス!」

それだけ褒められると・・・

「明久の癖に!」

「まったくじゃ!」

「・・・コクリ」

「まったくね」

前言撤回しよう

皆最後の一言はいらないと思う・・・

「うう・・・自信作だったんですけど・・・」

「薬品は使っちゃダメだよ」

「はい・・・今度から気をつけます・・・」

---

「野郎共！打倒Bクラス！設備を守り、演劇祭を成功させるぞ！！」

「「「「「「「「「「うおおおおお！！！！！！」」」」」」」」

「「「

なんだろう・・・異様なこの盛り上がりは・・・？

まあ、今回のテストで結構点は取れてるはずだから

僕も戦力に入るはずだよ

僕は一人の特攻隊として、蹴散らしていくと・・・アハハ・・・

世界史の力を使えば簡単に・・・

「時間だ！明久！」

「分かってるよ！！行ってくる！！」

「任せたぞ明久よ！」

「・・・・・・・・幸運を祈る」

「がんばってください」

「がんばんなかったら、女装の刑よ」

「バラすな島田!!」

「あ、ゴメン・・・」

「オーケー、全力でがんばってくる」

女装なんてやりたくない!!

僕には女装が趣味とでも言っているのか!?

ええい! Bクラスに八つ当たりしてやる!

ダダダダダダダ

「いたぞ! 吉井だ!」

「Fクラス吉井明久が、ここにいるBクラス全員に世界史勝負を申し込みます!」

「・・・・・・<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」

|      |      |    |      |     |
|------|------|----|------|-----|
| Fクラス | 吉井明久 |    | Bクラス | 10人 |
| 世界史  | 885  | VS | 1800 |     |

ちよっときついか?

「何あの点数!？」

「噂は本当だったか！」

「800点超えの吉井・・・」

どんな噂なんだ

「行くよ！交換！<sup>チェンジ</sup>」

今回は・・・おお・・・装備に似合わない瑞希並の武器が出てきた・・・

「ほっ！」

ズバツ！

簡単に横になぎ払ったら・・・  
ええ・・・

|      |      |      |        |
|------|------|------|--------|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 4人     |
| 世界史  | 685  | VS   | 740    |
|      |      |      | (6人戦死) |

あちゃあ・・・

「戦死者は補習!!!」

「「「「「いやだああああ!!!おにiiiiiiii!!!」  
!」」」」」

可哀相に・・・

懐かしいあの光景・・・

「よそ見している暇があるのか!？」

「おっと」

軽くよけようとしたら・・・

なんてハプニング

後ろにいたと思われるBクラスの松山君に衝突・・・

僕は数十点削れたけど・・・松山君は0点になっちゃった  
こんなことってあるんだ　ハハッ

### 第三十三話（後書き）

視力を抑える眼鏡やコンタクトなど存在はしません、この小説の設定です。

## 第三十四話

えっと、今のハプニングで残るは3人

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 3人  |
| 世界史  | 651  | VS   | 569 |

うーん、何とかいけるかな？  
って感じた・・・ね・・・え？

「増援だあああああ!!!!!!」

ええええええええええええええええ!!!!!!?????????  
増援って酷い・・・しかも他の教科の先生連れて来てるうううう  
うう!!!!!!

遠藤先生だから・・・英語か・・・  
うーん・・・自信は

ある

「BクラスはFクラス吉井明久に英語勝負を申し込みます!」

「「「「「「「「  
試<sup>サモン</sup>獣召喚!!!!!!」」」」」」」」

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 13人 |
|------|------|------|-----|



つとその前にこの人たちを蹴散らすのが僕のやくめッ！

イリュージョン  
「幻影！！」

つまり4体の分身が出てくる、動きは主獣とおなじだから、どれが本物か分からないと。

もう1つ、付け足すの忘れてたけど、副獣（4体）は他の召喚獣に当たったら

相手の点数が減るんだ！しかも副獣にあたったら攻撃は点数を削られない！

うーん、ほぼ最強みたいな感じになっちゃってるんだね・・・

「なつ、どれだ！？」

「これか！？違う！」

「ならっ！くっ」

引つかかってる・・・

今いるのは4体の召喚獣つまり全部分身ということ

「はあああっ！！」

ザシュッ！

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 8人   |
| 英語   | 753  | VS   | 1500 |

「後8人！」

ザッ！

「7！」

ザッ！

「6！」

ザクツ・・・

え・・・

|      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 6人  |
| 英語   | 553  | V S  | 800 |

「痛っ！」

くっ・・・一気に減らされた・・・！

何ではれた！？後ろに避難・・・え・・・

「何でFクラスの1人にやられてるの・・・？」

「「「「「すっ、すみません！！ただいまっ！」」「」「」」

敬語？・・・

いきなりどうしたんだろう・・・さっきの殺されるといい

神矢ナナコさんじゃあるまいし・・・

そういつて僕は振り返ってみた・・・

そこには

身長は僕と同じぐらい

髪は桐嶋さんと同じぐらいの長さで色は漆黒

おかしいところといえば・・・制服がセーラー服なことだけ

この人が神矢ナナコさんかな？・・・

「行くぞ！」

「はっ！」

「危なっ！このっ！」

ザシュ！

後4人

このくらいなら・・・

「もう1つの腕輪の効果！<sup>フラッシュ</sup> 電光！」

<sup>フラッシュ</sup>電光の効果は、一定時間召喚獣を動かすことができないこと！（麻痺状態）

点数は1分100点必要になる

「なんだ！？」

「特に変わったところは・・・あれ！？」

「召喚獣が動かせない・・・！？」

「じゃーねっ」

ザッ！！

|      |      |      |    |
|------|------|------|----|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 0人 |
| 英語   | 453  | VS   | 0  |

終わった・・・

「ちつ・・・使えないわね・・・根本といい・・・」

「すみませんが、Bクラスの人ですか？」

「ええ」

「では、Fクラス吉井明久が総合科目で勝負します」

「サモン試獣召喚」

|      |      |      |       |
|------|------|------|-------|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 神矢ナナコ |
| 総合科目 | 4992 | VS   | 2978  |

点数は普通の点数だけど何が・・・

「サブミッション関節技」

「え・・・！？」

何！？いきなり僕の召喚獣が関節技かけられて僕にもその痛みがああー！！

最近 美波にやられてないと思ったたらあああー！！！！

「くっ・・・はあっ！」

何とか抜け出せたけど・・・結構点数削らされたな・・・  
何でこの人があんなに怖がられていたのか分ければ・・・

「あなた・・・Fクラスの吉井明久君・・・」

「そうですけど？」

「タイプね」

「・・・・・・・・・・はい？」

何をいきなり言い出すんだこの人・・・

こんな美人な人に告白されたら嬉しくないはずが無いけど  
瑞希がいるからね

「付き合ってくれないかしら？」

「彼女いるのですみません、そしてこちらも・・・すみません」

ザクッ！

「あら、残念ね。（いつか彼氏にしてあげるわ）」

「何か？」

「いえ、何でもありませんの。私、神矢ナナコと申します。以後お見知りおきを」

「ありがとうございました」

なんだったんだろう・・・

しかもなんだか敬語になっちゃったし・・・

なんだったんだろう・・・  
↑二回目

まあいいた、このあたりにBクラスがないから雄二に報告

~~~~Fクラスにて~~~~

「たっだいまー!!」

「おう、お疲れ」

「お疲れ様じゃ」

「・・・・・・お疲れ」

「お疲れ様です」

「おつかれー!」

皆が出迎えてくれた

「あ、そうだ!ムツツリーニ」

「・・・・・・なんだ?」

「神矢ナナコって知ってる?」

「・・・・・・・・ああ」

「データ見せてもらえる？」

「・・・・・・・・これ・・・・」

なにになに？西洋学園から転入。

西洋学園では、姫ナナコといわれていた。なぜなら、神矢グループの跡取りのため

大事に育てられていて、自分の思うとおりに行かないときは無理やりという手段を使う。

見た目は、3トップに並ぶ売り上げ。

文月学園に来てからはお嬢様として振舞っている。

途中ムツツリ商会の売り上げが書かれていたけど気にしない

第三十四話（後書き）

なんと中途半端な・・・

区切りを見つけれずじまいでした・・・

人物紹介

かみや
神矢ナナコ

神矢グループという、知らないものはいないというぐらいの有名度が
高いグループ

西洋学園では、思うとおりに行かず神矢グループの力を使い
ひと一人をいじめで自殺に追い込んだことがあるという・・・

神矢グループということで誰も口出しができず、その事件は幕を閉
じた

また、タイプの男子を見つけると告白するが、彼女がいる場合
彼女をいじめ、彼氏から離れさせるという手段を選ぶ女子。

それでも売り上げは伸びている、主にMの人が多く買い占めている
清水美春も神矢ナナコを視野にしている（島田美波と同じ・・・）

ん？瑞希・・・が・・・いた

「・・・・・・・・土屋君、明久の女装写真残ってますか？」

「・・・・・・・・もちろん」

「・・・・・・・・一枚」

「・・・・・・・・毎度あり」

裏商売に瑞希が手を染めている・・・

しかもあの慣れた対応・・・瑞希・・・もしかして・・・
常連？

まさかね

「みーずき！」

「ひゃわっ！」

「どうしたの？」

「いついえ・・・なんでもないんです！」

「??？」

どうしたんだろう・・・

（理由は知っているが、それが本当だと認めたくないがために
僕はさっきのムツツリー二と瑞希の会話内容をゴミ箱へ入れた）

「なにつ!？」

「「^{サモン}試獣召喚!!」」

| | | | |
|------|------|------|------|
| Fクラス | 吉井明久 | Bクラス | 根本恭二 |
| 保健体育 | 552 | VS | 215 |

シュパッ!

「また負けた・・・」

「ムツツリー二じゃなくても、保健体育は強いんだよ」

「「「「「「「「Fクラスが勝った!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」

なんて終わり方だろう・・・結構早くけりが着いた
ん? 根本君の様子が・・・

「殺される・・・殺さ・・・コロ・・・コ・・・ココ・・・」

処理落ちしかけてるよ!!?」

殺されるって・・・あのときのBクラスの人も言ってたな・・・
まさか神谷さんのことじゃ・・・一応ムツツリー二のデータには・・・

「あら、根本さん 負けてしまいましたわね」

「ひっ!？」

「神矢・・・さん」

「ごきげんよう、吉井様」

「様だなんて・・・」

「いえ、運命の方ですもの（ニコッ）」

「ですから、僕には彼女が・・・」

「姫路瑞希」

「・・・え？」

「さん、ですよね」

「あ、・・・はい」

「そうそう、根本さん　今回は許して差し上げますわ　運命の方とめぐり合えたのですから・・・」

「あ、ありがとうございます!」

なぜ敬語!?

それだけ地位が高いんだろう・・・

ま、根本君だからね↑

「それでは、またお会いしましょう吉井様」

第三十五話（後書き）

終わった．．．あの明久の台詞書くのにすごく疲れました．．．

「そつ、そつでしゅ！」

「瑞希・・・」

「はうう・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

へえ、結構いい出来だね

雄二の言ったことも間違いではなかったか・・・

それにしても・・・恥ずかしい！

自分のことがとても恥ずかしい！！

「これなら本番でもいけるな」

「だね！」

ガララッ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！お前ら差し入れを・・・」

「鉄人が差し入れ！？」

「鉄人が・・・！」

「差し入れ・・・！？」

「じゃあ・・・」

どうやったら明久様を私のものにできるのかしら・・・

とりあえず、姫路瑞希が邪魔ね・・・

どうすれば・・・まあ、神矢グループの力を使えば造作も無いこと
ですわ

またお父様に頼んでみるかしら・・・

お父様ならOKしてもらえるわよね

フフフフフフフ

ゾクッ！

なっ、なんだ！？

今嫌な悪寒が・・・

いいや、忘れよう、忘れることに関しては自信があるからね！

「そんなことに自信をもってどうする」

「はうあ！？雄二！いつの間に！」

「さっきからいるっつの・・・」

キンコンカンコン

「ん？もう下校時間か」

「じゃ、瑞希！帰ろう！」

「はい！」

「じゃねー雄二！」

「おう」

「またの！」

「・・・・・・またあした」

「今日は疲れたね」

「ですね でも、楽しかったです」

「だね、試召戦争に劇の練習 授業なんてしてない（笑）」

「本当ですね（笑）」

「瑞希、きれいだったよ」

「！？あ、明久こそかつこよかった・・・・です・・・・／／／／」

「アハハ！」

「フフフ！」

瑞希といると楽しい

けど・・・・いつまでも頼るわけには行かない・・・

僕だけでできるよう・・・・！

「あ、私はこのあたりで」

「あ、うん また明日！」

「また明日！」

瑞希と別れ、自分の家へ向かう

確か今日は姉さんが帰ってくるのが遅かった気がするな・・・
晩御飯作っておかなくちゃ！

ガチャ！

「ただいまーって誰もいないけどねっ」と

トントントント

ジュウウウウ

カチャカチャ

「よし！いただきまーっす！」

モグモグ

ゴクン

「ご馳走様でしたと、残りは姉さんのだからラップをかけておい
て・・・」

よし、

「寝よう」

今日は疲れた・・・

走り回った拳句劇の練習だもんね・・・疲れ果てたよ・・・
おやすみ・・・

クウ・・・クウ・・・

ベッドに入った瞬間眠りに落ちた

第三十六話（後書き）

反省会

青「反省かい！」

全「イエーーーーーイ！」

明「って言うか、反省会って青龍だけでしょ」

青「ギクッ」

明「口で言った！今口でいったよ！？」

美「こらアキ、青龍を虐めない！」

青「私、虐められる側！？」

瑞「あはは……」

秀「うむ……」

ム「……コクン」

雄「フン」

青「雄二……覚えとれ……」

雄「何で俺だけ……？」

青「なんとなくじゃ」

雄「（バツ!）」

秀「うむ？わしではないぞい」

明「秀吉が青龍の声で、自分のしゃべり方をするへまなんてしないよ」

雄「だな」

青「こんな会話じゃ反省会でもなんでもないので」

瑞「これからも」

美「この駄文を」

翔「・・・・・・よろしく」

雄「翔子!？いつの間に!?!」

翔「雄二のいるところに私がいる・・・・」

雄「くっ!」

青「・・・・・・フツ」

雄「貴様か!青龍!」

青「では、また次回をお楽しみに」

雄「終わらせるなああああああ……!!!!!!!!!!」

第三十七話（前書き）

バカテスト 歴史

645年に蘇我入鹿の暗殺から始まったのを、何というでしょう？

吉井明久の答え

大化の改新

教師のコメント

そのとおりです。

木下秀吉の答え

鎌倉幕府の建設

教師のコメント

端折りすぎです。

ムッツ——土屋康太の答え

俺はムッツリじゃない

教師のコメント

そんなことはありません・・・

ではなく、そんなことを聞いているではありません。

第三十七話

ん・・・そうだ寝ちゃったんだ・・・

「んっ・・・ん？」

「おはようございます、アキくん」

「おはよう姉さん、そして何をしようとしているのかな？」

「何って・・・みて分かりませんかアキくん？」

見てって・・・

えっと、いつもの洋服の姉さん、そして右手にはメイド服、左手にはもてるだけの化粧品
要するに

「僕は男だよ？」

「大丈夫です、ちゃんと似合うはずですよ」

「だから僕は男だって！！！！」

「大丈夫——「じゃない！！」そんなに興奮しないでくださいアキくん」

これは興奮してられないわけがない！！！！

「それに姉さん！」謎解きは。イナーの後で”の見すぎだよ！？影

。のまねしてもしょうがないからね!？」

「何を言ってるんですか、。山は素敵じゃないですか」

「素敵だけど・・・さあ・・・」

もう何を言っても無駄な気がしてきた・・・
そろそろ学校行かないと・・・

「いつてきまーっす!」

「いつてらっしやいアキくん」

姉さんと攻防を続けた後、僕は学校に向かった
ん?今日は瑞希いないみたいだね

「あ、吉井くんですか?」

「そうですけど・・・?」

僕の前にいるのはいかにもという感じのサラリーマンさん

「瑞希の父ですが、今日は熱があるのでお休みとっていただければと・・・」

「休みなんですか?分かりました、そう伝えておきます」

「ありがとう、それでは」

「はい」

「そっか、瑞希はお休みか・・・
早く治るといいな・・・」

「あ、おはようございまーっす！」

「吉井か・・・」

「僕じゃいけないんですか!？」

鉄人め・・・

「いや、朝から吉井が来るとは思わなかったただけだ」

「そうですか・・・あつと、姫路瑞希さんが今日はお休みだそうです」

「何で知ってるんだ？」

「来る途中に瑞希のお父さんに合ったので、聞いたんです」

「そっか、お義父さんか」

あれ？違和感・・・

って・・・お義父さんって・・・／／／／／／／

「てっ、鉄人!!」

「西村先生といえ」

「はい、鉄人先生！」

「はあ・・・」

タッタッタッタ
ガラッ！

「おっはよー！」

「おう」

「おはようじゃ」

「・・・おはよう」

「おはよー！」

うんうん、いつもどおりだ

「ん？姫路はどうした」

「物じゃないんだから・・・風邪で休みだって」

「なるほどな・・・（神矢がかかわってなければいいが・・・）」

「なるほどのう（神矢の可能性があるのう）」

「・・・・・・・・なるほど（神矢なら・・・）」

「なるほどね（神矢って人が怪しいわね）」

「????」

何のことかな？

瑞希の風邪、早く治ってもらおう！

今日お見舞いに行こうかな？

~~~~雄二 SIDE~~~~

明久のやつ気づいてねえな・・・

神矢がお前に対する感情を・・・

そして、姫路が神矢にとってどれだけじゃな存在かを・・・

明久・・・お前が姫路を守るんだ・・・！

そのことなら、俺たちFクラスや他のクラスは

お前の味方をするぜ？

~~~~明久 SIDE~~~~

さて、今日は主役がないし、練習もままならないかな？

今日はどうするかな・・・

授業まともに受ける気はないし！↑

「明久、話がある（クイツ）」

「ん？」

雄二が手で示したほうに僕も向かう

「どうしたの？雄二」

「お前・・・神矢のお前に対する感情知ってるか？」

「僕に・・・対する感情？」

「ああ・・・」

「・・・恋愛感情・・・」

「分かってるじゃねえか・・・」

「でもっ！」

「神矢のデータ見ただろ？」

「う・・・うん」

まさか・・・ね

瑞希は関係ない・・・よね？

「神矢はお前を気に入っている・・・それにはお前の彼女である、
姫路瑞希という存在が邪魔になる・・・わかるかな？」

「うん・・・」

「姫路の欠席が関係するかどうか、決め付けるわけには行かないが可能性がないとはい切り切れない」

「・・・」

「そうなたとして・・・明久、お前が姫路を守るんだ！
そのためなら、俺たちFクラスは全校を巻き込んでサポートするぜ！」

「ありがとう、雄二」

「フツ・・・いいさ」

ガララッ！

「と、いうことじゃ！」

「・・・サポートする！」

「ウチだって！」

「俺たちだって！全力で援護するぜ！！」

「「「「「「「「「「うおおおおお！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」

「ありがとう！ありがとう！！！！」

皆本当にありがとう!!

今日、瑞希の家に行ってみよう・・・

その前に、神矢さんのところ行って・・・確認しようか・・・

ガララッ!

「「「「「「「「「「!!!!??.?」」「」「」「」「」

「明久様、お話がございましたので来てはいただけませんかしら?」

「・・・!うん」

「それでは」

タタタタタ

シーーーーーー

「噂をすればってーか・・・」

「タイミングよすぎだろ・・・」

「明久・・・」

「話って何かな?」

「私が昨日言った事ですわ」

「タイプって・・・？」

「ええ、そうです」

「あの件は断つて・・・！！」

そういつて僕に見せてきたのは一通の手紙・・・
その手紙には・・・

” 姫路瑞希様へ

あなたの愛する彼は、いま私のものとなりつつあります
取り返そうとする気持ちがあるのなら・・・

一緒に入っている写真をご覧くださいませ

何もかも欲する姫より”

と書いてあった・・・

おそらく書いたのは神矢さんだろう・・・

写真って・・・

これ？

なっ・・・！？

写真には・・・僕と神矢さんがキスしている写真だった・・・

こんな写真に見覚えはない、つまり合成だとおもっ・・・

写真ならムツツリ商会から買える・・・

「いかがです？」

「これ・・・書いたの神谷さんでしょ？」

「そうですね、姫路瑞希が邪魔な存在だったのですわ。ですから消

そうと思ひまして」

プチッ

僕の中の何かが切れた・・・

「てめえにとつて邪魔な存在だろうが、俺にとつては世界で一番と
いっていいほど大切な存在なんだぞ！？俺はてめえをゆるさねえ！」

「私は神矢グループの跡取り・・・私が一言虐められたといえは、
あなたや姫路瑞希はただじゃ置かないでしょう」

「・・・・・・・・え！うるせえ！！！！俺には関係ねえ！！！！」

「なっ！？」

「俺は殺されたっていいが、瑞希にだけは手を出すな・・・！」

「っ！？」

僕は泣いているのかな？

ほほに伝う一本の筋・・・

涙かな？ハハッ・・・

「ったく、俺の言つたこと聞いてたか？バカ久」

「っ！？雄二・・・」

「俺らはいつでもサポートするつてよ！」

「すっかり忘れてたよ・・・」

「ひでえな・・・ククッ」

「っ！覚えてらっしゃい！明久様、いつか私のものにして差し上げますわ・・・もっともそれはそう遠くない話ですわ・・・！」

そういつて神矢さんは校舎のほうに走り去っていった・・・

そう遠くない？

どういうことかな？

まったくわかんない・・・

「バカ久が・・・俺の言ったことぐらいよく聞いておけ」

「はいはい！」

「フッ」

「忘れるでないぞ、明久よ。あの者はどのような手段を選ぼうと不思議ではないからのう」

「分かってる・・・！」

「・・・裏からサポートする！」

雄二・・・秀吉・・・ありがとう・・・！

ムツリーニはぎりぎりアウトなコメントありがとう（苦笑）

問題は瑞希の容態・・・！

あれを見たところで瑞希に何かあるとは思えない・・・けど！
瑞希は優しい性格だ・・・僕は心配でしょうがない・・・！！

第三十七話（後書き）

明「これはどういうことだあああああああああ！！！！！！！！」

青「さあ？」

明「さあ？じゃないよ！！」

青「そんなに怒るな！」

明「怒るに決まってるじゃないか！瑞希に何があつたの！？今すぐ答えてえ！！！！」

青「本人に聞けば？」

明「聞けたら青龍にいわないよ！」

青「なに！？私切り札！？それとも最初から当てにされて無かった人！？」

明「間違いなく後者」

青「ひど！？」

瑞「次回で分かりますよ」

明「瑞希！？」

瑞「はい？」

青「さあ、次回が面白くなってきました！ククッ」

明「笑ってる！完璧に笑ってる！！」

青「次回もお楽しみに！」

「瑞希さんのクラスメートです。お見舞いに来ました」

「ありがとうございます、今開けますね」

ガチャ

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます。お邪魔します」

いつ見ても瑞希のお母さんは若いなあ・

タタタタタタ

コンコン

「どうぞ」

ガチャ

「失礼します。瑞希お見舞いに来たよ」

「明久・・・坂本君に木下君、土屋君に美波ちゃん」

「大丈夫？」

「顔色悪いな・・・」

「大丈夫かな？」

「よく言えますね、そんなこと・・・」

「え？」

「あの写真見たんです・・・私なんか・・・私なんか!!」

「!!!」

写真って・・・あの神矢さんが合成したと思われる写真のことかな？
あれは・・・!!!!

「あれは・・・!!」

「言い訳なんて聞きたくありません」

「言い訳じゃないよ!あれは神矢さんが出したもので、あの写真は合成だよ!」

「そんなのどうだっていえるじゃないですか!」

「言い訳じゃない!真実だよ!!」

「分かりかねますね・・・」

酷い・・・本当にそう思ってるのかな・・・
そんな瑞希なんて・・・!

「そう思ってたよ・・・瑞希がそうだと思ってるならそう思ってたよ!!」

「ええ、そう思ってます!明久が言い訳する人だなんて知りません

でした!!!」

「っ!!!」

バンッ!

そう言ったきり、僕は瑞希の部屋を飛び出して外に出た

「お邪魔しました!!」

「また来てね」

おそらく二度と来ることはないだろう・・・

~~~~雄二 SIDE~~~~

あれは・・・言い過ぎじゃないか・・・姫路・・・

「あれは言いすぎじゃぞ」

「・・・」

「そっだぞ姫路、アイツは・・・言い訳に聞こえるが真実だ」

「・・・」

「・・・神矢本人がそう言った」

「・・・」

「瑞希・・・本当よ？アキを疑うの？」

「・・・ですから・・・言い訳は聞きたくなかったんです・・・」

「言い訳じゃないぞい・・・」

姫路の思い込みか・・・

相手は神矢だ・・・スタイル抜群、成績優秀、神矢グループの跡取りきたら

誰だってそう思うのはわけないが

今のは明久に同情するぞ・・・

「姫路・・・本当にいいわけじゃない・・・」

「・・・でも！」

「でもないわよ！Fクラス全員神矢の発言聞いてたのよ！」

「・・・！」

「・・・明久は今の姫路の言葉で姫路に対して心を閉ざしたぞ・・・？」

「・・・！！！」

「謝っても聞きそうにないの・・・」

「だろうな・・・」

姫路、お前はバカだな・・・

・ 明久がどれだけ姫路のことを思っていたのか聞かせてやりてえよ・・・

『俺は殺されたっていいが、瑞希にだけは手を出すな・・・!』

「え・・・?」

「明久の台詞・・・」

「神矢としゃべっていたときにアキが言った言葉よ・・・」

「嘘ですよね・・・」

「秀吉でも真似できねえぞ」

「うむ」

「・・・!!!」

姫路・・・お前は本当にバカだ・・・  
そしてムツリーニはいつの間に録音したんだか・・・

「明久と合ったら謝っておけ・・・」

「はい・・・!」

~~~~瑞希 SIDE~~~~

私はなんて酷い言葉を言ってしまったんでしょうか・・・

言葉って言うのは凶器・・・

言った言葉は取り消せない・・・

簡単なようで難しい言葉・・・

取り返しのつかないことをしてしまったんですね

明日明久に合ったら謝っておかないと！

・・・聞いてくれるでしょうか・・・？

あれだけ怒っていたんですから・・・無理ですかね・・・

一日でダメなら毎日謝るしかありませんね！

明日が楽しみなようで怖いです・・・

~~~~~ 明久 SIDE ~~~~~

瑞希の・・・瑞希のバカ・・・

僕は・・・瑞希を裏切ることは決してしないのに・・・

絶対といっていいほど・・・

酷い・・・

僕はそんな人間に見えるのかな？

はあ・・・

ガチャ

「ただいま・・・」

「お帰りなさいアキくん」

「ご飯は今日いいや・・・」

「そうですか？分かりました」

「おやすみ・・・」

「おやすみなさい」

酷い・・・酷い・・・酷い・・・酷い・・・酷い・・・

瑞希だけは信じてたのに・・・

もう許せない・・・

もう知らない・・・

劇はクラスのために本気でやってあげよう・・・

明日学校行きたくないなあ・・・

### 第三十八話（後書き）

明「・・・・・・・・・・」

青「あの・・・明久・・・さん？」

明「なに・・・・・・・・？」

青「ご不調のようでしたら・・・その・・・お休みしていただいても構いませんが・・・」

明「大丈夫だよ・・・これぐらい・・・」

青「（大丈夫にはみえないよ・・・顔は青通り越して蒼白・・・もはや死人の顔といっても過言じゃないね・・・）」

雄「どうした死人？明久みたいな顔になってるぞ？」

青「酷え！！さりげなくも無いけど酷え！！」

明「どうしたもなにもないよ・・・」

雄「！！？明久が・・・突っ込まない・・・だと！？」

青「雄二、ある意味心に傷を負った」

明「・・・・・・・・・・はあ」

瑞「（私がここにいたらまずいんじゃないでしょうか・・・？）」

青「（瑞希がいる・・・今よんだらシリアスすぎるの書かなきゃならないのか・・・）」

青（秀）「それでは、明久と雄二がブルーなので、これで反省会を終了します！この小説をどうぞよろしくお願いします！」

青「恩にきるよ秀吉！！！」ボソッ

秀「わしたちにもとばつちりがくるので・・・」ボソッ

青「サーセン・・・」ボソッ

### 第三十九話

ん．．．今日はゆっくり寝れた．．．  
っ！？昨日の事思い出しちゃった．．．

「おはよう．．．．．」

「おはようございます、元気がないですね？」

「なんでもないよ．．．．．」

「そうですか？」

「いつてきます．．．．．」

はあ．．．．．

憂鬱だ．．．

かけなくたって意味は知ってるからね？

瑞希．．．

「おはようございます、明久」

「ん．．．．．」

話しかけられると．．．

イラつく．．．

昨日のことがあるから．．．

「あ、あのっ、明久！」

「・・・」

ガララッ！

「おはよ・・・」

「・・・おはよう」

「おはようございます・・・」

「・・・？」

はぁ・・・

ガララッ！

「チーッス」

「おはよう、須川君」

「おはようございます」

「・・・おはよう」

須川君か・・・

早いな??

いつもならもつと遅いはず

「吉井、ちょっと来い」

「へ？」

ガラッ

「あれはどういうことだ？」

「あれ？」

あれって？何のこと？？？

「姫路さんのことだよ！！」

「……………」

「昨日の事引きずってんのか……………」

「だって瑞希が……………」

「彼女のせいにするのかよ!？」

瑞希のせいにするつもり……………?

瑞希のせいも何も、すべては瑞希の思い込みのせいじゃないか!!!  
僕は言い訳じゃないことをいったのに……………

瑞希はそう思わなかった……………

「すべては瑞希の思い込みが……………」

「それでも!お前はその思い込みをどうにかしてもらおうとは思  
なかったのか!？」

「したよ！！僕だつてしたよ！！なのに・・・瑞希は聞く耳持たず・・・」

「男ならいくらでも・・・」

「しようとしたよ！！なのに瑞希は聞こうとしないで無視をする・・・僕はそこでもう諦めという手段を選んだよ・・・」

「っ・・・」

「須川君に分かる！！？？聞いてもらえない！聞いても言い訳と思われるだけ！！」

「・・・ないが」

「ないなら！！僕は・・・僕は・・・」

「吉井！？」

あれ・・・

涙？泣くつもりなんか・・・

「吉井、俺は見たぞ・・・姫路さんがお前に話しかけようとしている姿を・・・」

「どうせ僕にいやみを言うためでしょ・・・」

「お前のほうが思い込みが激しいんだよ！」

「っ・・・今井君に横溝君・・・」

何で二人が・・・

「姫路さんはお前とよりを戻したいから話しかけたんだよ!!!」

「坂本から聞いたんだろっ、あいつならやりそうだ」

「・・・!」

「謝って来い、そしてもう姫路さんを悲しませんな」

「次やったら、俺が姫路さんの彼氏になってやる」

「お前にはあわねえ、俺だろ?」

「フッ、俺に決まってるんだろ?」

「異端者には・・・」

「死の鉄槌を」

「っ「なっ!」」

「判決は」

「死刑」

「っ「しまったあああああ!!!!!!」」

「ありがとう・・・」

瑞希のところに!!

ガラッ!

「瑞っ・・・希?」

「・・・・・・・・姫路なら神矢に呼び出しされて体育館裏」

「ありがとう!!」

ダダダダダダ

「明久どうしたんだ?」

「あんなに慌ててのう」

「・・・・・・・・神矢に呼び出しされた姫を助けに」ニヤッ

「なるほど、俺たちも行こうぜ」

「うむ!」

「・・・・・・・・コクン」

~~~~瑞希 SIDE~~~~

明久はどうしたんでしょ？

須川君に呼び出しなんて???

ガラツ

須川君と明久が出て行った直後に神矢さんが教室に入ってきました

「失礼、姫路瑞希さんはいらっしゃいますか？」

「私ですか？」

「少々お話が……」

「分かりました」

お話とはなんでしょっか??

[illegible]

「ここあたりで・・・」

「何でしょう？」

「私が明久様のことを好きなのはご存知かしら？」

「はい」

「明久様の誤解は解けたようですが……私の一言であなたたちの関係は崩れますわね」

なにを・・・！？

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「っ！！！？？」

「本当ですわよ？」

「そんな！？」

ガサッ！！

っ！？誰か居るんですか・・・??
今の会話を聞かれたら・・・

「フフツ、私はここで失礼させていただきますわ」

「はい・・・」

明久・・・・・・・・そんな・・・

私は・・・私は明久を信じていたのに・・・！！

明久の私に向ける笑顔は嘘だったんですか？

明久・・・

もう許しません・・・

少しでも許そうと思った私がバカだったようですね・・・
許しません！！！！

第三十九話（後書き）

今度は明久と瑞希の感情が逆転！！？？
次回は、会話の内容と”ガサッ！！”という音の正体は！！？

第四十話

今の会話・・・瑞希と神矢さん・・・
やっぱり昨日の事・・・

「・・・・・・・・・・」

「!!!!!!??」

「・・・・」

「・・・・・・・・」

うー・・・上手く聞こえない
ちょっと近づけば・・・

ガサッ!!

やばい!!

「・・・・・・・・!」

あ、神矢さんが行っちゃった・・・
瑞希に話しかけないと!

「瑞希!」

「明久・・・今までの笑顔は嘘だったんですね」

「え？」

「私に嘘をついてまで、神矢さんと居たかったんですか!？」

「何の話をしてるの瑞希!？」

「もう・・・いいです!！」

あ・・・瑞希を追いかけようとする足も止まってしまった
追いかけようとする心と裏腹に追いかけるなといったそんな身体カラダ・・・

「そんな・・・」

神矢さんは瑞希に何を言ったんだろう・・・
ムツリー二に聞けば・・・ってそんな上手くもないか・・・
どうしようかな？

僕は、何のためにここまで来たのかな？

「はあ・・・」

「・・・」

「・・・」

あの木の陰に隠れてるのは、雄二と秀吉と美波
木の上にいるのがムツリー二

植木の陰に異端審問会

校舎の影には・・・霧島さんと優子さんと・・・工藤さんに
久保君？

みんな本当に出てきたよ・・・
こんなにいっぱい集まると・・・

「明つ・・・」

「いいんだ」

「明久・・・」

「いいんだよ・・・瑞希がよければ・・・」

「・・・諦めきれるか？」

「もう・・・いいさ」

「アキは諦めれるの？」

「だから・・・」

くどいよ・・・
だからといって・・・

「いいのか？吉井」

「だから、後悔は・・・」

「後悔は？」

「して・・・」

「して？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・吉井がそれでいいと思うなら」

「・・・・・・・・思わない・・・」

思わない

思いたくない

でも・・・

思っちゃいけない・・・

「吉井君はそれで、一生後悔はしないのね？」

「・・・・・・・・」

「吉井君は、一生の友達を失くしていいの？」

「っ！」

「吉井君・・・・・・・・」

「・・・・・・・・！」

「吉井、俺が言つのもなんだがムツツリーニの録音したものを聞いてみる」

「録・・・・・・・・音？」

嘘・・・

そこまで準備いいんだね・・・ムツッリーニ

『ここあたりで・・・』

『なんでしょう？』

『私が明久様のことが好きなのはご存知かしら？』

『はい』

『明久様の誤解は解けたようですが・・・私の一言であなたたちの関係は崩れますわね』

それは・・・明久様のあなたに対する感情はすべて嘘ということ
ですわ』

『っ！！！！？？』

『本当ですわよ？』

『そんな！？』

え？嘘・・・

僕はそんな・・・

そんなことはしていない・・・

「酷えな」

「酷いのう……」

「瑞希は思い込むタイプだからね」

「姫路さん……可哀相に！俺の胸で泣かせてあげっ……！」

「異端者には……」

そこまでにしようよ……

「……皆で誤解を解きに行けばいい」

「そんな簡単にいくかしら？」

「姉上はいるだけで手伝わない気っ……違っ！その関節はそっちには曲がらなっ……！」

あーあ……

優子さん……

「そうだねえ、とりあえず皆で行ったんじゃ誤解は解けないから、吉井君一人で行くしかないね！」

「……誤解……か」

「がんばれよ、吉井」

「言われなくなっただけだね」

「明久」

「なに？雄二」

「演劇祭までにはどうにかしろよ？」

「努力する」

今から瑞希を呼び出して

謝るしか・・・

神矢さんめ！

許さない！

「瑞希・・・ちょっと屋上に来てくれる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

怖い・・・

瑞希の声の大きさがいつもの10分の1になっている・・・

キイツ

「・・・・・・・・用は何ですか？」

「今朝のことだけど！神矢さんが言ったことは全部嘘なんだ！！」

「信じられませんか」

「っ！僕は今まで瑞希に嘘の笑顔、嘘の感情を出したことはないよ！！！！」

「私じゃ分かりません」

「……！！」

瑞希……完全に心を閉ざしてる……

「神矢さんの言ったことは全部嘘なんだって！」

「嘘です！！」

ビクッ！

瑞希のこんな大きな声初めて聞いたかも……

「明久は嘘をついてます！！」

「嘘じゃない！」

「分かりかねます」

そっいつて瑞希は屋上から出て行ってしまった
天気が荒れ始め、雨が降ってきた

「はぁ……」

ザアアアアアアアアアアアアアアア

「明久……」

「余計怒らせちゃったみたい」

「明久・・・」

「あーあ、やっちゃった」

「明久、風邪を引くぞ」

「もう少し・・・このままでいさせてよ・・・」

この雨がすべてを洗い流してくれるように・・・
しばらくはこのままで、頭と身体を冷ませる

~~~~秀吉 SIDE~~~~

「明久は、ああいうがのう」

「とりあえず俺らは・・・」

「・・・神矢をぶっ潰す」

「違うわよ」

「??」

「神矢をぶっ潰すのはアキの役目」

「わしらは、姫路の誤解を少しぐらい解いておくかのう」

「そうだな」

明久はわしにとって大切な友達じゃ！

ガララッ！

「姫路！」

「なんですか？坂本君たち」

「明久のことだが・・・」

「・・・」

「明久は本当に神矢とは何もない」

「・・・」

聞く耳もたないのう

どうすればいいのじやろう・・・

「明久は・・・姫路のことしか眼中にないぐらいだ」

「そんな・・・」

「何かとあれは、瑞希は、瑞希は、だ、聞いてるこっちがため息つきたくなるぐらいだ」

「…………！」

「神矢の話するとしたら……あいつが、あいつのせいで」

「……………！！！」

「許してやってはどうじゃ？ 明久は今屋上で雨に打たれておる……」

「それじゃ、風邪を！」

「頭と身体を冷ますためだと」

「……………！！！」

「よほどショックだったんじゃないろう」

「言って来い」

シュッ

そういつて雄二が投げたのは折りたたみの傘じゃ

姫路は慌てつつそのかさを受けとって屋上へ走り出したのじゃ  
わしらは、その後を追うとするかのう

#### 第四十話（後書き）

これでやっと誤解が解けるのでしょうか！？  
明久は・・・瑞希は・・・？？？

## 第四十一話

「はぁ・・・」

これからどうしようかな  
演劇祭もままならないし

バンツ！！

ん？雄二か誰かが思いつきりけり破ったみたいな・・・  
あれ？雨が・・・

「風邪・・・ひきますよ？」

「瑞希・・・僕のことはいいいんじゃなかったの？」

「フフツ、坂本君たちに怒られちゃいました」

「雄二たちに？」

「今まで・・・」

「ゴメン・・・瑞希」

そついうと、瑞希は一瞬きょんととして  
それから怒ったように僕を見て・・・

「私の台詞を取らないでください！」

「あ、ゴメン（笑）」

「笑わないでください!!」

「アハハハ」

「フフフフ、明久、ごめんなさい」

「僕こそ・・・ね？」

「アハハハハハハハ」

これでやっと、瑞希との誤解も解けた  
さて・・・と

「出てきたら？野次馬さんたちー！（笑）」

「ええ!？」

「クツクツク」

「ばれてたようね」

「そうじゃな」

「・・・いいもの撮らせてくれた」

「ちょ!」

ムツリーニめ



”はい”

”あの二人を引き剥がすの手伝ってもらえないかしら？”

”あの一二人？”

”  
明久様と姫路瑞希よ！  
”

”あ、はい……ですが……”

”  
なによ！  
”

”残念ながら……Bクラスは全員 明瑞派なんです”

”はあああああ！！！！？？？？”

「なによ、明瑞派って!？」

そこは明ナナでしょ！？  
↑

”  
ということ、この件はお引取り願います  
”

”言われなくてもそうするわ”

プ  
ッ  
ッ

キ  
イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ  
! ! ! ! ! ! ! ! ! !

なによなによなおおお！！！！！

こうなつたら・・・  
 $A \times B \times C \times D \times E \times F \times$

あとは、C、D、Eクラスに賭けるしかないわね……

” はい ”

” Bクラス、神矢ナナコだけど協力してはもらえないかしら？ ”

” すみません、Cクラスは全面的に応援するつもりなので ”

プツッ

早いわね・・・！！！！  
CがダメならDよ！

” はい ”

” 神矢ナナコよ 協r ”

” お断りさせていただきます ”

Cクラスより早いわ・・・！！！！  
ええい！Eクラスに賭けるしかないわね！

” 神矢ナナコだけd ”

” 断る！ ”

早すぎるわ・・・  
どのクラスより早いわ・・・  
というより、明久様と姫路瑞希に敵はいないの！？

~~~~ムツツリーニ SIDE~~~~

フツ、面白い情報が入ったな

これを明久に伝えたら血相変えて神矢に飛びつくだろうな
姫路も行くか？

それにしてもこれは明久に聞かせるべきだな

~~~~明久 SIDE~~~~

ん？ムツツリーニが僕の肩をたたいてる・・・？

「どうしたのムツツリーニ」

「・・・これ・・・」

「??」

” はい ”

” あの二人を引き剥がすの手伝ってもらえないかしら？ ”

” あの二人？ ”

” 明久様と姫路瑞希よ！ ”

” あ、はい・・・ですが・・・ ”

” なによ！ ”

” 残念ながら・・・Bクラスは全員 明瑞派なんです ”

” はあああああ！！！！？？？ ”

” という事で、この件はお引取り願います ”

” 言われなくてもそうするわ ”

” はい ”

” Bクラス、神矢ナナコだけ協力してはもらえないかしら？ ”

” すみません、Cクラスは全面的に応援するつもりなので ”

” はい ”

” 神矢ナナコよ 協r ”

” お断りさせていただきます ”

” 神矢ナナコだけd ”

” 断る！ ”

なっ！？

というか、ここまできちゃったら可哀相になってくるよ・・・

それより、決定的証拠

瑞希も聞いて・・・

わぁ、瑞希が固まってる

怒りで固まっちゃった??

「許せませんね」

「怒りの対象神矢ナナコに設定!？」

「明久、行きましょう」

「はい!？」

「神矢のところへ」

「呼び捨て初めて聞いたかも!？」

女子の場合「ちゃん」や「さん」をつけてたのに  
神矢 になってるう!？

タタタタタタタタ

早い!？

走るスピード威容に早い!？

瑞希、どうしちゃったのさああ!!!!???

~~~~瑞希 SIDE~~~~

神矢さんのあの録音のものを聞いたら

とても言い切れないような怒りが私の中に渦巻いてます・・・
そしてなぜか・・・

「許せませんね」

「怒りの対象神矢ナナコに設定!？」

ええ

「明久、行きましょう」

「はい!？」

「神矢のところへ」

「呼び捨て初めて聞いたかも!？」

怒ってるんですから、当然です!!!!!!

第四十一話（後書き）

設定変えるの多過ぎですみません・・・

一人ひとり言うのが大変なんです・・・;;

そして瑞希の怒りが爆発寸前!?

逆に神矢はどうなってしまうんでしょうか!?

第四十二話（前書き）

今回はなんとスペシャルゲスト？がいらっしやってます！
お楽しみに！

第四十二話

さあ、神谷さんのところに行つて・・・

ヒュウウウウウウウウ

え？

「「うわああああああ／きやあああああああ」

「ぎゃふっ!？」

「いやあ、まいった・・・」

「ここはどこかな?？」

だれ?この人たち・・・

つていうか、一人は僕の召喚獣そつくり・・・つていうか召喚獣じゃないか!？

「ん?あ、^{マスター}主人じゃねえか」

「はい!？」

「よつちやんだねえ」

「はい!!!??？」

何!?^{マスター}主人?よつちゃん!？

なんなのさ！！！！？

「あの・・・」

「姫路さん！？」

「え？あ、はい、姫路ですけど・・・？」

うんうん、瑞希の怒りが収まった

「うん？ここは違う『世界』みたいだね」

「違う『世界』か？」

「えっと、お話中悪いけど・・・君たちは？」

やっぱり、皆気になってたらしく
うんうんと頷いている

「俺は、明希^{あき}だ」

「私は、境内院^{けいだいいん} 美娘^{みこ}だよ名前のとおり巫女をやってるよ。よろしくね」

「あ、僕は「吉井明久」！？そうだけど・・・」

「私は「姫路瑞希」ハイ・・・」

「何で知ってるんだ？明久たちの名前を」

「俺たちは別の『世界』からきたみたいだし、もとの『世界』もこんな感じだったしな」

「ふーん・・・」

違う『世界』かあ・・・
どんな『世界』なのかな？

「ここはどんな『世界』なんだ？」

「さあ？自分じゃ分からないよ」

「だよな、主人」
マスター

「えっと、明希くん 主人って？」
マスター

あれ？固まっちゃった
何か悪いこと言ったかな？

「明希くんって・・・呼び捨てにしてくれ・・・気持ち悪い」

「あ、うん 分かった」

「私たちの『世界』は・・・わかんないね」

そんなあつさり・・・
ま、僕もそうだったからなあ
忘れるところだった！
神矢をぶっ潰しに・・・

「皆！忘れてたけど！神矢さんのところに！」

あ

「神矢？誰だ？」

「えっとね、カクカク、シカジカというわけなんだ」

「よし、殺そう」

「早あ！？決めるの早あ！！！」

瑞希よりも頭の回転いいかも・・・？

「まってよ、明希くん。ぶっ潰すのはこっちのよっちゃんでしょ」

「そうだな、えっと、明久にいいところを譲ってやるさ」

「ぎこちない・・・向こうの『世界』では主人^{マスター}って僕のこと？を呼んでたの？」

「ああ」

「別に明希の呼びやすいように呼んでいいよ！境内院さんもそうしてるし・・・」

「わかつたぜ！主人！」

ህዝብ

「あら、もうすべてバレてしまいましたのね？」

バレバレだよ・・・

「この学校全員、僕の・・・いや僕たちの味方なんだ」

「そうでしたの・・・」

「僕たちは・・・神矢さん貴方を許さない！！」

「っ！！」

相当びつくりしてるね

だけどこれ以上の・・・

「よくも、僕たちの人生の邪魔をしてくれたね・・・」

「人生？私が？何をおっしゃっているんですか？明久様」

「誤解で一生の友達を無くすかもしれないんだよ！友達・・・
いや・・・彼女を！！」

「っ！？」

「ありがとう、神矢さん・・・おかげで怒りがたまりにたまってる
僕たちが思いつきり言うことができるよ（ニッコリ）」

「・・・・・・（サアアアアア）」↑青面

そういうと、皆が屋上の扉から出てきた

僕の近くに来ると、皆は神矢さんの前に並んでこういった

雄「ゲス」

美「我俣」

ム「・・・・・・最低」

秀「傲慢」

瑞「人間として、失格ですね」

瑞希の言葉が神矢さんにとって大ダメージ！！！！
シヨックのあまりうつむいて声を出せていないよ

翔「・・・・・・」

優「欲張り」

愛「サイテー」

久「言葉がもつたいないね」

おーっと！

Aクラス組が一番の大ダメージかも！
霧島さんと久保君が一番酷かったかな・・・

根「クズ」

君がいうかあああああ！！！！？？？？

ん？明希が僕ほうむいて……

「マスター、俺らもいいか？」

「い い っ」

「じゃあ、ちよつと屋上から出ててくれるか？」

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$

そういうと僕は明希に言われたように屋上から出て、扉に耳をくつつけて何を言うのか気になっていたしばらくすると・・・

「いやあああああ……！……やめてえええええええ×！！！」

ええ
ええ
・
・
・

明希に境内院さんは何を言ったんだろう……

キイイ！

「あ、明希……境内院さん……何いったの？」

「マスター 主人／よっちゃん達の想像に任せる！」

奥をそつと見ると

神矢さんが泣き崩れ、屋上の床に体育座りをしている
うん、可哀相に思える・・・

ま、要するに

「まろみあまぢ」

ということだね！

第四十二話（後書き）

いやあ、すっきりしました！！

神矢、ざまあみろ

本当に・・・フフフフ

今回は、唐笠さんの作品「バカとテストと矢われゆく記憶」ロストメモリー

の登場人物さんに登場してもらいました。

唐笠さんの要望から、明希と境内院さんに来ていただきました。
次回も登場していただきますので、よろしく願います！

第四十三話

あー！すつきりしたよ！

「すつきりしたな……」

「よっちゃん達を虐める人はゆるさないからね。」

「姫路さんを虐めたやつは地獄送りだ、覚えてろ」

誰に言ってるんだろーねー

おっと、流石に3日間ぐらい練習してなかったらきついよね
練習しなきゃ

「おい、おまえら練習するぞ！」

「おおお!!」

「練習？なんかあるのか？」

「うん、演劇祭っていつて、僕達Fクラスはシンデレラをやるんだよ」

「もちろんシンデレラは姫路さんだよな」

「うん」

「で、俺が王子役だよな」

「違うから!？」

さらっと入ろうとした!？
今日来てやろうと思ったの!？

「見てもいい？」

「いいよ！」

「見ててやるよ」

「何様だよ明希」

「俺様だ」

言うと思った・・・
衣装に着替えてこいつてムツツリー・・・
鼻血だしながらって・・・

「ああ、わたしも舞踏会に行きたいわ。王子さまに、お会いしたいわ」

「泣くのはおよし、シンデレラ」

「・・・？ だれ？」

「シンデレラ、お前はいつも仕事をがんばる、とても良い子ですね。そのごほうびに、わたしが舞踏会へ行かせてあげましょう」

「本当に？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぼくは、このガラスのクツの持ち主の娘と結婚します」

「さあ娘たち。このクツが足に入れば、あなたたちは王子さまのお嫁さんよ」

「はい。お母さま」

「残念ながら、この家には昨日の娘はいないようだな」

「わたしもはいてみて、いいでしょうか？」

「何をバカな事を言っているの」

「そうよ、あたしたちにも入らないのに、あんななんか、
あっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「「パチパチパチパチ」」

「上手じゃないか」

「上手！すごいね」

「「ありがとうございます!!」」

うー、緊張したあ

最近はナレーター入れてないからなあ
やりづらい・・・

「いやあ、さすが姫路さんだったな!」

「ありがとうございます／＼／」

「よっちゃんも最高だったよ」

「ありがとう!」

恥ずかしい／／／

本番はもつと緊張するよね・・・

ガラッ!

「「「「「「干物!」」」」」」」

「失礼さね!!」

ババアがなぜここに・・・

「なんだ、ここも変わらないババアか」

「はあ、あんたらの帰り道を見つけたんだよ」

「!?!ちよつと待ってください!どうして明希と美娘の事知ってる

んですか!？」

「アタシは学園長だよ、それぐらい知ってるさね」

「だったら神矢どうにかしとけよ!!!!
ババアめ・・・」

「神矢だったら退学にしたさね」

「退学?生ぬるいな俺だったら会社をぶっ潰しにいつてる」

「ちよつと明希!？」

「まあ、それはいいさね」

「それはいいって・・・
なんか酷いぞそれは・・・」

「ここさね」

「システム室？」

「何でこんなところに・・・」

「あんたならいけるだろう?」

「「まあな／まーね」」

「行けるの!!!!???」

「ってことで、短い間だったが世話になったな」

「演劇祭がんばってね」

「姫路さん！がんばってね！」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとう、明希、美娘」

「じゃあな！／じゃね」

「またいつか！／また会えるといいですね！」

「……ありがとう」

ん？ムツツリーニまさか……

あの二人に写真売ったんじゃない……
まさかね！

「……ニッ」

「ムツツリーニまさか……あの二人に写真売ったとか……？」

「……よく分かったな」

当たりかよ！！！！

ムツツリーニ……あつたら数秒で客かい！？

いっちゃったな……

何か寂しくなるな……

少しの間だったけど、結構楽しかったよ！

「あの二人、結構個性的だったな」

「雄二が言ってもそんな感じしないよ」

「お前もな」

「お主らじゃ」

「「秀吉もそうだろう!?!」」

「なっ、なんじゃと!?!」

秀吉がびっくりすることにびっくりだよ!?

「・・・・・・はあ」

「「ムツツリーニが一番個性的だぞ!?!」」

「・・・・・・!?!?なん・・・だと!?!」

「ムツツリーニ・・・吉井たちに言われてるようじゃしょうがない
ぜ」

「異端審問界もずいぶん個性的だと僕は思っただけだな・・・」

「・・・・・・」

言い返す言葉もないの!?!?

第四十三話（後書き）

明希と美娘がもとの『世界』に帰ってしまいました・・・
これ以上明希と美娘に登場してもらうと私が二人のキャラを壊して
しまいそうで怖かったです・・・！！

明「チキン」

青「意味も分からず使っでない」

雄「だな」

秀「じゃな」

ム「・・・・・・・・コクリ」

明「酷い！！」

青「酷いも何もないよ・・・」

秀「唐笠さん、どうもありがとうございましたのじゃ！」

青「これからも」

明「どうぞ！」

雄&ム「よろしくお願いします！」

第四十四話 日付は気にしないでやってください・・・（前書き）

今日は10月の18日ということですのでよろしくお願いします！
すつかり、大切なネタを忘れるところでした・・・

（忘れてたくせに・・・）↑

くバカテストく英語く

問題 You don't have any notebook
s .

この英文を日本語に直しなさい

姫路瑞希の答え

貴方は一冊もノートを持っていません

教師のコメント

そうですね、「一冊も」というところは
必要となります

吉井明久の答え

貴方は・・・・・・・・ノート

教師のコメント

間をしつかり説かなければ
酷いいじめとなりますよ

土屋康太の答え

あなたは 持っていない・・・ノート

教師のコメント

文は文で答えましょう

木下秀吉の答え

あなたたちは一冊もノートを持っていません

小さく (We · r e t h e W r o n g ·)

教師からのコメント

正解ですが小さく私達は間違っていると書かないで下さい
合っている自信がないので、ご了承ください

第四十四話 日付は気にしないでやってください・・・

「本番はあさつてだ！風邪を引かないように気をつけろ！
お前なら大丈夫だと思うがな」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「そのままの意味だ」

酷い・・・あつさり言い返したよ雄二・・・

「・・・・・・・・雄二帰ろ？」

「翔子・・・俺はまだ仕事が残って」

「・・・・・・・・吉井、仕事って？」

「霧島さんとデートするために行くスポットを検索中」

「明久てめえ！！」

「・・・・・・・・雄二、本当？」

「・・・・・・・・／／」

ふざけていったのにビーンゴ！
まさか当たるとは思わなかった

「瑞希！雄二たちの邪魔しちゃ悪いから帰ろう！」

「はい！」

久しぶりだよね

こんな風にかえるの・・・

「久しぶりですね、こうやってかえるの・・・」

「！？」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっと同じことを考えててね」

「ふふっ」

「あははっ」

今日は、そんなやることもないし
家に帰ったら劇の練習でもするかな

「私はここで」

「じゃあね、瑞希！」

「はい」

瑞希と別れ自分の家に向かって歩く
途中で葉月ちゃんと会った

「あれ？葉月ちゃん？」

「バカのお兄ちゃんです！」

「ぐふう！！」

さ、流石だよ・・

的確に僕のみぞおちを強打した拳句

さらにぐりぐりと押し付けてくる・・

流石は美波の妹・・

「どうしたのかな？」

「あのですね！お姉ちゃんと、綺麗なお姉ちゃんと、おっきなお兄ちゃんと、可愛いお兄ちゃん（？）と、ちっちゃなお兄ちゃんと、おっきな綺麗なお姉ちゃんが、バカのお兄ちゃんを足止めしてくれって言っていました！」

うんうん、字だけじゃ分かりづらいね・・

えっと、美波と瑞希と雄二と・・秀吉？とムツツリー二かな？と姉さん??

かなが僕を足止めしてくれと？

「どのくらいって言ってた？」

「えつとですね、パーン！って音がするまでです！」

といってる間にも

パーン！

と音が鳴り響いた

「あ、時間です！バカのお兄ちゃん！行きます！」

「まっつてよ葉月ちゃん！」

ガチャ！

「こつちです！」

ガチャ・・・

パンパパンパン！

「ふえ？」

「「「「「「「「「「誕生日おめでとう！」「」「」「」「」「」

「ええ！？あ、そういえば・・・」

忘れてた・・・

すっかり・・・

そっか、これで僕は１７歳ってわけか

「忘れてたんですか？」

「すっかりね」

「見た目は17歳中身は小学一年生」

「む、僕より成績の悪い雄二に言われたくないよ!」

「ぐ・・・テストでは負けてても常識では俺のほつがあるからな」

というどうでもいいことをしていると
秀吉たちからプレゼントをもらった

「プレゼントじゃ」

「・・・」

「ありがとう、あけてもいい?」

「うむ」

「ほれ、俺からも」

「雄二も?!」

「じゃあ「いる」早いな・・・」

「私からも」

「ウチからも」

「葉月からもです!」

「姉さんからは熱いチュウを・・・」

「いりません！」

「しょうがないですね・・・じゃあこれを・・・」

「ありがとう」

えっと、秀吉からは・・・

文房具セット！

秀吉らしいね！

ムツツリーニからは・・・

おおお！！！！

ムツツリ商会人気NO.5の人たちの写真じゃないか！

流石ムツツリーニ・・・

次は雄二・・・

チケット？映画の・・・

霧島さんと行きたくないからって・・・

ま、そこが雄二なんだけど（笑）

次に瑞希

あ・・・リストバンド・・・

瑞希の手作りみたい・・・

すごい、流石瑞希

美波だね

おお、クッキーだつて！？

流石美波・・・すごくおいしそう

葉月ちゃんからは・・・

あ、これって・・・

前にあげたぬいぐるみの小さいバージョンかな？
かわいい

姉さんは・・・

姉さんのブロマイド・・・ムッツリーニ売ろう

あれ？もう1つ・・・

婚姻届・・・？

なぜに！？

「瑞希さん、うちの愚弟をよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそお世話になります」

「ちょっとおおおおおおお！！？」

「いきなり婚姻届って、雄二みたいじゃないか！」

ポン

雄二に方をたたかれて振り向くと

「welcome」

爽やかな笑顔でそういわれた
デジャヴ・・・っていうか

僕と同じことを返された・・・

「皆、ありがとう！」

第四十四話 日付は気にしないでやってください・・・（後書き）

明「大体一ヶ月ぐらい過ぎてるんですが？」

青「違うもん・・・21日だもん・・・」

明「あのね・・・」

青「あんまり文句言うと雄二か久保とのB。小説書いてやるぞ！」

明「申し訳ございませんでした、書いていただきありがとうございます」

青「よし」

雄「やめろ・・・俺まで被害が来るじゃないか」

久「・・・チッ」

青「舌打ちはやめろ、学年次席が何やってるんだよ」

久「・・・」

秀「ということで、これからもよろしくお願いします」

ム「・・・遅れた小説どうもすみませんでした（日付）」

第四十五話

誕生会的なものが終わった・・・

そういえば演劇祭まであと……

アレ？

明日！？

「明日あ！！！！！！？？？」

「どうした明久、バカみたいな発言し……すまんバク」

「もういいよ雄二、そのノリ突っ込むの疲れた」

┐
!
?
•
•
•
└

軽くへこんでる

だって……ねえ？

「それはそうと、演劇祭のできますか？皆さん」

「今回は結構いいですよ」

「明久と姫路がノリノリでしてねえ（ニヤニヤ）」

「「そつ、そんなことないよ！／ですよ！」」

「「「「「「「「「「」

「そこまでそろわなくても・・・」

「「「「「「「「「「」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12

う”””

くっそお！こうなったら雄二の・・・
あれ？雄二の役って何だっけ？

「そういえば雄二の役って何だっけ？」

「小道具制作」

「チツ」

「思いつきり舌打ちしたろ？」

「え？なんのこと？」

「フン」

鼻で笑われた・・・

ま、イケドネ

小道具があ、これじゃあ霧島さんにいいところ見せてあげられない
じゃないか！

「ムツツリーニ」

「・・・なんだ？」

「小道具製作中の雄二ってどっ？」

「・・・楽しんでいる」

「それとって、僕に出来ないかな？」

「……………ついにそっちの気が……………」

「違うからね!!!!!!!!!!!!!!!!????????」

「「「「うるさいぞ／わよ／ですよ 明久／アキ」」」」

「（シヨボーン……………」

皆でうるさいって言われた……………」

酷い……………酷いよ！

「ま、明日、朝練やるから早く来いよ それじゃ俺らはここで帰る
とするか」

「そうじゃな」

「……………コクリ」

「そうね、葉月も眠そうだし」

「そうですね それではお邪魔しました」

「アキくん」

「??」

「行ってきなさい」

「命令形・・・でも行ってくるよ」

瑞希を送りにね

「瑞希！送ってくよ！」

「大丈夫ですよ？」

「いいんだよ！僕が自分で行きたいと思ったんだから！」

「ありがとうございます！」

タッタッタッタ

き・ま・ず・い

これは本^{マッ}気で気まずいよ・・・

「明日楽しみだね」

「そうですね」

・・・

ちよっ、話し終わっちゃったよお！
どうでしょう・・・

「私・・・相手役が明久でよかったです！」

「え・・・僕も、相手が瑞希でよかったよ」

「フフフフフ／＼アハハハハ」

「あ、着いたね」

「ありがとうございました」

ガチャ

「あ、吉井君 送ってくれてありがとう」

「いえ、いいんですよ 瑞希のお父さん」

「うん？」

「え？あ、う・・・？」

「お義父さんでいいよ」

「お義父さん？」

お義父さんって・・・

ああ！！！！

「お父さん！」

「瑞希、いいんだよ（ニコッ）」

おお、なんとまぶしい笑顔・・・

「あ、ありがとうございました！また明日！」

「あ、うん」

ガチャ！

あははっ・・・
帰ろうつか

タタタタタ

ガチャ

「たっだいま〜！」

「お帰りなさい アキくん」

「うう・・・眠iiiiiii」

「おやすみなさい」

「おやすみいい」

翌日

んあ・・・
よく寝られた・・・

「おはよ」

「おはようございます、アキくん」

「ん、いただきまーす！」

パク・・・

モグモグ

ゴックン

×10

「ご馳走様」

「お粗末さまでした」

「いつてきまーっす!」

「アキくん、忘れ物ですよ」

「ん?何か忘れた?」

「行ってきますのチュ・・・」

ボタン!

何だあの姉は・・・

朝から何をしようというんだ

実の弟に

まいっか

タタタタタタタ

「瑞希!おはよう!」

「おはようございます!」

「今日かあ、そんな感じしないなあ」

「そうですね、今までがバタバタしてたからですかね？」

「かもね」

といってる間にも
文月学園に着いた

パカッ！ パスッ

見間違いつていうか
下駄箱間違えたかな？

パタン （吉井明久）
パカッ！

白い手紙が・・・？
ハートのシール？
ベタな・・・いやバカな・・・！

「明久・・・それは？」

「わかんない・・・」

ペラッ

” 吉井明久様へ
お久しぶりですわね

神矢ナナコです。

その節では、どうもすみませんでした・
どうか姫路瑞希と仲良く・・・

神矢ナナコ”

ええ・・・まさかの？

神矢さんから来るとは思わなかった・・・

あは・・アハハ・・・

！？これって・・・なぜ奈良から！？
転校先って奈良！？

「神矢さんから・・・」

「ええ！！！？？」

「何でだろうね・・・」

ガラッ！

「「おはよう！／おはようございます」「

「夫婦健在か」

「うらやましい！」

「俺にもあんな彼女がいたら・・・！」

「異端者には・・・」

うんうん、いつもどおり！

今日の演劇祭、真剣に取り組まなきゃ！

じゃなきゃ、皆に悪いし・・・

秀吉怖いし・・・

「そつだそつだ！」

「ムツツリーニ！写真を！」

「……もちろん」

「うおおおおおお、ムツツリーニ本^{マジ}気神だ！」

キニシナーイ

ナニモキコエナイヨー

さて、残すところ一時間となつたけど
開会式なんてみんな聞く人なんていないから
いるだけでいいかな？

または、どつかにいつてサボろうかな？

「サボるのはなしだぞ明久」

「なぜに！」

「そのまま劇に入るからな」

「でもさ、Fクラスは最後じゃなかったっけ？」

「そうだが、他のクラスも見ていておもしろいのもあるからな
クツ」

???

雄二が思い出し笑いをしている
どうしたんだろう??

ガラッ！

う？霧島さん？？

「翔子！？どうしつ——ぎゃあああああああ！——どうして俺の眼を突く！」

「……………浮気はダメ」

「なんのことだ！？」

「……………瑞希に見とれていたから」

「何だと雄二！貴様！！」

「誤解だ！それに翔子！目を突くなといったはずだ！」

「……………チヨキで突いちゃダメって言われたから……………パーで……………」

「かわらねえよ！？」

霧島さん、雄二の言葉に忠実だなあ

しかもチヨキでダメならパーって……………
パーもダメって言ったらグーできそうだよ？

「……………用事……………」

「何のようなんだ……………翔子……………」

雄二の覇気がなくなっている・・・
疲れたかな？

「・・・・・・・・これ・・・」

そういつて瑞希にあるものを渡していた
そうすると、瑞希の顔が緊張のおもむきから
驚きと喜びが混ざったような顔をしていた
一体何をもらったんだろ？

「瑞希、なにそれ？」

「前から約束していたんです！このイヤリングとネックレスを・・・」

「可愛いじゃない！瑞希に似合いそうね」

そういうと僕にそのイヤリングとネックレスを僕に見せてくれた
その中には、ピンクとシルバーで小さなハートをかたどったネックレスと

それにあわせるかのように、イヤリングもネックレスと同じピンク
とシルバーの

小さなハートのイヤリングだった

瑞希に似合いそうなものだと思った

「前からほしくて、翔子ちゃんに相談していたんです！駅前と同じ
ものがあつたから・・・」

「・・・・・・・・私の家にあつたの思い出したから、瑞希にあげようと

思ったの」

「優しいじゃないか翔子」

「／／／」

「翔子ちゃん！ありがとうございます」

「・・・・・・うん、いいの」

そういつて、霧島さんはFクラスを出て行った
Aクラスはなんに劇をやるんだろ？
かなり気になるなあ

「僕らの劇はこんな感じでいいのかな？」

「いいだろう、なんなら途中でアドリブ入れても構わんぞ？」

「そうじゃな、当たり前すぎてつまらなくなりそうじゃからのう」

「・・・・・・（スチャ）」

ムツツリーニは今まで見たことが無いような機材を取り出すと
雄二と秀吉のほうを向いて
アイコンタクトを取っている

「ムツツリーニ」

「・・・・・・なんだ？」

「無理やりハプニング起こさなくて大丈夫だからね？」

「……………！？そつ、そんなつもりはない」

「大丈夫だつて！」

「……………明久がハプニング起こすから？」

「アキならやりそうなことね」

「違う！！！」

無理やりハプニング起こすなんて……

やるわけないじゃん！！！！

ハプニング起こさないと盛り上がらないって……

それはないからね……

「「「なんだと！？／じゃと！？／ですつて！？」「」「」

「どうして驚くの！？それからどうして心の中で思ったことが分かるの！！！？？」

「それは親友（悪友）だからな」

「長い付き合いじゃからのう」

「……………コクリ」

「たいていのことはわかりやすいわ」

「そんな・・・明久・・・」

「瑞希？」

「木下君と長い付き合いって・・・！」

「瑞希！誤解してるよ！？長い付き合いって、友達としてだからね
！？」

「あ、そうなんですか・・・よかったあ」

瑞希が最近暴走しまくってる・・・
イケナイ方向に・・・
と、他愛もない話をしていると雄二が

「おっと、そろそろ開会式だな」

「ん、ほんとうだ」

「そうじゃな、そろそろ行ったほうがいいのう」

「・・・コクリ」

「楽しみね！」

「そうですね！！」

もうそんな時間になるんだ、
楽しみだなあ！！

第四十六話（後書き）

〃〃反省会〃〃

明「遅い！」

青「・・・・・・・・」

雄「どうした青龍」

青「・・・・・・・・」

秀「酷く落ち込んでいるようじゃが・・・」

青「・・・・・・・・」

ム「・・・・・・・・これが問題か」

青「・・・・・・・・」

ム「・・・・・・・・！？（ガーン）」

明「ムツツリーニが相手にされなくてショック受けてる・・・！」

雄「なんだって！？」

秀「なんじゃと！？」

美「どうしたのよ、青龍」

青「はあ……テスト……」

全「テストオオオオオ!!!???」

青「点数悪すぎなんだよお」

雄「どのくらいだ？」

青「高校一年のときの明久の成績ぐらい」

明&青以外「それは酷い!!!!!!」

明「それこそ酷いからね!？」

青「まだ2教科だけだぞさ……」

全「がんばれよ（ニヤリ）」

青「皆嫌いだああああ！！！」

美「一週間以上更新が遅れて申し訳ありませんでした」

瑞「これからもこの小説をよろしくお願いしますね」

青「皆さんも、テストで後悔しないためにがんばってくださいね」

秀「青龍みたいにならうづにのう」

青「……………!!!」(ガーン)

第四十七話

「・・・・・・・・・・であり・・・・・・・・・・なので・・・・・・・・・・ましょう・・・・・・・・・・」

ああ・・・・・・・・・眠い

なぜこのような必要としない演説を聞かなくてはならないのだろう・・・・・・・・

干物の話、実行委員から、注意事項、抱負、

これを聞いてて眠くならないものはないと思うけどな・・・・・・・・

あ、皆 カックン カックン してる

瑞希はすごいなあ、さっきから全然目をそらしてない・・・

雄二はもはや寝てるし、秀吉は得意のポーカーフェイスで眠そうなの隠してるし

ムツツリーニは居ないし、美波は今にも寝そうだね・・・

お、終わった

「ただいまから、演劇祭を開催いたします!」

「まず初めは2-Aの・・・・・・・・」

最後は聞き取れなかった

なぜなら?

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふわあああああ!!!!!!」

という皆のあくびの声が聞こえたから

ま、僕もその中の一人だけだね

「終わったな」

「居ろっていつておきながら雄二寝てるし」

「本当じゃのう」

「……そういう秀吉は寝かけてた」

「っていう土屋だって居なかったじゃない」

「島田は今にも寝そうな顔してたぞ？」

人それぞれ、っていうか

どうして雄二とムツツリー二は寝てたり、いなかったのに
分かるんだろう？？

「なにになに？2-A『白雪姫』か、主演は翔子！？王子は久保・
・・」

あ、雄二からドス黒いオーラが・・

「なぬ！？」

「どうしたの秀吉？・・・・・！！」

「姉上・・・・・」

「優子さん・・・魔女？　っていうか、秀吉も魔女役だったよね？」

「わしは、魔法使い役じゃぞ！？」

いいのいいの

あ、瑞希だ

「瑞希！」

「あ、あきひしゃ」

「うん、緊張ほぐそうね」

緊張しまくりだよ？

「でしゅけど、こんなに人がいっぱいじゃ、緊張もしましゅよ！」

「うんうん、他のクラスの劇を見て、緊張ほぐそうね」

2回噛んだね

緊張ほぐすいい方法はないかな？

「あきひしゃ・・・明久は緊張しないんでしゅ・・・ですか？」

言い直した！？

瑞希が言い直した！？

「緊張？してないよ」

「なんででしゅか？・・・」

諦めた！？

「うーん、いつも注目浴びることあったからね」

「悪い意味でな」

「雄二もね」

と、話しているうちに

2 - Aの劇が始まるうとしていた

「ただいまから、2 - A『白雪姫』が開幕します」

「パチパチパチパチ」

面白そうだなあ！

どんな劇を見せてくれるんだろう？

~~~~工藤愛子 SIDE~~~~

どうしよっかな

代表と久保君がすぐく乗り気じゃないんだよねえ  
役が決まった瞬間から・・・

練習中だつて

いきなり「貴方よりも雄二と結婚したい」って言い出しちゃうし  
久保君も「霧島さんより吉井君のほうg」

つていおうとしたら

「オラアアアア！……吉井は姫路さんと付き  
合ってるんじゃないあああああ！……」

「」

なーんて、感じで

一回も全部通せたこと無いんだよねえ・・・

そうそう！優子ってば魔女役結構はまってるんだよね！  
これは本番をお楽しみにつてことで

でも・・・大丈夫かな？

もう本番だし・・・

はあ、けど　ボクは小道具担当だから別に構わないけど

とりあえず、大事にならないといいなあゝアハハハハ

~~~~明久　SIDE~~~~

劇が始まった、最初は魔女の優子さんからだけど・・・
かなり適役だよ・・・

「鏡よ鏡、世界で一番美しいのは誰？」

「それは貴方様でございます」

「当然よね？フフフフ」

「ですが、木下秀吉　ゲフンゲフン　白雪姫が一番でございます」

「何ですって！？アタシより秀吉が！？じゃなくて、なんですって
！？

白雪姫め・・・!!」

「（怖っ!）」

優子さん・・・秀吉に嫉妬してもしようがなっ・・・

いやなんでもなかったことにしよう・・・

あ、次は霧島さんの出番だね

「・・・・・・・・ハアハア、私は白雪姫、今魔女から逃げてる途中なの」

疲れてるように見えない・・・

霧島さんでもそんなことってあるんだね・・・

「・・・・・・・・あ、あそこに家が、疲れちゃった　少し休もう・・・」

お、小人とうちゃくだね

「あれ!?開いてる!?!」

「閉めてきたよね?」

「ん!?誰か寝てるよ?」

「本当だ!誰だろう?」

「可愛い!」

感情が分かりやすくしゃべってるね
さすがAクラス!

「…………ふわぁ、あら、ごめんなさい」

「貴女は誰？」

「…………私は白雪姫よ」

「どうしてここに？」

「…………悪い魔女に追われてるの」

「私は隣の国から来た王子だ」

「白雪姫が…………死んじゃったんです…………！」

「！！それは残念だ、私からも別れを言ってもいいか？」

「どうぞ」

クライマックスだね！

今のところ、失敗とか見られないけど…………

「…………ふわぁぁ」

「うわっ！」

「…………あら？」

「こうして白雪姫と王子は結婚して、幸せに暮らしたm・・・」

「雄一と結婚したい」

「僕だって、吉井君も……」

「『吉井は姫路さんと付き合ってるんじゃないか』
あああああああ……！！！！！！！！！！」

え
”
!

つて、あ

雄一の顔が瑞希に負けないくらい赤くなっている

瑞希 真っ赤、可愛い！

っていうか、劇がこんなのでいいのかな？

あ、急いで幕を下ろしてる

ア
ハ
ハ
ハ
ハ

一番初めの劇がこんなじゃ、他のクラスはねえ．．．
おっと、次はBクラスだね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1496w/>

僕と失われた両目

2011年11月29日20時53分発行